尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

家の後Ⅰ遺跡
垣ノ内遺跡

２００３年３月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

家の後Ⅰ遺跡
垣ノ内遺跡

２００３年３月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所においては、『平成のおろち退治』といわれる斐伊川・神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水の調整及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダムの事業用地内の埋蔵文化財については、文化財保護の趣旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を行い、記録の保存につとめています。

尾原ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議をし、同教育委員会や木次町教育委員会、仁多町教育委員会の協力のもとに平成11年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成12～13年度に実施した「家の後Ⅰ遺跡」「垣ノ内遺跡」の調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただきました島根県教育委員会並び関係者各位に謝意を表します。

平成15年３月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所　長　田　中　　靖

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受けて平成11年度から、尾原ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このたび『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成12～13年度に実施した大原郡木次町の家の後Ⅰ遺跡及び垣ノ内遺跡での発掘調査の記録であります。家の後Ⅰ遺跡では、縄文時代中期～晩期にかけての多数の遺物が出土しました。また、垣ノ内遺跡では、斐伊川中上流域では有数の弥生時代の集落の姿が確かめられ、また、塩町式土器に垣間見える三次盆地を中心とした地域との交流について考える貴重な資料が得られました。本報告書がこの地域の歴史を解明していく糸口になり、郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたりご協力いただきました地元住民の方々、国土交通省中国地方整備局、木次町教育委員会、仁多町教育委員会、関係機関をはじめ関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

島根県教育委員会
教育長　広　沢　卓　嗣

例　　言

1．本書は国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成12年度と平成13年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県大原郡木次町大字北原字家の後293外　　家の後Ⅰ遺跡

島根県大原郡木次町大字北原字門720外　　垣ノ内遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

（平成12年度）垣ノ内遺跡現地調査

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）
内田　融（同総務課長）今岡　宏（同総務係長）
松本岩雄（同調査課長）

調査員　西尾克己（同第２係主幹）増田浩太（同主事）中野靖睦（同教諭兼文化財保護主事）名越顕秀（同教諭兼主事）山根洋子（同教諭兼主事）中井浩二（同教諭兼主事）古川和明（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）
伊藤　実（広島県立歴史民俗資料館主任学芸員）
竹廣文明（島根大学汽水域研究センター助手）
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
中村唯史（島根県環境生活部景観自然課主事）
蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）
林　正久（島根大学教育学部教授）

（平成13年度）家の後Ⅰ遺跡、垣ノ内遺跡現地調査

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）
内田　融（同総務課長）今岡　宏（同総務係長）
川原和人（同調査第２課長）

調査員　西尾克己（同調査第２課主幹）増田浩太（同主事）中井浩二（同教諭兼文化財保護主事）曽田　徹（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）
伊藤　実（広島県立歴史民俗資料館主任学芸員）
杉原清一（島根県文化財保護指導委員）
竹廣文明（島根大学汽水域研究センター助教授）
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
中村唯史（財団法人三瓶フィールドミュージアム財団指導課）
蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）
林　正久（島根大学教育学部教授）

山田康弘（島根大学法文学部助教授）

（平成14年度）家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡報告書作成

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

卜部吉博（同副所長）

内田　融（同総務課長）坂本淑子（同総務係長）

川原和人（同調査第２課長）

調査員　増田浩太（同主事）中井浩二（同教諭兼文化財保護主事）

4．発掘作業（発掘作業員雇用、重機借り上げ、発掘用具調達等）については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

（平成12年度）

〔現場担当〕簾　俊治（技術員）

〔事務担当〕藤井利恵（事務員）

（平成13年度）

〔現場担当〕簾　俊治（技術員）

〔事務担当〕藤井利恵（事務員）

5．現地調査及び資料整理に際しては、島根県教育庁文化財課、古代文化センター、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。また、調査指導をお願いした方々のほかに、多くの方から有益な御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

石田爲成（岡山県古代吉備文化財センター）、会下和宏（島根大学埋蔵文化財調査センター）、河瀬正利（広島大学大学院文学研究科教授）、坂本諭司（木次町教育委員会）、高尾昭浩（横田町教育委員会）、野津　旭（仁多町教育委員会）

6．挿図中北は、測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指す。また、平面直角座標系ＸＹ座標は、日本測地系による。レベル高は海抜高を示す。

7．第２図は建設省国土地理院発行の1/50,000図を使用した。第３、21図は建設省国土地理院の測量成果をもとに、建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所とワールド航測コンサルタント株式会社が作成した1/1,000図を使用した。第４、22、24図は有限会社創互技研が設置した基準杭を用いて、国際航業株式会社が製作した測量図をもとに、増田が修正加筆した。

8．図版２、17下、18は国際航業株式会社が撮影した。図版17上は平成６年３月の分布調査時に撮影、その他の写真は増田が撮影した。

9．本書に掲載した実測図は各調査員の他に、川原、久保田一郎、勝部喜代志、横木尚文、勝部悠美、松崎恵美子、石田爲成、神庭明広、佐々木順子、陶山佳代、瀬川恭子、錦織美千恵、山根るみ子が作成し、浄書は増田、佐々木、陶山、瀬川、錦織、山根が行った。

10．遺物整理・報告書作成作業は各調査員の他に、小豆澤典子、石原幸代、小野千歳、門脇卓子、佐々木、陶山、瀬川、高橋啓子、土谷美鈴、錦織、西村ひろみ、野田清美、広野節子、山根、横田典子、渡部恵子が行った。

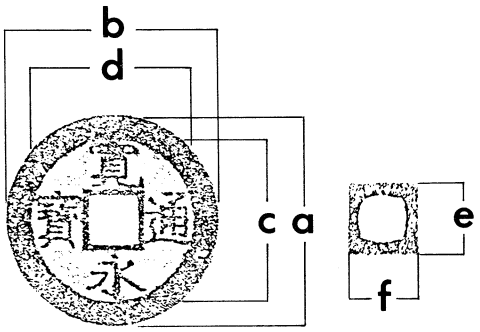
11．本書の執筆は第４章を除き調査員が分担して行い、その文責を目次に記した。また第４章第１・２節については藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に御執筆いただいた。

12. 家の後Ⅰ遺跡の土壌分析は、文化財コンサルタント株式会社（渡辺正巳氏）に委託し、第４章第３節に成果を収録した。また、垣ノ内遺跡の炭化材^{14}C 年代測定は、財団法人九州環境管理協会に委託した。

13. 本書の編集は各調査員の協力を得て増田が行った。

14. 本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡　　例



1　本文、挿図および写真図版の番号は一致する。

2　剥片石器・礫石器の計測は、最終剥離面の向きが確実に分かるものはそれに従い、不明なものは最大長を「長さ」、これに直交する最大幅を「幅」、両者が形成する面に対する最大厚を「厚さ」として行った。

3　出土銭の各計測位置は右図のとおりである。

4　遺構名は整理段階で下表のように変更した。

5　土器の時期決定は主として以下の文献を参考に増田が行った。弥生土器については、松本1992を用いたが、後期後葉（松本Ⅴ－４以降）については赤澤1992を採用した。

小林達夫編　1988『縄文土器大観』１～４　小学館
戸沢充則編　1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
角田徳幸　1998『板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
松本岩雄　1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社
赤澤秀則　1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　鹿島町教育委員会
大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11　島根考古学会
柳浦俊一　1995「出雲における須恵器の生産・流通と特質」『風土記の考古学３』同成社
柳浦俊一　2001「島根県東部（出雲）の切り離し技法と長頸壷頸部接合技法」『古代の土器研究－律令的土器様式の東・西６　須恵器の製作技法とその転換－』古代の土器研究会
広江耕史　1995「山陰の煮炊具　－出雲・石見－」『古代の土器研究－律令的土器様式の東・西４　煮炊具』古代の土器研究会
広江耕史　1992「島根県における中世土器の変遷について」『松江考古』８
橋本久和ほか　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
前山博ほか　1984『国内出土の肥前陶磁　古唐津・伊万里の流通を探る』佐賀県立九州陶磁文化館

旧　名　称	新名称	旧　名　称	新名称	旧　名　称	新名称
SI01･07	SI01･07	P04、25、、07	SB05	遺構10	SK13
SI02･04	SI02･04	P04、05、06、07	SB05	遺構4	SK14
SI03	SI03	P14、16、17	SB06	AYDD、AYDD2、AYDD3、A 区東側土器溜り	AYD1
SI05･08	SI05･08	P10、18、BP11、BP06、	SB07	土器溜り11	土器溜り11
SI06	SI06	P10、18、BP09、BDP1、	SB07	土器溜り12	土器溜り12
SI09	SI09	AKDD2	硬化面1	DYDD	DYD1
MZ11	SI10	BKDD2	硬化面2	土器溜り9	土器溜り9
MZ12	SI11	遺構1	遺構1	土器溜り10	土器溜り10
I11M	SI12	SK02	SK02	土器溜り1･2･3	土器溜り1･2･3
遺構11	SI13	遺構5･6･7、遺構8、土器溜り9	遺構8	AKDD	AKDD
SD3(2001)	SI14		SB09	土器溜り4･5･6	土器溜り4･5･6
MZ7(2001)	SI15	SK10	SK10	土器溜り7	土器溜り7
遺構9	SI16	SD01(2001)	SK	DKDD	整理の結果統合、消滅
遺構2	遺構2	SK01	SK01	SD04(2001)	整理の結果統合、消滅
遺構2、P25、26、30、33、34、35、36、51	加工段1	SD02	SD02	SD05(2001)	整理の結果統合、消滅
P37、38、39、41、42、43、44、45、47、48、51、53、55	SB01･02	遺構13(I13)	加工段4	SD06(2001)	整理の結果統合、消滅
P206、207、208、209、211、212、213	SB03	WC	埋桶遺構1	SK13	整理の結果統合、消滅
BKDD、CKDD	加工段2	WC2、WC3	埋桶遺構2･3	C 区畦横土器溜り	整理の結果統合、消滅
P04、24、26、28	SB05	遺構3	SK12		

本文目次

第1章　調査経緯

第1節　発掘調査の経緯 …… 増田　浩太 …… 2

第2節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 名越　顕秀 …… 3

第2章　家の後Ⅰ遺跡　増田　浩太

第1節　調査の経過と概要 …… 10

第2節　家の後Ⅰ遺跡の基本層位 …… 11

第3節　出土遺構 …… 12

第4節　出土遺物 …… 12

第5節　まとめ …… 15

第3章　垣ノ内遺跡　増田　浩太

第1節　調査の経過と概要 …… 44

第2節　垣ノ内遺跡の基本層位 …… 46

第3節　調査結果 …… 50

第4節　包含層出土遺物 …… 123

第5節　まとめ …… 150

第4章　自然科学的分析

第1節　家の後Ⅰ遺跡出土サヌカイト製遺物および
黒曜石製遺物の原材産地分析 …… 藁科　哲男 …… 3

第2節　垣ノ内遺跡出土サヌカイト製遺物および
黒曜石製遺物の原材産地分析 …… 藁科　哲男 …… 9

第3節　家の後Ⅰ遺跡発掘調査に係る花粉、植物珪酸体分析 …… 渡辺　正巳 …… 31

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　周辺の遺跡（S＝1/50,000） …… 8
第３図　家の後Ⅰ遺跡位置図（S＝1/1,000） …… 19
第４図　家の後Ⅰ遺跡調査後測量図（S＝1/400） …… 20
第５図　家の後Ⅰ遺跡土層図（上図S＝1/80、下図S＝3/400） …… 21
第６図　家の後Ⅰ遺跡遺物出土状況図１（S＝1/400） …… 22
第７図　家の後Ⅰ遺跡遺物出土状況図２（S＝1/300） …… 23
第８図　家の後Ⅰ遺跡遺物出土状況図３（S＝1/300） …… 24
第９図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器１（S＝1/3） …… 25
第10図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器２（S＝1/3） …… 26
第11図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器３（S＝1/3） …… 27
第12図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器４（S＝1/3） …… 28
第13図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器５（S＝1/3） …… 29
第14図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器６（S＝1/3） …… 30
第15図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器７（S＝1/3） …… 31
第16図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器８（S＝1/3） …… 32
第17図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器９・石器１（１はS＝1/3、２～９はS＝2/3） …… 33
第18図　家の後Ⅰ遺跡出土石器２（S＝1/3） …… 34
第19図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文時代以降の土器（S＝1/3） …… 35
第20図　家の後Ⅰ遺跡出土銭（S＝1/1） …… 36
第21図　垣ノ内遺跡位置図（S＝1/2,000） …… 45
第22図　垣ノ内遺跡遺構配置図、調査区分図（S＝1/400） …… 47～48
第23図　垣ノ内遺跡土層図（S＝1/80） …… 49
第24図　垣ノ内遺跡調査後測量図（S＝1/400） …… 51～52
第25図　垣ノ内遺跡SI01・07実測図（S＝1/60） …… 54
第26図　垣ノ内遺跡SI01・07出土遺物（１～16はS＝1/4、17はS＝2/3） …… 55
第27図　垣ノ内遺跡SI02・04実測図（S＝1/40） …… 56
第28図　垣ノ内遺跡SI02・04出土遺物（１～９はS＝1/4、10はS＝1/2） …… 57
第29図　垣ノ内遺跡SI02・04遺物出土状況図 …… 57
第30図　垣ノ内遺跡SI03実測図（S＝1/40） …… 58
第31図　垣ノ内遺跡SI03出土遺物（S＝1/4） …… 58
第32図　垣ノ内遺跡SI03遺物出土状況図 …… 58
第33図　垣ノ内遺跡SI05・08実測図（S＝1/60） …… 59
第34図　垣ノ内遺跡SI05・08出土遺物（S＝1/4） …… 60
第35図　垣ノ内遺跡SI05・08遺物出土状況図 …… 60
第36図　垣ノ内遺跡SI06実測図（S＝1/40） …… 61
第37図　垣ノ内遺跡SI06出土遺物（S＝1/4） …… 62
第38図　垣ノ内遺跡SI06遺物出土状況図 …… 62
第39図　垣ノ内遺跡SI09実測図（S＝1/40） …… 63
第40図　垣ノ内遺跡SI09出土遺物（S＝1/4） …… 63
第41図　垣ノ内遺跡SI10実測図（S＝1/40） …… 64
第42図　垣ノ内遺跡SI11実測図（S＝1/40） …… 64

第43図　垣ノ内遺跡 SI12実測図（S＝1/60）…… 65
第44図　垣ノ内遺跡 SI13（遺構11）実測図（S＝1/40）…… 66
第45図　垣ノ内遺跡 SI13（遺構11）出土遺物（1～7はS＝1/4、8・9はS＝1/2）…… 67
第46図　垣ノ内遺跡 SI13（遺構11）出土炭化材、遺物出土状況図（1はS＝1/3）…… 68
第47図　垣ノ内遺跡 SI14実測図（S＝1/40）…… 70
第48図　垣ノ内遺跡 SI15実測図（S＝1/40）…… 70
第49図　垣ノ内遺跡 SI16（遺構9）実測図（S＝1/40）…… 70
第50図　垣ノ内遺跡 SI16（遺構9）出土遺物（S＝1/4）…… 70
第51図　垣ノ内遺跡遺構2実測図（S＝1/80）…… 72
第52図　垣ノ内遺跡遺構2遺物出土状況図 …… 73
第53図　垣ノ内遺跡遺構2出土遺物1（S＝1/4）…… 74
第54図　垣ノ内遺跡遺構2出土遺物2（1～24はS＝1/4、25はS＝1/2）…… 75
第55図　垣ノ内遺跡加工段1実測図（S＝1/40）…… 76
第56図　垣ノ内遺跡 SB01・02実測図（S＝1/40）…… 77
第57図　垣ノ内遺跡 SB03実測図（S＝1/80）…… 78
第58図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）実測図（S＝1/60）…… 79
第59図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）遺物出土状況図中心部 …… 80
第60図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）遺物出土状況図 …… 81
第61図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）出土遺物（S＝1/4）…… 82
第62図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）出土遺物2（S＝1/4）…… 83
第63図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）出土遺物3（1はS＝1/6、2はS＝1/2）… 84
第64図　垣ノ内遺跡加工段2（BKDD、CKDD）出土遺物4（1～9はS＝1/4、10はS＝1/2）
…… 85
第65図　垣ノ内遺跡 SB05・06・07実測図（S＝1/80）…… 86
第66図　垣ノ内遺跡加工段3（CKDD2）実測図（S＝1/80）…… 87
第67図　垣ノ内遺跡加工段3（CKDD2）出土遺物（S＝1/4）…… 88
第68図　垣ノ内遺跡加工段3（CKDD2）遺物出土状況図 …… 88
第69図　垣ノ内遺跡硬化面1（AKDD2）実測図（S＝1/40）…… 89
第70図　垣ノ内遺跡硬化面1（AKDD2）出土遺物（1はS＝1/2、2～9はS＝1/4）…… 89
第71図　垣ノ内遺跡硬化面1（AKDD2）遺物出土状況図 …… 90
第72図　垣ノ内遺跡硬化面2（BKDD2）実測図（S＝1/40）…… 91
第73図　垣ノ内遺跡硬化面2（BKDD2）出土遺物（1～11はS＝1/4、12・13はS＝1/2）… 92
第74図　垣ノ内遺跡硬化面2（BKDD2）遺物出土状況図 …… 92
第75図　垣ノ内遺跡遺構1実測図（S＝1/40）…… 93
第76図　垣ノ内遺跡遺構1出土遺物（S＝1/4）…… 93
第77図　垣ノ内遺跡遺構1遺物出土状況図 …… 94
第78図　垣ノ内遺跡 SK02実測図（S＝1/40）…… 94
第79図　垣ノ内遺跡 SK02出土遺物（S＝1/4）…… 95
第80図　垣ノ内遺跡 SK02遺物出土状況図 …… 95
第81図　垣ノ内遺跡遺構8実測図（S＝1/40）…… 96
第82図　垣ノ内遺跡遺構8出土遺物（S＝1/4）…… 96
第83図　垣ノ内遺跡遺構8遺物出土状況図 …… 96
第84図　垣ノ内遺跡 SB09実測図（S＝1/60）…… 97
第85図　垣ノ内遺跡 SK10実測図（S＝1/20）…… 98
第86図　垣ノ内遺跡 SK20実測図（S＝1/40）…… 98

第87図　垣ノ内遺跡 SK01実測図（S＝1/40）…… 98
第88図　垣ノ内遺跡 SD01実測図（S＝1/40）…… 99
第89図　垣ノ内遺跡 SD02実測図（S＝1/40）…… 99
第90図　垣ノ内遺跡加工段４実測図（S＝1/40）…… 99
第91図　垣ノ内遺跡埋桶遺構１実測図（S＝1/40）…… 101
第92図　垣ノ内遺跡埋桶遺構２・３実測図（S＝1/40）…… 101
第93図　垣ノ内遺跡 SK12・13・14実測図（S＝1/40）…… 101
第94図　垣ノ内遺跡土器溜り位置図（S＝1/600）…… 102
第95図　垣ノ内遺跡土器溜り AYD１（AYDD）遺物出土状況図 …… 104
第96図　垣ノ内遺跡土器溜り AYD１（AYDD）出土遺物１（S＝1/4）…… 105
第97図　垣ノ内遺跡土器溜り AYD１（AYDD）出土遺物２（S＝1/4）…… 106
第98図　垣ノ内遺跡土器溜り11遺物出土状況図 …… 106
第99図　垣ノ内遺跡土器溜り11出土遺物（S＝1/4）…… 107
第100図　垣ノ内遺跡土器溜り12遺物出土状況図 …… 108
第101図　垣ノ内遺跡土器溜り12出土遺物（S＝1/4）…… 109
第102図　垣ノ内遺跡 DYD１（DYDD）実測図（S＝1/20）…… 110
第103図　垣ノ内遺跡 DYD１（DYDD）遺物出土状況図 …… 110
第104図　垣ノ内遺跡 DYD１（DYDD）出土遺物１（S＝1/4）…… 111
第105図　垣ノ内遺跡 DYD１（DYDD）出土遺物２（S＝1/4）…… 112
第106図　垣ノ内遺跡土器溜り９遺物出土状況図 …… 112
第107図　垣ノ内遺跡土器溜り10遺物出土状況図 …… 112
第108図　垣ノ内遺跡土器溜り９・10出土遺物（S＝1/4）…… 113
第109図　垣ノ内遺跡土器溜り１・２・３実測図（S＝1/30）…… 114
第110図　垣ノ内遺跡土器溜り３遺物出土状況図 …… 114
第111図　垣ノ内遺跡土器溜り１・２・３遺物出土状況図 …… 115
第112図　垣ノ内遺跡土器溜り１・２・３出土遺物１（S＝1/4）…… 116
第113図　垣ノ内遺跡土器溜り１・２・３出土遺物２（S＝1/4）…… 117
第114図　垣ノ内遺跡 AKDD 実測図（S＝1/40）…… 118
第115図　垣ノ内遺跡 AKDD 遺物出土状況図 …… 118
第116図　垣ノ内遺跡 AKDD 出土遺物（S＝1/4）…… 119
第117図　垣ノ内遺跡土器溜り４・５・６遺物出土状況図 …… 120
第118図　垣ノ内遺跡土器溜り７遺物出土状況図 …… 120
第119図　垣ノ内遺跡土器溜り４・５・６・７出土遺物（S＝1/4）…… 121
第120図　垣ノ内遺跡出土縄文土器１（S＝1/3）…… 125
第121図　垣ノ内遺跡出土縄文土器２（S＝1/3）…… 126
第122図　垣ノ内遺跡出土縄文土器３（S＝1/3）…… 127
第123図　垣ノ内遺跡出土縄文土器４（S＝1/3）…… 128
第124図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）１（S＝1/4）…… 130
第125図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）２（S＝1/4）…… 131
第126図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）３
（１～19・22は S＝1/4、20・21は S＝1/3、23は S＝2/3）…… 132
第127図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（塩町系）４（S＝1/4）…… 133
第128図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）５（S＝1/4）…… 134
第129図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（中期）６（S＝1/4）…… 135
第130図　垣ノ内遺跡出土弥生土器（後期～古墳初）７（S＝1/4）…… 136

第131図　垣ノ内遺跡出土須恵器１（S＝1/4）…… 139
第132図　垣ノ内遺跡出土須恵器２（S＝1/4）…… 140
第133図　垣ノ内遺跡出土須恵器３（S＝1/4）…… 141
第134図　垣ノ内遺跡出土土師器１（S＝1/4）…… 142
第135図　垣ノ内遺跡出土土師器２（S＝1/4）…… 143
第136図　垣ノ内遺跡出土土師器３・白磁・青花等（S＝1/3）…… 144
第137図　垣ノ内遺跡出土手づくね・製塩土器・丹塗土器（S＝1/4）…… 146
第138図　垣ノ内遺跡出土石器１・鉄器（S＝1/3）…… 148
第139図　垣ノ内遺跡出土石器２（１～９はS＝2/3、10～16はS＝1/2）…… 149
第140図　垣ノ内遺跡出土銭（S＝1/1）…… 150

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧表 …… 7
表２　家の後Ⅰ遺跡出土土器観察表 …… 36～39
表３　家の後Ⅰ遺跡出土打製・磨製石製品観察表 …… 39
表４　家の後Ⅰ遺跡出土剥片石器、二次加工剥片、剥片観察表 …… 39～40
表５　家の後Ⅰ遺跡出土礫石器観察表 …… 40
表６　家の後Ⅰ遺跡出土銭観察状 …… 40
表７　家の後Ⅰ遺跡出土石錘観察表 …… 41
表８　家の後Ⅰ遺跡出土弥生時代以降の遺物一覧表 …… 42
表９　垣ノ内遺跡出土竪穴住居計測表 …… 157～159
表10　垣ノ内遺跡出土掘建柱建物計測表 …… 160～161
表11-1　垣ノ内遺跡出土遺物総覧１ …… 162
表11-2　垣ノ内遺跡出土遺物総覧２ …… 163
表12　垣ノ内遺跡遺構別出土遺物数量表 …… 164～165
表13　垣ノ内遺跡出土土器観察表 …… 166～180
表14　垣ノ内遺跡遺構出土石器、鉄器観察表 …… 181
表15　垣ノ内遺跡出土剥片石器観察表 …… 181
表16　垣ノ内遺跡出土二次加工剥片、剥片観察表 …… 182～183
表17　垣ノ内遺跡出土石斧類観察表 …… 183
表18　垣ノ内遺跡出土砥石観察表 …… 183
表19　垣ノ内遺跡出土石錘観察表 …… 184
表20　垣ノ内遺跡出土銭観察表 …… 185
表21　垣ノ内遺跡出土礫石器観察表 …… 186
表22　垣ノ内遺跡出土金属製品観察表 …… 186

グラフ目次

グラフ１　家の後Ⅰ遺跡出土石錘形態別割合 …… 41
グラフ２　家の後Ⅰ遺跡出土石錘重量別分布 …… 42

グラフ３　垣ノ内遺跡出土石錘形態別割合 …… 185
グラフ４　垣ノ内遺跡出土石錘重量別分布 …… 185

写真図版目次

図版１　上：家の後Ⅰ遺跡調査前風景（北東から）　下：調査風景
図版２　上：調査後空撮（南西から）　下：調査後空撮（北西から）
図版３　上：調査後近景（東から）　下：三瓶太平山降下火山灰検出状況
図版４　上：Ⅱ区セクション　下：縄文土器出土状況
図版５　上：C 層縄文土器出土状況（東から）　下：粗製深鉢出土状況
図版６　上：包含層出土縄文土器１　下：包含層出土縄文土器２
図版７　上：包含層出土縄文土器３　下：包含層出土縄文土器４
図版８　包含層出土縄文土器５
図版９　上：包含層出土縄文土器６　下：包含層出土縄文土器７
図版10　上：包含層出土縄文土器８　中：包含層出土縄文土器９　下：包含層出土縄文土器10
図版11　上：包含層出土縄文土器11　中：包含層出土縄文土器12　下：包含層出土縄文土器13
図版12　上：包含層出土縄文土器14　中：包含層出土縄文土器15　下：包含層出土縄文土器16
図版13　上：包含層出土縄文土器17　中：包含層出土縄文土器18　下：包含層出土縄文土器19
図版14　包含層出土縄文土器20
図版15　上：包含層出土石器１　中：包含層出土石器２　下：包含層出土石器３
図版16　上：包含層出土縄文土器・弥生土器・須恵器　下：包含層出土須恵器・土師質土器・煙管
図版17　上：調査前の垣ノ内遺跡（南から）平成６年３月　下：調査前空撮（南から）平成11年12月
図版18　上：平成12年度調査後全景（北西から）　下：平成13年度調査後全景（南から）
図版19　上：SI01・07完掘状況（南から）　下：SI01・07完掘状況（北から）
図版20　上：SI01・07出土遺物　下：SI01・07出土遺物
図版21　上：SI02・04半裁状況（北から）　下：SI02・04全景（北から）
図版22　上：SI02・04完掘状況（南から）　下：SI02・04出土遺物
図版23　上：SI03完掘状況（南から）　下：SI02・04、SI03出土遺物
図版24　上：SI05・08半裁状況（南から）　下：SI05・08完掘状況（南から）
図版25　上：SI05・08出土遺物　下：SI06完掘状況（南から）
図版26　上：SI06セクション遺物出土状況（東から）　下：SI06出土遺物
図版27　上：SI09完掘状況（北から）　下：SI06、SI09出土遺物
図版28　上：SI10・11・12完掘状況（南から）　下：SI10・11・12完掘状況（北から）
図版29　上：SI10・11完掘状況（北から）　下：SI11近景
図版30　上：SI13遺物出土状況（南東から）　下：SI13遺物出土状況（東から）
図版31　上：SI13東側炭化材集中部　下：SI13西側炭化材集中部
図版32　上：SI13出土遺物　下：SI13出土鉄斧・炭化材
図版33　上：SI14出土状況（南西から）　下：SI15完掘状況（北から）
図版34　上：SI16出土状況・完掘状況　下：SI16出土遺物
図版35　上：遺構２西側遺物出土状況（南から）　下：遺構２西側遺物出土状況近景
図版36　上：遺構２西側遺物出土状況（南から）　下：遺構２加工段Ⅰ完掘状況（西から）
図版37　上：遺構２出土遺物　下：遺構２出土遺物

図版38　上：遺構２出土遺物　下：遺構２出土遺物
図版39　遺構２出土遺物
図版40　上：SB01・02完掘状況（南から）　下：SB01・02完掘状況（東から）
図版41　上：SB03完掘状況（南から）　下：Ⅰ・Ⅱ区作業風景
図版42　上：加工段２遺物出土状況（東から）　下：加工段２遺物出土状況近景
図版43　上：加工段２竈・甕出土状況（南から）　下：加工段２竈・甕出土状況（西から）
図版44　上：加工段２西側遺物出土状況（南から）　下：加工段２西側遺物出土状況近景
図版45　上：加工段２完掘状況（西から）　下：加工段２セクション（東から）
図版46　加工段２出土遺物
図版47　加工段２出土遺物
図版48　加工段２出土遺物
図版49　加工段２出土遺物
図版50　加工段２出土遺物
図版51　上：SB05・06検出状況（東から）　下：SB05・06・07完掘状況（西から）
図版52　上：加工段３遺物出土状況（北から）　下：加工段３近景
図版53　加工段３出土遺物
図版54　上：硬化面１検出状況（東から）　下：硬化面１遺物出土状況（西から）
図版55　硬化面１出土遺物
図版56　上：硬化面２出土状況・セクション（東から）　下：硬化面２遺物出土状況
図版57　硬化面２出土遺物
図版58　硬化面２・遺構１出土遺物
図版59　上：遺構１完掘状況（西から）　下：SK02遺物出土状況（北から）
図版60　上：SK02出土遺物　下：SK02出土遺物
図版61　上：SK02出土遺物　下：遺構８遺物出土状況
図版62　上：遺構８出土遺物　下：SB09完掘状況（西から）
図版63　上：埋桶遺構１（南から）　下：埋桶遺構１半裁状況（南から）
図版64　上：埋桶遺構３（南から）　下：埋桶遺構３近景
図版65　上：SK12完掘状況（西から）　下：SK12完掘状況（南から）
図版66　上：SK13完掘状況（東から）　下：SK14完掘状況（南から）
図版67　上：AYD１遺物出土状況（西から）　下：AYD１遺物出土状況（東から）
図版68　上：AYD１高坏・甕出土状況　下：AYD１高坏出土状況
図版69　AYD１遺物出土状況近景
図版70　上：AYD１出土遺物　下：AYD１出土遺物
図版71　AYD１出土遺物
図版72　AYD１出土遺物
図版73　上：土器溜り11遺物出土状況（西から）　下：土器溜り11出土遺物
図版74　上：土器溜り11出土遺物　下：土器溜り11出土遺物
図版75　上：土器溜り12遺物出土状況（西から）　下：土器溜り12遺物出土状況近景
図版76　上：土器溜り12遺物出土状況近景　下：土器溜り12出土遺物
図版77　土器溜り12出土遺物
図版78　上：DYD１出土状況（西から）　下：DYD１出土遺物
図版79　DYD１出土遺物
図版80　上：DYD１出土遺物　下：土器溜り９・10出土遺物
図版81　上：土器溜り９・10出土遺物　下：土器溜り９・10出土遺物
図版82　上：土器溜り10遺物出土状況（東から）　下：土器溜り１遺物出土状況（南から）

図版83　上：土器溜り２遺物出土状況（南から）　下：土器溜り３遺物出土状況（東から）
図版84　上：土器溜り３遺物出土状況（西から）　下：土器溜り３遺物出土状況近景
図版85　土器溜り１・２・３出土遺物
図版86　土器溜り１・２・３出土遺物
図版87　上：土器溜り１・２・３出土遺物　下：AKDD 遺物出土状況（西から）
図版88　AKDD 出土遺物
図版89　上：AKDD 出土遺物　下：土器溜り５出土遺物状況（西から）
図版90　上：土器溜り６遺物出土状況（西から）　下：土器溜り４・５・６・７出土遺物
図版91　土器溜り４・５・６・７出土遺物
図版92　上：包含層出土縄文土器　下：包含層出土縄文土器
図版93　上：包含層出土縄文土器　下：包含層出土縄文土器
図版94　上：包含層出土縄文土器　下：包含層出土縄文土器
図版95　上：包含層出土縄文土器　下：包含層出土縄文土器
図版96　包含層出土縄文土器
図版97　上：包含層出土縄文土器　下：包含層出土縄文土器
図版98　上：包含層出土縄文土器　下：包含層出土弥生土器（中期）
図版99　包含層出土弥生土器（中期）
図版100　上：包含層出土弥生土器（中期）　下：包含層出土弥生土器（中期）
図版101　上：包含層出土弥生土器（中期）　下：包含層出土弥生土器（中期）
図版102　上：包含層出土弥生土器（中期）　下：包含層出土弥生土器（中期）
図版103　包含層出土弥生土器（中期・塩町系）
図版104　上：包含層出土弥生土器（塩町系）　下：包含層出土弥生土器（塩町系）
図版105　包含層出土弥生土器（塩町系）
図版106　上：包含層出土弥生土器（中期）　下：包含層出土弥生土器（中期）
図版107　上：包含層出土弥生土器（中期・高坏）　下：包含層弥生土器（中期・高坏）出土状況
図版108　上：包含層出土弥生土器（中期）　下：包含層出土弥生土器（中期）
図版109　包含層出土弥生土器（中期・後期）
図版110　上：包含層出土弥生土器（後期）　下：包含層出土弥生土器（後期）
図版111　上：包含層出土弥生土器（後期）　下：包含層出土弥生土器（後期）
図版112　包含層出土須恵器
図版113　包含層出土須恵器
図版114　上：包含層出土須恵器　下：包含層須恵器出土状況
図版115　上：包含層出土須恵器　下：包含層出土須恵器
図版116　包含層出土須恵器
図版117　上：包含層出土須恵器　下：包含層出土須恵器
図版118　包含層出土須恵器
図版119　包含層出土土師器
図版120　上：包含層出土土師器　下：包含層出土土師器
図版121　上：包含層出土土師器　下：包含層出土土師器
図版122　上：包含層出土土師器　下：包含層出土土師器・手づくね土器
図版123　上：包含層出土手づくね土器・丹塗り土器　下：包含層出土丹塗り土器・土錘
図版124　包含層出土手づくね土器・丹塗り土器
図版125　上：包含層出土石器　下：包含層出土石器
図版126　上：包含層出土鉄器　下：包含層出土石器
図版127　上：包含層出土陶磁器　下：包含層出土石器

第４章　第１・２節　図表目次

図１　黒曜石原産地 …… 15
図２　サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地 …… 16

表１－１　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 17
表１－２　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 18
表１－３　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 19
表１－４　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 20
表１－５　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 21
表１－６　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 22
表２－１　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 23
表２－２　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 24
表２－３　原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値標準偏差値 … 25
表２－４　原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値標準偏差値 … 26
表３　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果 …… 27
表４　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果 …… 27
表５　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果 …… 27
表６－１Ａ　家の後Ⅰ遺跡出土安山岩製石器の元素比分析結果 …… 28
表６－２Ａ　家の後Ⅰ遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果 …… 28
表６－１Ｂ　垣ノ内遺跡出土安山岩製石器の元素比分析結果 …… 28
表６－２Ｂ　垣ノ内遺跡出土黒曜石製他石器の元素比分析結果 …… 28
表７Ａ　家の後Ⅰ遺跡出土の安山岩製、黒曜石製石器の原産地推定結果 …… 29
表７Ｂ　垣ノ内遺跡出土の安山岩製、黒曜石製石器の原産地推定結果 …… 29

第４章　第３節　図表目次

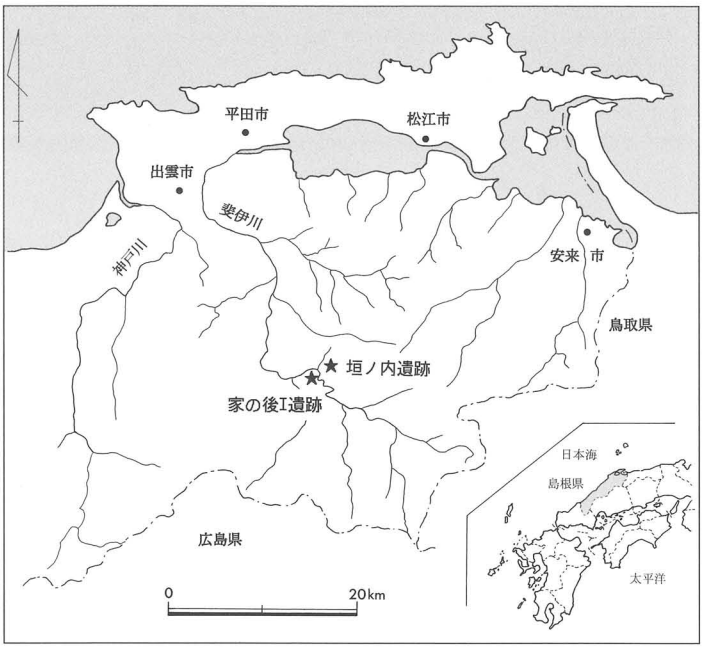
図１　試料採取地点 …… 31
図２　試料採取層準 …… 31
図３　花粉ダイアグラム …… 32
図４　植物珪酸体ダイアグラム …… 33
表１　花粉化石組成表 …… 32
表２　植物珪酸体化石組成表 …… 33
表３　植物概査結果一覧表 …… 34

調査経緯

第１章　調査経緯

第１節　発掘調査の経緯

斐伊川の治水事業は出雲地域長年の課題である。斐伊川が現在のように宍道湖に流れ込むようになって以来、この典型的な天井川に対して様々な治水対策が講じられてきた。しかし昭和47年の大洪水では、下流の出雲平野や大橋川流域が甚大な被害を受けるにおよび、抜本的な対策に迫られることとなった。



第１図　遺跡の位置

昭和51年、「斐伊川水系工事実施基本計画改定案」が公示され、いわゆる「治水３点セット」（①斐伊川、神戸川上流におけるダムの建設、②中流の斐伊川放水路建設と斐伊川の改修、③下流の大橋川改修と中海・宍道湖湖岸の整備）を基本とした治水対策が具体化した。尾原ダムは、この計画に基づき斐伊川上流の大原郡木次町・仁多郡仁多町に計画された多目的ダムである。尾原ダム建設事業は、平成３年10月の「尾原ダム建設事業に伴う基本協定書」調印を経て着手され、平成５年12月には水源地域対策特別措置法のダム指定を受けた。翌平成６年２月には「尾原ダム建設に関する基本計画」が公示され、現在建設が進められている。

平成３年６月、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所　以下同じ）から島根県教育委員会に対し、埋蔵文化財調査の依頼があった。これを受けて、島根県教育委員会では、平成５年３月と平成６年３月の２回にわたり分布調査を実施した。木次町教育委員会と仁多町教育委員会の協力を得て行われたこの調査で、合計81か所の遺跡及び要確認調査地を設定した。

平成10年12月、遺跡の範囲確認調査を平成11年度から実施することが決定した。また、島根県教育委員会、木次町教育委員会、仁多町教育委員会の三者で協議を行い、①確認のため再度分布調査を行うこと、②当初は基本的にダム本体部分を県が調査し、残土処理場や付替え道路等の付帯設備部分は両町が対応すること、③今後の調査分担は調査状況や各機関の調査体制に応じて調整すること、の３点を確認した。平成11年３月に行われた２度目の分布調査では、新たに32か所の遺跡及び要確認調査地を設定した。これにより、遺跡および要確認調査地は合計113か所となった。

平成11年度、島根県教育委員会は29か所の範囲確認調査を実施し、本報告書収録の家の後Ｉ遺跡、垣ノ内遺跡を含む11か所について全面発掘調査が必要と判断した。

平成12年度には、垣ノ内遺跡を含む２か所の全面発掘調査を行うとともに、20か所の確認調査を

実施した。垣ノ内遺跡では弥生時代中期から後期末の竪穴住居を中心とする遺構、遺物が多数出土した。また、遺跡が調査区の北側にさらに続いていることが明らかとなったため、翌平成13年度に追加調査を行うことが決まった。この年の９月には、仁多町前布施において工事中に遺跡（寺仏山横穴墓）が発見され、仁多町教育委員会により急遽発掘調査が行われた。こうした工事中の発見が続けば、建設工事や発掘調査の進行に支障が出るとの観点から、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所より工事箇所の再踏査が提案された。また一方で、数年間の調査成果からこの地域の遺跡の立地傾向が徐々に明らかになりつつあった。そこで平成13年３月に再々度の分布調査を実施した。この調査で新たに２か所の要確認調査地が登録された。

平成13年度には、家の後Ⅰ遺跡、垣ノ内遺跡追加調査分を含む６遺跡の全面発掘調査と３か所の範囲確認調査が実施された。範囲確認調査では１か所が全面発掘調査と決まった。家の後Ⅰ遺跡では、縄文時代の斐伊川河岸を検出し、それに伴って縄文時代後期から晩期の土器などが出土した。９月から行った垣ノ内遺跡の追加調査では、弥生時代中期後半の焼失住居をはじめとする竪穴住居、加工段などを確認した。

本書は、平成13年度調査の家の後Ⅰ遺跡、平成12・13年度調査の垣ノ内遺跡の報告である。

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

尾原ダムは、大原郡木次町平田にダムサイトを築いて斐伊川の本流を堰き止めるものであり、貯水池の範囲は町境を越えて仁多郡仁多町三成に及ぶ。尾原ダムの建設事業はしばしば、「平成のオロチ退治」と称せられるが、付近は、『古事記』や『日本書紀』に記述のある、スサノオ（須佐之男命・素戔嗚尊）による八岐大蛇退治伝説の故地である。

出雲地方南部を雲南と称するが、大原・仁多両郡は、その雲南地方に属する。『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）によれば、大原郡は神原・屋代・屋裏・佐世・阿用・海潮・来次・斐伊の８郷で構成され、『和名抄』はその８郷に大原郷を加える。一方仁多郡は、『風土記』は三処・布勢・三沢（三津とする説も有力）・横田の４郷を載せ、『和名抄』はその４郷に漆仁・阿位の２郷を加える。漆仁・阿位の２郷は、三沢郷から分立したものと推定されている。なお、ダムサイトの建設予定地である木次町平田は、昭和30年に木次町・日登村と合併する以前は仁多郡温泉村に属しており、旧温泉村の村域は『和名抄』の漆仁郷とほぼ等しい。従って、ダム湖に水没したり、道路などダム関連工事が行われる範囲は、『風土記』でいう仁多郡の４郷のうち、横田郷を除いた各郷に及ぶことになり、この事業がこの地域に与える影響は少なからぬものになるであろう。

仁多郡の郡名は、大国主命（大穴持命）が「此の国は大きくも非ず小さくも非ず。…是は尓多志枳小国在り」と述べたことに由来すると、『風土記』は伝えている。小ぢんまりとして水田耕作に適した肥沃な土地、と言った意味である。現況は過疎化の進んだ典型的な中山間地になっているが、以下では周辺の遺跡の紹介等をしつつ、この地域の歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代

この時代の遺跡は、木次・仁多両町内およびその周辺地域では、現在のところ、確認されていない。

島根県全体をみても旧石器時代の資料は多くはないが、宍道湖・中海の周辺地域では、松江市の下黒田遺跡をはじめ、この時代に遡ることのできる遺跡が見つかりはじめている。雲南地域においても、今後の開発の進行等をきっかけに、旧石器時代の遺跡が発見される可能性もある。

縄文時代

斐伊川中・上流域は、神戸川中・上流域と同様、縄文時代の遺跡の分布が密な地域である。

近年この地域で縄文時代の遺跡として注目されたのは、木次町の平田遺跡である。平田遺跡は、斐伊川とその支流の阿井川の合流地点に位置する。この遺跡では、縄文後期から晩期初頭の土器が大量に出土したが、岡山県の福田貝塚出土品と酷似した浅鉢や、鐘崎式土器など、山陽地方や北部九州の影響を強く感じさせるものが見られる。また大量の石鏃や石斧が剥片をともなって出土しており、この遺跡は石器の製作工房跡であったと考えられる。さらに、土器の出土状況等から、埋甕が行われた可能性が指摘され、土壙も８基検出されるなど、縄文時代の墓制の一端を知る上で貴重な遺跡である。埋甕が行われた遺跡として、周辺には、県指定史跡である三刀屋町の宮田遺跡、木次町の家の後Ⅱ遺跡、倒立埋甕の仁多町の暮地遺跡が知られている。尾原ダム建設に伴う調査では、暮地遺跡から縄文時代後期の土偶が３体出土した。１遺跡から３体の土偶が出土するのは中四国で岡山県津雲貝塚、同じく福田貝塚に次いで３例目である。仁多町の林原遺跡からは、範囲確認調査の結果、縄文後期を中心とする土器や磨製石器などの石器が出土したほか、縄文後期前葉から中葉のものと思われる土偶が１点確認されており、本調査の成果が期待されるところである。

平田遺跡から阿井川を遡り、町境を越えて仁多町に入ると、やがて下鴨倉遺跡にいたる。阿井川の河岸段丘上に存在するこの遺跡は、かつて「縄文のデパート」と評されたように、出土した土器は、縄文前期から晩期にいたる山陰・山陽の諸様式をほぼ網羅するばかりか、北部九州の影響も色濃い、貴重な資料となるものである。

この地域で最も古いものに分類できる遺跡は、斐伊川上流の横田町に所在する、押型文土器が出土した国竹遺跡や下大仙子遺跡であり、これらは縄文時代早期に遡ることができるものである。平成12年度の調査で、木次町の川平Ⅰ遺跡からも縄文早期の押型文土器が出土した。川平Ⅰ遺跡では、早期から晩期に至る主要な土器がほぼ途切れることなく出土している。

弥生時代

以前から、木次町では早稲田遺跡、本郷谷遺跡、仁多町では鹿谷遺跡、横田町では国竹遺跡、代山遺跡、横田高校グランド遺跡などが弥生時代の遺跡として知られてきた。しかし、縄文時代の遺跡に比べると数そのものが少なく、遺構が確認されたのも国竹遺跡のみであり、この地域では、わずかに横田町の横田八幡宮に伝えられた銅剣（中細形銅剣Ｃ)、木次町日登から出土したと言われる銅鐸（外縁付鈕Ⅰ式）が注目される程度であった。

しかし近年になって、この地域の弥生時代の様相を知る上で、貴重な資料を提供する遺跡が見つかった。縄文時代の項でも触れた、木次町の平田遺跡である。この遺跡からは、円形に近い多角形を呈した径8.8m～9.0mの竪穴建物跡１棟が確認された。建物内からは鍛冶炉が４基検出され、鉄鏃やその未製品、板状や棒状の鉄片、鏨、砥石などが出土した。この建物は鉄素材を鍛錬し、鏨を用いて鉄器を製作した工房として使われたものと考えられる。これとほぼ同様の性格をもった建物群が、八束郡宍道町の上野Ⅱ遺跡で見つかったが、平田遺跡の鉄器工房跡は、上野Ⅱ遺跡のものに比べてやや新しく、弥生時代の末から古墳時代初頭のものと考えられている。

尾原ダム建設に伴う発掘調査では、木次町の垣ノ内遺跡から、弥生時代中期後半から後期末にかけての竪穴住居が16棟、掘立柱建物が数棟発見された。斐伊川中・上流域では、弥生時代の集落跡の調査例が少なく、住居跡・建物跡がこれだけまとまって検出された例もないことから、注目され

る遺跡である。平成14年度に行われた木次町北原本郷遺跡では、中期前葉から後期末にかけての竪穴住居が12棟検出された。遺跡のある広大な河岸段丘は、さらに調査が続けられることになっており、今後の成果が期待される。

古墳時代

斐伊川中流域には、副葬品に景初三年銘の三角縁神獣鏡を持っていたことで著名な大原郡加茂町の神原神社古墳をはじめ、木次町の斐伊中山古墳群、三刀屋町の松本古墳群１号墳・３号墳などの前期古墳が点在する。これらの古墳は、斐伊川の本流に、赤川あるいは三刀屋川といった大きな支流が合流し、平地が遠望できる微高地や山丘上に立地するという特徴がある。

一方、中流から上流域では、従来より前期や中期の古墳はほとんど見当たらないとされてきたが、近年この定説にも変化が生じた。仁多町三成の須坂古墳群は15基から構成される古墳群である。前方後方墳１基、一部に弥生時代の台状墓と思われるものも含み、前期古墳群に類似するものである。近い例として、斐伊中山古墳群を挙げることができる。また、同じく仁多町三成の丸子山古墳群は円墳２基からなるが、副葬品等の状況は中期末頃の様相を呈しており、この地域の首長クラスの墳墓と推定されるものである。

後期になると、斐伊川中・上流域の主要古墳が、仁多町高田・郡村の付近に築かれるようになる。この付近は、後述のように『風土記』の時代に仁多郡の郡家が置かれていたところで、岩屋古墳、常楽寺古墳など、それに相応しい古墳が存在する。岩屋古墳は７世紀前半頃の円墳で、墳丘の規模は径約15mと大きくはないが、全長約７mの仁多郡では群を抜いて大きい横穴式石室を持つ。常楽寺古墳は墳丘を欠き、また羨道部も欠いているものの、整った横穴式石室を持つ円墳である。この古墳の特徴は、円筒埴輪14以上、馬形埴輪１、男子人物埴輪３、女子人物埴輪２と、豊富な埴輪を持つことである。石室内部の調査がなされていないこともあって、被葬者の人物像は詳らかにはできないが、相当な勢力がここに存在していたことは確実であり、その勢力は何に依拠したものなのかを分析していくことが今後の課題となるであろう。

横穴墓は、木次町で10群、仁多町では16群を数えることができる。その形態は、ほとんどが玄室の平面プランが縦長長方形、断面が三角形のテント形で、妻入りであり、この形態は斐伊川中・上流域の奥出雲地方に広く分布するものである。副葬品も須恵器を中心に、僅かな玉類や鉄器を持つなどおおむね等質的だが、木次町の平ヶ廻横穴墓では金銅装の刀子が副葬されていたことが注目される。また、平成12年に調査が行われた木次町の下布施横穴墓群では、１号横穴墓から遺存状態の極めて良好な装飾大刀が出土した。その装飾は、柄に葛を密に巻き、柄頭には黒漆を塗った上に金箔・銀箔を貼ったもので、畿内で一括生産される一般の装飾大刀とは技術的系譜が異なるものとして注目される。仁多町の殿ヶ迫横穴墓群では、切創の残る足に添え木がなされている人骨が発見された。同じく時仏山横穴墓の被葬者は伏臥伸展位という類例のない形で葬られていた。副葬品も供献土器はなく、メノウ製の勾玉、切子、小玉などの数は近隣の他例より突出している。

平成14年度の実施の調査では、仁多町の原田古墳から豊富な副葬品が発見された。横穴石室の大部分は残っていなかったが、ヒスイの勾玉、双龍環頭大刀、金銅製馬具などの遺物は近隣に出土例が無く、注目される。

木次町日登に所在する原口古墳群は、６基のうち調査されたのは１号墳のみであるが、松江市友田遺跡の土壙墓や墳丘墓との共通点が指摘され、古墳群と呼ばれてはいるものの、弥生後期の墳丘

墓の可能性が高いと指摘されていることを記しておきたい。

奈良・平安時代

『風土記』によれば、大原郡の役所である郡家は斐伊郷、飯石郡の郡家は多爾郷、仁多郡の郡家は三処にそれぞれ置かれた。

飯石郡家の所在地は現在の飯石郡掛合町郡のあたり、大原郡家は現在のJR木次駅の北側の地点と推定され、それ以前には大東町仁和寺のJR幡屋駅付近にあったらしいが[註1]、いずれも『風土記』の距離里程や地名からの推測であり、関連する遺跡・遺物は見つかっていない。それに対して、仁多郡家には有力な推定地があり、それは仁多町郡村のカネツキ免遺跡付近と考えられている。カネツキ免遺跡からは須恵器や土師器をはじめ、多くの遺物が出土しているが、土器には墨書土器も含まれ、また円面硯・転用硯も見られる。付近には大領原や内裏原という字名があり、近隣の芝原遺跡からは「厨」と墨書する須恵器が出土している。これらのことから、カネツキ免遺跡は遺構こそ確認できていないものの、仁多郡家と関わりの深い遺跡といえる。

また、木次町家の上遺跡は、配石遺構から土馬・手づくね土器・土玉などが出土した7～8世紀の水辺の祭祀に関係する遺跡と考えられている。

尾原ダム建設に伴う調査では、木次町の槙ヶ垰遺跡で平安時代半ばと推定される製鉄炉壁や鉄滓類が出土した。これらは、類例が少なく不明な点が多い平安時代の鉄生産についての貴重な資料として注目される。

中・近世

承久の乱（1221年）の後には、大原郡内にも東国の御家人が進出してきた。中でも日伊郷の伊北氏、大東庄の土屋氏、大西庄の飯沼氏、淀本庄の中沢（牛尾）氏、佐世郷の佐世氏らである。この地域には、牛尾氏の三笠城・高平城（大東町）、佐世氏の佐世城（同町）、立原氏の近松城（加茂町）など、重要な城が集中していた。

仁多郡では、信濃国の御家人の飯島氏が、承久の乱の戦功を賞されて、三沢郷に所領を獲得した。飯島氏が実際に三沢郷に移り住み、三沢氏を称して本格的な所領経営に乗り出したのは、鎌倉時代末期のことである。三沢氏は鴨倉山（要害山）に居城である三沢城を構えると、隣接する阿井郷・布勢郷・三所郷に支配領域を広げ、室町期には横田庄にも進出した。三沢城は14世紀初頭の築城とされ、主郭を中心に主として北側と東側の尾根筋に大小14段以上の郭をもつ山城で、西と南は絶壁状をなし、南の麓には阿井川が流れる。鴨倉山の標高は418.5mと周囲の山々に比べて低いにも関わらず、四方の要衝をほとんど望める位置にある。三沢氏は、奥出雲の鉄の生産と流通を掌握し、出雲国内で最大の勢力を誇る国人へと成長を遂げた。天文12年（1543年）には尼子氏に征服されるが、それでもなお出雲国最大の国人領主として影響力を保持し続けた。三沢城は、永正6年（1509年）、横田庄内に藤ヶ瀬城が築かれるまで、三沢氏の本拠地であった。

『風土記』の仁多郡や飯石郡の条にも記されるなど、古来より、雲南地域では盛んに製鉄が行われてきた。大原郡の記事にはこのような記述がないが、事情は同様と思われる。近年の調査によれば、下布施川流域の谷筋に12世紀後半と推定される木次町の上垣内たたら跡、13世紀後半の可能性が高い同町の枯木ヶ谷鈩遺跡などの野だたらが点々と分布し、大原郡内では主要な鉄生産地の一つだったようだ。

近世になると横田町の絲原氏・卜蔵氏、仁多町の櫻井氏、吉田村の田部氏など著名な鉄師が登場した。松江藩の後ろ盾を得た彼らによって、大規模な高殿たたらが営まれるようになると、雲南地

域の産鉄量は飛躍的に増大することとなった。しかし、大原郡南部においては近世以降も依然として小規模なたたらが散在するにとどまり、高殿たたらは下布施滝の上鈩跡が知られる程度である。

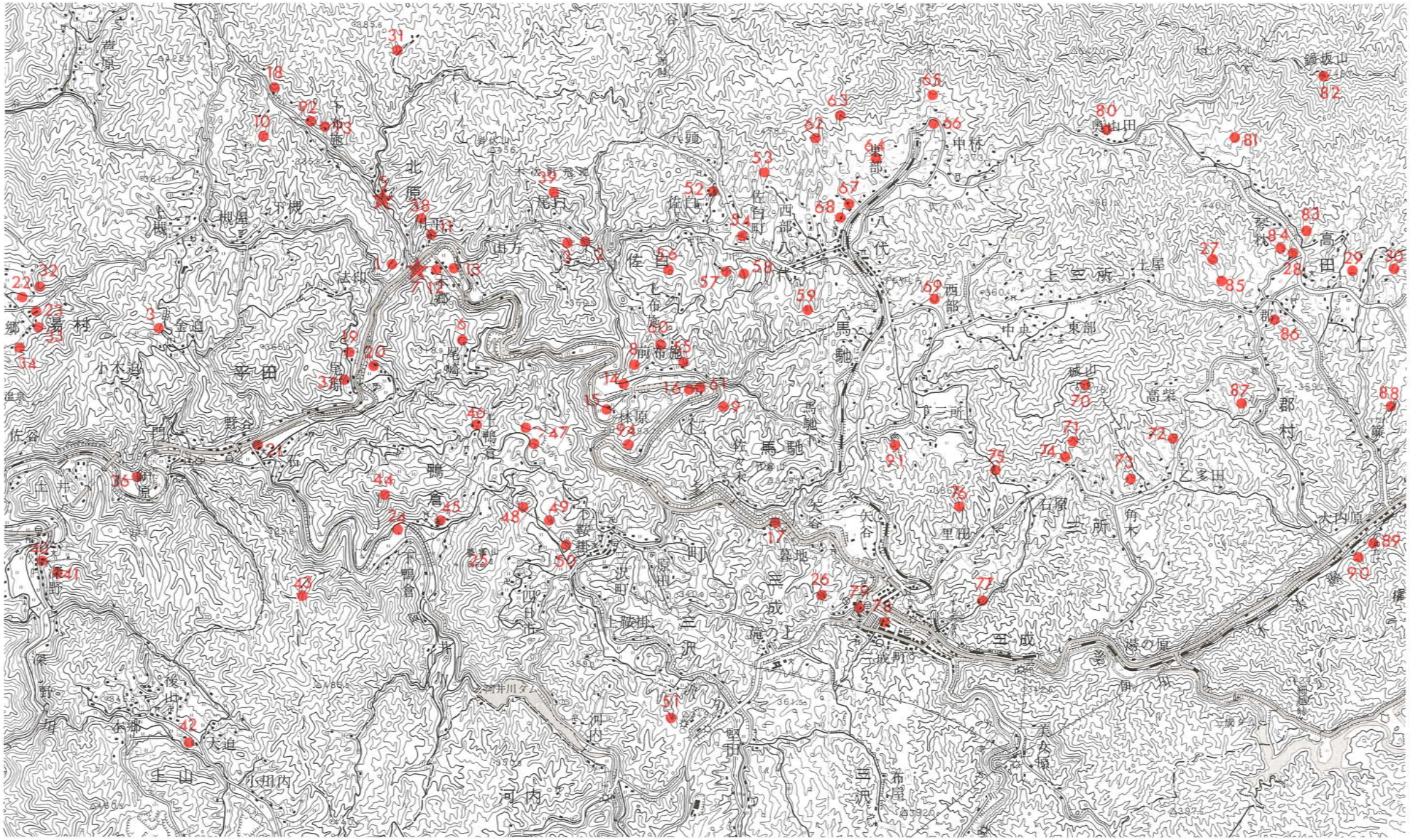
註１　加藤義成『修訂　出雲国風土記参究』 1992　今井書店

【参考文献】

『斐伊川誌』 1995　建設省中国地方建設局出雲工事事務所
加藤義成『修訂　出雲国風土記参究』 1992　今井書店
加藤義成校注『校注出雲国風土記』 1965　千鳥書房
『道路改良計画に伴う　下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』 1981　仁多町教育委員会
『発掘調査報告書　常楽寺古墳』 1985　仁多町教育委員会
『比丘尼原横穴群緊急発掘調査報告』 1986　仁多町教育委員会
『郡屋敷古墳　－調査と石室の移築－』 1986　仁多町教育委員会
『緊急発掘調査報告　上分・原たたら跡』 1989　仁多町教育委員会
『道路改良工事に伴う第２次発掘調査報告　下鴨倉遺跡』 1990　仁多町教育委員会
『古代の出雲を考える７　松本古墳群　―斐伊川流域の前期古墳をめぐって―』 1991　出雲考古学研究会
『発掘調査報告書　野土たたら跡』 1992　仁多町教育委員会
『発掘調査報告書　斐伊中山古墳群－西支群－　木次町文化財調査報告書第２集』 1993　木次町教育委員会
『高田小学校建設予定地内発掘調査報告書　日ヤケたたら跡　芝原遺跡』 1994　仁多町教育委員会
『尾原ダム建設に関わる発掘調査報告書　武者山遺跡　丸子山古墳群』 1995　仁多町教育委員会
『妙見山遺跡発掘調査報告書　木次町文化財調査報告書第３集』 1995　木次町教育委員会
『主要地方道玉湯吾妻山線改良工事に関わる発掘調査報告書　宇根たたら跡』 1996　仁多町教育委員会
『中国第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地内遺跡調査報告書　須坂遺跡・他』 1997　仁多町教育委員会
『平田遺跡　木次町文化財調査報告書第４集』 1997　木次町教育委員会
『家の上遺跡・石壷遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』 1998　木次町教育委員会
『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第２集〉出雲・隠岐の城館跡』 1998　島根県教育委員会
『上垣内たたら跡　北原Ⅰ遺跡　茶屋の廻遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』 1999　木次町教育委員会
荻原千鶴『出雲国風土記』 1999　講談社学術文庫
『枯木ヶ谷鈩遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３』 2000　木次町教育委員会
『平田遺跡第Ⅲ調査区　斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2000　木次町教育委員会
『殿ヶ迫横穴墓群　西尾社遺跡　亀ヶ谷遺跡　シベ石遺跡　時仏遺跡　時仏山横穴墓　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2001　仁多町教育委員会
『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　年報　Ｘ　平成13年度』 2002　島根県教育委員会

表１　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	尾白Ⅰ遺跡	散布地	25	三沢城跡(鴨倉城跡)	城跡	49	どけや古墳	古墳	73	聞善寺跡	寺院跡
2	尾白Ⅱ遺跡	炭窯跡	26	丸子山古墳群	古墳	50	布広城跡	城跡	74	善勝寺跡	寺院跡
3	家ノ脇Ⅱ遺跡	散布地	27	カネツキ免遺跡	散布地	51	八頭塚横穴群	横穴	75	村尾政吉宅向横穴	横穴
4	川平Ⅰ遺跡	住居跡・散布地	28	常楽寺古墳	古墳	52	佐白・原鈩跡	製鉄遺跡	76	石原城跡	城跡
5	垣ノ内遺跡	集落跡	29	高田廃寺	寺院跡	53	金子松鈩跡	製鉄遺跡	77	里田遺跡	散布地
6	槙ヶ坪遺跡	製鉄遺跡	30	岩屋古墳	古墳	54	中山遺跡	散布地	78	郡屋敷古墳	古墳
7	家の後Ⅰ遺跡	散布地	31	下布施滝の上鈩跡	製鉄遺跡	55	円満寺	寺院跡	79	三成鍛冶屋小路遺跡	製鉄遺跡
8	殿ヶ迫横穴墓群	横穴	32	宮原遺跡	散布地	56	佐白城跡	城跡	80	奥山田遺跡	散布地
9	時仏山横穴墓群	横穴	33	本屋敷遺跡	散布地	57	上布施横穴群	横穴	81	琴枕岩屋古墳	古墳
10	下布施横穴墓群	横穴	34	鳥屋ヶ丸砦跡	城跡	58	上布施遺跡	散布地	82	鍋坂山城跡	城跡
11	宮ノ脇遺跡	散布地	35	金廻遺跡	散布地	59	すげた横穴群	横穴	83	宮の前遺跡	散布地
12	家の後Ⅱ遺跡	散布地	36	平田鈩原鈩跡	製鉄遺跡	60	水の手城跡	城跡	84	鴨木遺跡	散布地
13	北原本郷遺跡	散布地	37	石壷遺跡	散布地	61	林原古墳	古墳	85	カネツキ免鈩跡	製鉄遺跡
14	原田遺跡	集落跡・古墳	38	下布施山城跡	城跡	62	三出平古墳	古墳	86	仁多郡衙跡	郡衙跡
15	前田遺跡	散布地	39	尾白横穴群	横穴	63	穴観音古墳	古墳	87	コフケ横穴	横穴
16	林原遺跡	散布地	40	田井中学校付近古墳	古墳	64	門屋遺跡	散布地	88	金床横穴	横穴
17	暮地遺跡	散布地・住居跡	41	薬師さん五輪塔群	古墓	65	庄田鈩跡	製鉄遺跡	89	伝和泉式部墓	古墓
18	枯木ヶ谷鈩遺跡	製鉄遺跡	42	上山城跡	城跡	66	堂の前古墳	古墳	90	大内原土居館跡	館跡
19	上垣内たたら跡	製鉄遺跡	43	戈の原遺跡	散布地	67	長福寺遺跡	散布地	91	須坂遺跡	古墳・横穴・建物跡
20	家の上遺跡	祭祀遺跡・製鉄遺跡	44	松木山城跡	城跡	68	金原鈩跡	製鉄遺跡	92	ゴマボリ鈩跡	製鉄遺跡
21	平田遺跡	散布地・製鉄遺跡	45	光善寺古墳	古墳	69	下鴨倉大峠鈩跡	製鉄遺跡	93	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡
22	早稲田遺跡	散布地	46	芝原遺跡	製鉄遺跡	70	須我非山城跡	城跡	94	小廻上遺跡	城跡
23	本郷谷遺跡	散布地	47	穴観古墳群	古墳	71	石原遺跡	住居跡			
24	下鴨倉遺跡	散布地	48	比久尼原横穴群	横穴	72	善勝寺跡	寺院跡			



第２図　周辺の遺跡（S＝1/50,000）

家の後Ⅰ遺跡

第２章　家の後Ⅰ遺跡

第１節　調査の経過と概要（第３～４図、図版1.2）

家の後Ⅰ遺跡は、島根県大原郡木次町字北原大字家の後に所在する遺跡である。斐伊川が南東へ向けて大きく流れを変える北原地区は、その左岸に斐伊川流域でも有数の規模を持つ河岸段丘が開けている。この河岸段丘上には家の後Ⅰ遺跡をはじめ、北原本郷遺跡、家の後Ⅱ遺跡が広がっている。河岸段丘の最下流部に位置する家の後Ⅰ遺跡は２面の水田になっており、範囲確認調査の結果、調査区は川側の水田北半分を除いた片凸状に設定されていた。調査の進行に伴い、調査区を拡張したため、総面積は水田２面分の約2,200㎡となった。今回は作業の円滑化と効率化を図るため、調査区をⅠ、Ⅱ、Ⅲ区に分け、出土遺物は全点番号を付加の上、遺跡情報システム（SITE）[註1]を用いて取り上げることとした。

調査は平成13年４月初旬の表土掘削からスタートした。調査区の大部分が厚い圃場整備客土で覆われていたため、重機を用いた掘削に２日を要した。

客土層の下面では、径５ｍ前後の穴に大小の円礫・角礫を人為的に詰め込んだ場所が５、６か所点在していた。この場所は元来斐伊川河岸段丘の最下段に位置するため、数トンに達すると思われる巨石が多い。また背後の山は急角度で切り立ち、中腹には露頭から割れ落ちたと思われる巨岩が幾つも引っ掛かっており、転落石も多いと思われる。おそらくは圃場整備で地均しをした際に、邪魔になる川原石、転落石を集めて埋めたものと考えられる。岩石を適宜撤去しながら１～２ｍ掘削し、客土を掘り上げた。その結果、山側にあたる約1/4は地山以下まで掘削されていることが明らかになったため、この部分は人力掘削の必要が無くなった。

本格的な発掘調査は４月16日から始まった。依然として攪乱土が各所に残っており、これらを除去しながら調査を行った。遺物は特に集中する部分もなく、全体に散漫な状況であった。調査中は、東角及び西角に縦横１ｍ×２ｍのトレンチを設け、本調査に先行して掘削を行い、土層を確認した。

６月に入ると、調査範囲を決定する根拠となった平成11年度の調査が、トレンチによっては客土層以下まで達していないことが明白となった。遺物の出土状況を見ても、同じ水田の1/2だけが遺跡外とは考えにくく、６月中旬から徐々に調査区を広げ、最終的には約2,200㎡の調査を行った。またこのころ、Ⅲ区の中央部を中心にして火山灰が斑点状に検出され始めた。最終的にⅡ区とⅢ区の一部で面的な検出をするにとどまったが、６月25日には中村唯史氏に現地を見ていただき、三瓶太平山降下火山灰の可能性が高いとの指導をいただいた。また火山灰層を境に縄文時代の包含層が二分される事も明確になった。

７月初旬には、大量の円礫が調査区を埋めるようになった。縄文時代中期後半以前の斐伊川と考えられるこの面は、大小の川原石が隙間無く広がっており、重機では歯が立たず、人力で掘るためには膨大な労力を要すと考えられた。一方、先行トレンチでは、川原面以下に川砂が２ｍ以上堆積していることが明らかとなり、遺物もないことが確認された。さらに下位に包含層が存在する可能性はあるものの、川原石を全て撤去した上でさらに２ｍ以上掘削することは、事実上困難であった。総合的に検討した上で、この川原面での調査終了が決まった。

8月1日には島根大学汽水域研究センターの竹廣文明氏（現広島大学）に出土遺物を見ていただき、整理法などの助言をいただいた。8月7日には発掘作業が終了し、翌8日に調査後の空撮を行って、現地調査を終了した。また8月後半には文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏に土壌分析用のサンプル採取をお願いした。11月14日には、垣ノ内遺跡、尾白Ⅰ・Ⅱ遺跡、家ノ脇Ⅱ遺跡などと合わせて調査指導会を行い、御指導いただいた。

調査期間、現場の制約もあり現地説明会を行うことはできなかったが、11月に開催した垣ノ内遺跡現地説明会では主な出土遺物を展示する事ができた。復元した縄文土器や石器類は、木次町・仁多町の小中学生が発掘体験や総合学習で現場を訪れた際にも活用した。また毎年5月下旬にダム予定地内で開催されていた「菜の花祭」や11月の温泉公民館・農林環境改善サブセンター主催の「ふるさとまつり」でも遺物展示コーナーを設け、広く地域の方々に調査の内容を知っていただくことができたと考えている。

第2節　家の後Ⅰ遺跡の基本層位（第5図）

家の後Ⅰ遺跡の層位は、第5図のとおりである。

最上層（A層）は水田耕作土で、戦後になって北原の河岸段丘の圃場整備が行われた際に持ち込まれた客土である。この圃場整備で当初3段であった水田を2段に造成し直したようで、最上段（山側）は地山以下まで削り込んで平坦面を作り出していた。一方で最下段（川側）はあまり大きな改変を受けなかったようである。

以下13層に細分できるが、大枠では弥生時代後期以降の包含層（B層）、縄文時代後期から弥生時代前期の包含層（C層）、三瓶太平山降下火山灰層（D層）、縄文時代中期後半から縄文時代後期の包含層（E層）、縄文時代中期後半以前の川原砂層（F層）に分けられる。

B層は圃場整備によってかなり撹拌を受けており、層の厚さも場所によって大きく差があった。遺物の出土状況から考えて、何らかの遺構の存在が推測されるが、圃場整備によって失われてしまったのだろう。また、B層出土遺物とした中には客土とともに入った遺物が混じっている可能性がある。C層とE層は粒子のやや粗い砂層で、色調に差があるものの質自体は大差がない。D層は火山灰と軽石を含み、これを境にC層とE層を明確に区別することができた。この火山灰は軽石の発泡状態などから太平山降下火山灰の可能性が高いとの指摘を受けたが[註2]、C層からは四元式並行以降の土器が出土しており、E層から崎ヶ鼻式の土器が出土するなど矛盾はないと思われる。なお三瓶山周辺の遺跡から採取されたサンプルの14C年代測定により、降灰時期は3600～3700B.P.前後が想定されている[註3]。

F層は木目の細かい砂層で、上面に大小の円礫が咬んでいる。E層の出土遺物は船元2式以降に限られるので、それ以前の斐伊川の川原と考えられるが、現在の川原面に対し4mほど高い位置にあたる。重機を用いて調査区西角に裁ち割りを入れたが、この層は2m以上厚さがあり、遺物は出土しなかった。

なお、各層の性格を把握するため土壌の科学分析を行った。花粉量が少なく、得られたデータは限られたが、遺跡周辺の古植生や遺跡付近での稲作の可能性を示すデータが得られた。この結果については第4章第3節に詳細を報告している。

第３節　出土遺構（第４図、図版２）

今回の調査では、縄文時代中期後半以前の斐伊川の流路を確認した他は明確な遺構を検出できなかった。川に並行するように杭列が２列検出されたが、セクション検討の結果、圃場整備直前まで使われていた水田を区画したものと判断した。また客土掘削時には、鳥居状に組まれた木材と長大なワイヤーが出土した。これは戦後、木材の積み出しのために造り付けられた索道の残骸のようである。

このように、家の後Ｉ遺跡では、近現代の暮らしを物語る遺構が検出されたに過ぎない。

第４節　出土遺物（第６図～第20図、図版４～16）

今回の調査では、調査面積が比較的少ないこと、縄文時代の包含層調査が主体になることを考慮し、出土遺物全点に番号付加の上で取り上げることとした。取り上げにあたっては、遺跡情報システム（SITEver.4）を用いて出土位置、層位、種別等をデジタルデータとして取り込んだ。第６、７、８図の作成にはこのデータを利用した。出土遺物は計3959点で、この他に表採資料など番号未付加の遺物が約50点ある。

遺物の取捨にあたっては、時期がある程度判断可能な文様のある土器を優先的に掲載した。また精製の浅鉢類も極力掲載することとした。一方、出土遺物の大部分を占める粗製の鉢類については接合が困難なものが大部分であるため、口縁部の残る破片など個体の把握できるものを中心に分類し、代表的なものを掲載している。非掲載の遺物数は多いが、遺跡の様相は把握できると考えている。また非掲載遺物も全て番号付加のまま個別に梱包し、デジタルデータとともに収蔵してあるので、これらを対比することで出土位置を把握することが可能である。

縄文土器

第９図～第10図はＥ層出土の縄文土器である。

９－１は貼付突帯に刺突文を入れている。地文は荒い縄文で、船元２式並行であろう。この時期の遺物は計２点のみで、今回の調査では最も古い遺物である。２、３は半裁竹管文が入る縄文地の土器で、船元３式である。20も小片で判別しづらいが、同時期の可能性が高い。４～14は地文が撚り糸の土器群で里木２式である。小片が多いが深鉢類と思われる。この遺跡では里木３式に当てはまる個体はないようである[註4]。

15～17は太めの沈線が入る磨消し縄文の土器で、中津１式または２式である。18は沈線の細い磨消し縄文の土器で中津３式であろう。９－19は磨消しの荒さが特徴的だがほぼ同時期のものと判断した。

21、22は同一個体で、口縁の一部と底部以外ほぼ完全に復元できる。頸部は丁寧にナデて、口縁部と胴部を明確に分けている。口縁端部は広く外側に肥大させ、横方向に凹線を走らせる。４か所に耳状の突起が付くと推定したが、３か所の可能性もある。突起は内側を漏斗状に整形し、螺旋状に凹線を入れている。胴部は大小のＰ字形モチーフが上下交互に入るが、形状はかなりくずれており、一部は逆Ｌ字形にも見える。縄文もモチーフに対して統一性がなく、内外が逆転する部分がある。時期は、頸部に空白を設け、口縁と胴部の文様が明確に分かれていることから、布勢式段

階にあたると考えられる。口縁断面形やモチーフの特徴が似る土器として、ほぼ同時期と考えられる松ノ木式[註5]が挙げられる。

第10図も縁帯文土器を中心に掲載している。これらの土器は、布勢式から崎ヶ鼻式に位置づけられる土器群である。口縁端部を外側へより広く肥大させる特徴は、松ノ木式に見られるもので、頸部をナデあるいは磨くことで口縁部と胴部を明確に分けている。1は口縁部を横方向に肥大させ、口縁端部に縄文を入れる個体である。崎ヶ鼻式の範疇と考えられる。2は口縁端部に縄文の代わりに刻みを入れるが、ほぼ同じ時期であろう。6は口縁を縦方向に肥大させるやや古い形態だが縄文は入らない。津雲A式並行の鉢に見られるモチーフで、これも崎ヶ鼻式に位置づけられそうである。8～11は同一個体で全面に丁寧なミガキを施し、口縁部の要所には刺突を円形に並べる。胴部の直線的なモチーフは2条の凹線で描かれる。13では口縁があまり外傾せず、口縁端部を内側にも肥大させ横方向と円形の凹線を入れる。頸部はナデ調整、胴部のモチーフは3条凹線が用いられる。14は布勢式でほぼ全容の分かる個体である。口縁部を“く”の字形に肥大させ、モチーフは3条凹線で描かれる。頸部と胴部には縦方向の条痕が入る。縁帯文土器で頸部に条痕が確認できたのはこの1個体のみである。

第11図にはC層出土の遺物を並べた。1～4、7、11、18、19は縄文の入る一群で、四元式並行の土器であろう。口縁が内傾する鉢としない鉢がある。4は凹線の間隔が広く、中津式の可能性もあるが、層位を尊重して四元式の範疇に含めた[註6]。7は凹線内に連続する刺突が入り、彦崎K2式への過渡的な様相と考えられる。

11－5、8、9、12～17は擬縄文の入る土器である。3条以上の凹線が主として横方向に入るが、それぞれを弧で繋ぐもの、繋がず中途で止めるものなど多様性がある。また凹線内に連続刺突を施したり、要所に刺突を入れるのも特徴である。口縁が大きく内傾するものや段の付くものは注口土器の可能性が高い。13、14では擬縄文の代わりに楕円形の連続する刺突を用いている。これらの土器は彦崎K2式並行の土器であるが、6、10の様に刻目文を入れるものは元住吉山1式に並行するやや新しいものと考えられる。

11－20、21はかなり小型の鉢で、点でしか接合できないが同一個体である。非常に薄く繊細な作りで、胎土も他のC層の土器とは全く異なっている。調整はミガキを主体とし、口縁端部とくびれた頸部に凹線文と刻目文を組み合わせて描く。胴部は凹線を用いた横方向のモチーフを基本としながらも、アクセントとして対向するJ字形文を入れている。胴の一部には赤色顔料が残っているが、全面にあるいは一部に塗布されていたようだ。出土例がこの地域では見つからないが、北部九州に分布する西平式に類似する壷があり、これに並行する可能性を指摘しておきたい。

11－23～25は口縁内側に連続する半貫通の竹管刺突文を入れるもので、孔列土器の範疇に入るものである。いずれも谷尻式と考えられるが、23は断面長方形の刺突を押し引き気味に入れており、厚さが薄く胎土も他の2点とは異なっている。10－26、19－1は突帯文土器である。

12－1～7は内、外面を丁寧にナデ調整する鉢類である。後期のくびれがない深鉢だろうか。8は口縁部に粘土帯を貼付けて肥大させる深鉢である。9、10は波状口縁の端部外面にヘラ状工具を用いた刻みが長く入る深鉢で、外面調整は貝殻条痕を用いる。後期の深鉢であろう。11～15は表裏とも条痕の入る破片だが、条痕の入る土器は僅か10点ほど出土したに過ぎない。

第13図には主に精製浅鉢類を並べた。浅鉢の多くが内外面ともミガキを基本とし、表面が暗褐色

系の黒色磨研土器である。

1は緩く2段に屈曲する口縁で、横方向のやや粗雑なミガキが入る。2、3は口縁が屈曲して直線的に伸びる鉢で、3では外面に細く浅い沈線が入る。4は底部が張り、大きく屈曲する浅鉢である。表面は摩耗しているが、内外面ともミガキ調整である。

5～12、14は浅く直線的に口縁が広がる浅鉢である。口縁端部の形状は肥大させるもの（5、6）、平坦面を作るもの（8、10）、丸くおさめるもの（7、9）がある。11、12、14は口縁内面に沈線を入れて端部を区分けするもので、端部には斜め方向の刻みが入る。13は口縁が屈曲して内傾する浅鉢の破片で、外面は横方向のやや粗めのミガキが入る。口縁は欠損するが他とほぼ同時期のものだろう。15は口縁が短く、突帯を貼り付けて端部を2段に屈曲させる浅鉢である。小片だが口縁が直線的であることから方形浅鉢と考えられる。焼成後穿孔されている。

16～20は端部を肥大させる浅鉢で、17、19、20では明確に段を作り出す。内外面とも丁寧なミガキを入れる。口縁は緩く外反するものが多いが、18の様に顕著でないものもある。16は荒いナデ調整が主体で後期の浅鉢の可能性もある。22～24は丸みを帯び内湾する碗状の浅鉢類で、ミガキを入れるものと荒いナデのものがある。25～28は口縁端部を玉縁状に肥大させるもので、内外面とも丁寧なミガキを施す。

これらは黒色磨研系の浅鉢であるが、1がやや古手の形態である以外はおおよそ篠原式から谷尻式に相当すると思われる。さらに細分できるかもしれないが、有文深鉢や粗製浅鉢とのセット関係が掴めないので、ここでは一括して報告しておきたい。

第14・15・16図は粗製の鉢類である。出土した粗製深鉢の大部分はくびれが無く、平底あるいは上げ底である。調整は粗雑なナデとケズリが主体で、貝殻条痕の入るものは少ない。

14－1～6は口縁部を僅かに膨らませてアクセントを付けるもの、14－7～12、16－1～4は口縁端部に平坦面を作るものである。平坦面は14－7、12のように内面とともに横ナデするものと、16－1、2のように外面を横方向に丁寧にナデるものがある。

15－1～11、17－1は口縁端部を丸くおさめるもので、緩く外反する8などは晩期の深鉢と判断した。11は後期の浅鉢であろうか。17－1は全体の1/2が復元できる深鉢で、上部に補修孔が開けられている。

16－5～8は口縁端部を細める深鉢で、口縁部を中心に比較的丁寧にナデ調整が行われている。

石器類

出土石器は、数量表のように総計87点である。石斧類は3点でいずれも乳棒状石斧の破片である。石材に差があることから、全て別個体と思われる。3は刃部が破損した後に再度加工した痕跡があるが、中途段階で止まっている。剥片石器は36点で、石鏃、楔形石器、石匙がある。7は横長剥片を加工した石匙で、9の楔形石器は先端を欠いている。

石錘は37点出土した。全て切目石錘に分類されるものである。家の後Ⅰ遺跡の切目石錘は長辺の両端を打ち欠くものと、一端のみ鋭く切り欠きを入れる2形態に分類できる。後者の場合は切目の無い一端が突出する石を選択したようで、形状が心葉形のものが多い。両者をどのように使い分けたのか定かでないが、割合は約12：7である。グラフ2には重量別分布を示した。明確な山は無いように見えるが、主として120g前後までが標準的に用いられ、200gを越えるものは少ない。また

形態の違いと重量にも、特に関係は見られない。

磨石、敲石類は使用痕や加工痕の明らかなものを選択し、計測した。使用痕の位置や、形態から分類したが、用途の不明なものが多い。18－13、14の桂化木は同一個体、あるいは同一母岩によるもので、端部は丸く摩滅している。出土層位から考えて縄文時代後期以前のものと考えられるが、用途は不明である。桂化木は周辺では産出しないため、搬入品と考えられる。

弥生時代以降の遺物

弥生時代以降の遺物は、縄文土器に比べて数が非常に少ない。またＢ層はかなり攪乱を受けており、客土とともに混入した遺物の可能性もある。

19－２～４は弥生時代前期の甕で、頸部にヘラ描き文と刺突文を入れる４はやや新しいものだろう。弥生時代中期から古墳時代初頭の土器は僅かなうえ、細片ばかりのため図示できるものは少なかった。５～９は後期から古墳時代初頭にかけての甕・壷類を並べた。10は低脚坏の脚部だが小片で時期は不明である。

須恵器は７世紀～８世紀を中心に坏、壷類、高坏などが出土している。辛うじて図化できたのは６点で、他は小片である。

16～18は近世の土師質土器で、ろくろ成形、糸切りである。

19は煙管の吸口で、真鍮版を丸めて鑞止めしている。不明瞭ながら鶴の印が型押されており、雁首とを繋ぐ竹筒の繊維がそのまま残っている。雁首が出土しておらず明確な時期は分からないが、吸口の構造が簡略化しながらも微妙な丸みが付けられている事から、18世紀～19世紀のものと考えられる[註7]。出土銭は計３点出土したがいずれも腐食が激しい。詳細は観察表を参照されたい。

第５節　まとめ

ここでは、家の後Ｉ遺跡の総括と若干の考察を行い、むすびに代えたい。家の後Ｉ遺跡では、縄文時代中期から近代までの遺物が出土したが、遺構は皆無であった。中心となるのは、三瓶太平山降下火山灰を挟んだ２枚の包含層である。

縄文時代について

包含層下層にあたるＥ層では、中期の船元２式から崎ヶ鼻式の土器までが連綿と出土しており、その中心は撚糸地文を持つ里木２式と、縁帯文土器を主体とする２時期にある。調査時には両者の出土状況に明確な差を把握していなかったが、分布を図化すると川側の比較的下層部（第５図９層）に前者が多く、山側の上層部（同図６～７層）やかけ上がり部分（傾斜が急激にきつくなる部分）に後者がまとまっている傾向がある。また前者の土器は、それぞれの破片で胎土が異なるものが多く、破片に対する個体の実数は多くなると想定される。一方後者では、個体数はかなり限定され、本報告書掲載の点数と大差ないと考えられる。こうした差は、土器廃棄のあり方の違い、あるいは土壌の堆積作用、土壌生成作用の違いに因ると考えられる。土壌の堆積、生成作用については、Ｅ層内で複数のサンプルをとらなかったため詳細は明らかでないが、一因として指摘しておきたい。

上層にあたるＣ層からは、四元式並行の土器から弥生時代前期（Ｉ－４様式）までの遺物が出

土している。縄文土器の大部分が粗製の鉢類で時期が明確になるものは多くないが、四元式、西平式、谷尻式、前池式が確認できる。C層自体もさらに分層できた可能性もあるが[註8]、第6図に見られるように出土状況は散漫で、圃場整備により削られた部分も多く、各時期の遺物を層位的に把握することはできなかった。土壌分析によればC層内、つまり四元式並行期から弥生時代前期の間に幾つかの遺構面が存在する可能性が示された。遺物との直接的な関係は不明であるが、この時期に周辺でイネ栽培が行われていた可能性が指摘されている。また、この頃の古植生はヨモギ類、タンポポ類、ウシクサ類が周辺に、斐伊川辺にはヨシ類が、近隣にはアカマツを主体とする松林、ニレ・ケヤキの湖畔林が存在したようだ。

このように家の後Ⅰ遺跡では、中期前半の船元2式から後期後半の彦崎K2式並行の土器はほぼ連続して出土している。晩期前半の土器は抜けているようで、谷尻式以降は弥生時代前期まで少数だが遺物がある。このことは、斐伊川の丁度対岸にあたる川平Ⅰ遺跡で押型文土器以降、弥生時代前期までほぼ連続して土器が出土しているのとは対照的である[註9]。背後に山が迫っている家の後Ⅰ遺跡と比較的緩やかな段丘が連なる川平Ⅰ遺跡の違いが表れているのであろうか。

弥生時代前期～中期

出土遺物が少ないため、実態を把握することができない。

弥生時代後期以降

家の後Ⅰ遺跡は、前節までで記したとおり弥生時代後期以降の遺構面を全く検出できなかった。出土遺物は僅かで、弥生時代後期の甕片から近世の煙管まで幅広いが、それぞれを層位的に把握することはできなかった。家の後Ⅰ遺跡は、北原の河岸段丘の中でも最も下流のはずれに位置するため、段丘も狭い。人々の日常生活域の中では、縁辺にすぎなかったのかもしれない。

一方で、この場所が河岸段丘において最も圃場整備の影響が大きい場所であったことも一因と考えられる。遺跡のある水田は隣接する水田に比べ約2mも低く、河岸段丘上で最も標高が低い。水田に効率よく水を供給する目的で、水田面を意図的に下げているためである。水田の畦にあたる調査区西南壁のセクションを見ると、圃場整備によって（あるいは整備前の水田構築時の影響もあるかもしれない）表土から1～1.5m掘り下げて水田を構築していることが確認された。つまり水田の構築により、弥生時代後期以降の堆積土（B層）は大部分が失われたと考えられる。実際にこの時期の遺構がどの程度存在したかは不明であるが、隣接する家の後Ⅱ遺跡や北原本郷遺跡の調査結果を考慮すると、数層の遺構面があったとしても不思議ではない。

三瓶太平山降下火山灰について

家の後Ⅰ遺跡では比較的良好な状態で三瓶太平山降下火山灰（約3,600年前）を検出することができた。この火山灰は、三瓶角井降下火山灰（約4,700年前）とともに完新世に降下したものとされ、三瓶浮布降下軽石、降下火山灰をあわせた3枚の火山灰層は、この地域の鍵層として注目されている。その契機となった飯石郡頓原町を中心とした志津見ダム建設に伴う発掘調査では、それぞれの火山灰層が厚さ数十cmに達し、包含層が明確に区別されている[註10]。しかし完新世の噴火活動は比較的小規模と推定され、火山灰の構成粒子が完晶質～半晶質で識別が難しいことから、肉眼で

火山灰層を確認できない限り、遠隔地での判別は困難である[註11]。鳥取県日南町では、角井降下火山灰と推定される火山灰層が20cm以上の厚さで確認されており[註12]、火山灰の分布軸に近い場所であれば火山灰を検出できる可能性は高かった。

尾原地域は三瓶山の東北東約30kmに位置し、火山灰の検出が調査上のポイントのひとつでもあった。平成８年度に調査が行われた平田遺跡では、太平山期の噴火に由来すると推定される軽石が包含層中から検出された[註13]。サイズの大きな軽石が含まれることから、何らかの目的で遺跡に持ち込まれたものの可能性が指摘されるが、近隣に比較的大型の軽石が降下してることが明らかになった[註14]。また平成11年度の範囲確認調査では、仁多町林原遺跡から一次堆積したと考えられる三瓶太平山降下火山灰が斑点状に検出された。林原遺跡は斐伊川左岸に広がる河岸段丘に位置し、土偶１点が出土するなど[註15]本調査の成果が期待される遺跡であるが、この調査で尾原地域でも条件さえ整えば火山灰層を肉眼で確認しうることが明確になったのである。

今回の家の後Ⅰ遺跡における火山灰層検出は、二つの意味を持つと考えられる。まず第一には、尾原地域においても、条件が整えば太平山降下火山灰層を層位的に押さえることが十分可能だということである。家の後Ⅰ遺跡の火山灰は、厚さ最大５cm、多くの場合漸位部を除けば１cm前後に過ぎなかった。しかし実際は土質が他と全く異なるため、調査時においても容易に識別できた。対岸に位置する川平Ⅰ遺跡では検出できず、仁多町家の脇Ⅱ遺跡や本書収録の木次町垣ノ内遺跡のようにレンズ状に散在する場合など、立地や土壌堆積・生成作用の違いが与える影響は大きいと推定される。しかし調査時に検出できれば、鍵層として十分用いることができるだろう。

平成14年度に調査が行われた仁多町原田遺跡においても、太平山降下火山灰層が面的に検出されている[註16]。

第二には、包含層の区別が明確になったことで、崎ヶ鼻式の土器が火山灰降下前、四元式並行の土器が火山灰降下後に確実に位置づけられたことである。このことは一連の志津見ダム建設に伴う発掘調査でも指摘されていたことであるが、今回の調査もこれを追認する結果となった。降下火山灰がこの地域にどれほどの影響を与えたのか定かでないが、今後調査例が増加していく中で明らかになっていくことを期待したい。

まとめ

以上のように家の後Ⅰ遺跡の調査では、縄文時代中期から晩期にかけての貴重な資料を得ることができた。木次町北原に広がる広大な河岸段丘の調査は、川平Ⅰ遺跡を手始めに家の後Ⅰ遺跡、家の後Ⅱ遺跡、北原本郷遺跡と進められてきたが、全容が明らかになるにはまだ数年を要すだろう。現在の斐伊川は北原で90度近く蛇行しているが、斐伊川の流路は時代ごとに変化し、その結果として各遺跡の様相が異なっていると考えられる。最新の調査によれば、本流は現在よりも内回りでカーブしており、現在よりも南側を流れて家の後Ⅰ遺跡に至ると考えられる。家の後Ⅱ遺跡で確認されている縄文時代後期の支流合流点と、家の後Ⅰ遺跡内の川原の位置関係を考慮すると、縄文時代後期以降に本流が現在の位置へ向かって北側へシフトしていったことがわかる。家の後Ⅰ遺跡の調査結果は、こうした斐伊川の変遷と人々の関わりを垣間見せてくれるものといえる。

註１　テクノシステム株式会社製の遺跡調査システムで、光波測定器とハンディコンピュータを用いて、遺構・遺物の位置データを記録することができる。取り込んだデータは各種統計処理、図化に用いることが可能である。

註２　中村唯史氏の御教示による。

註３　^{14}C 年代測定では、飯石郡頓原町門遺跡（3710±130B.P.）、西山上（3530±100B.P.）、伊比谷（3710±100B.P.）、神原Ⅱ遺跡（3730±50B.P.）の年代が得られている。

註４　間壁忠彦ほか　1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第７号　倉敷考古館

註５　前田光雄編　2000『松ノ木遺跡Ⅴ』高知県長岡郡本山町教育委員会

註６　千葉豊は、山陰の後期土器である崎ヶ鼻式と「権現山式」について整理し、邑智郡邑智町沖状遺跡の良好な後期土器資料を用いて、崎ヶ鼻２式（彦崎Ｋ１式並行）以後で「権現山式」（彦崎Ｋ２式並行）以前に位置づけられる土器群を挙げて、沖丈式を設定した。今回、四元式並行として位置づけた土器は、この型式内で捉えられると考える。

註７　寺島孝一ほか　2001『図説　江戸考古学研究事典』江戸考古学研究会

註８　第４章第３節において土壌分析を行ったサンプルは、調査区西南壁から採取したが、この部分のセクションではＣ層が比較的厚く堆積しており、４層（同節図２、６～９層）に分層する事ができた。調査区内では圃場整備による攪乱の影響が大きく、上部の数層は削平されて残っていなかった。

註９　島根県教育委員会　2003『尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡３区・川平Ⅰ遺跡』

註10　角田徳幸　2001「板屋Ⅲ遺跡」『三瓶山周辺の縄文遺跡』第12回中四国縄文研究会　中四国縄文研究会

註11　中村唯史　1999「島根県の完新世火山灰ーとくに三瓶火山起源の火山灰層について」『島根県地学会会誌』15　島根県地学会

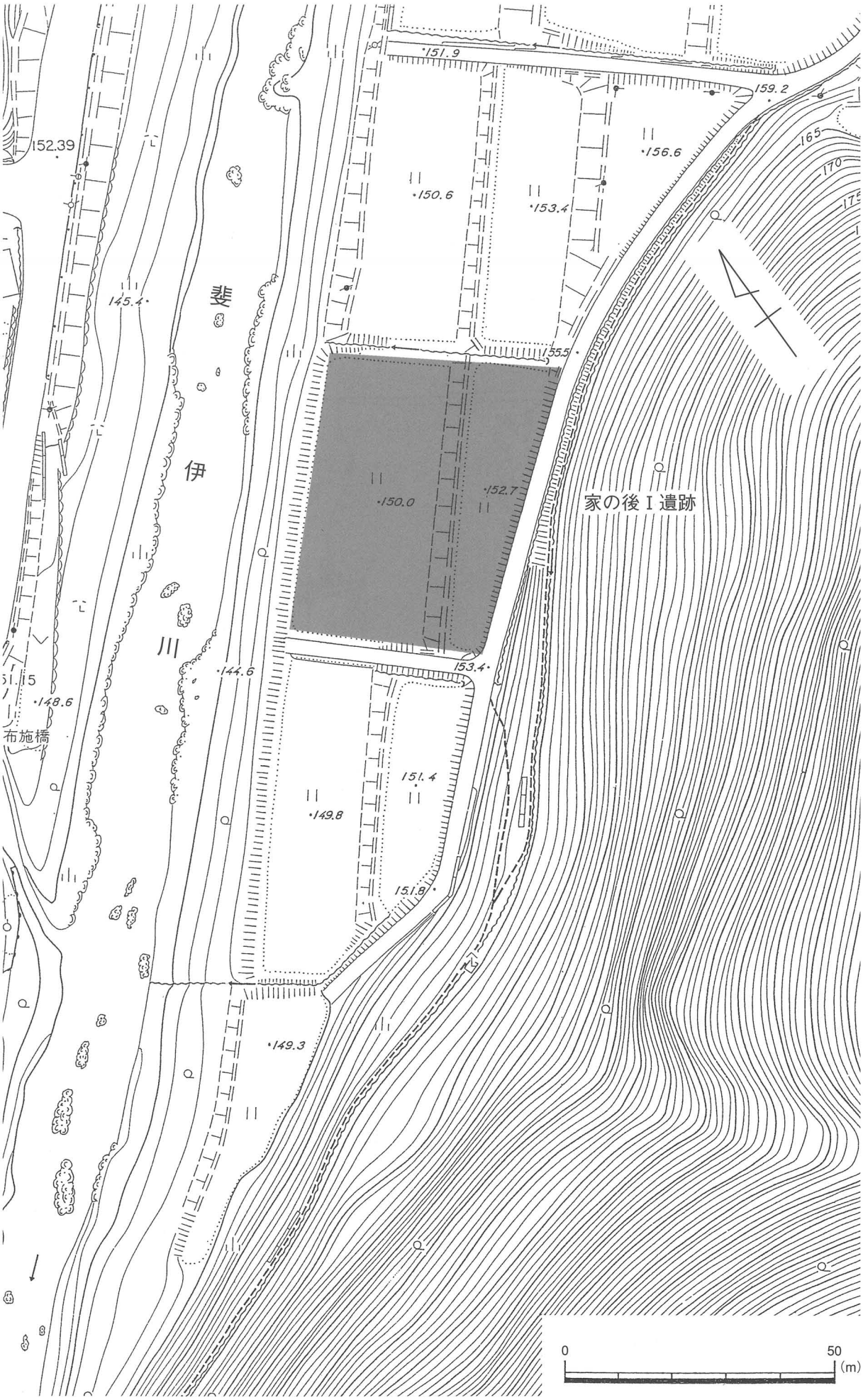
註12　中村唯史氏の御教示による。

註13　坂本諭司ほか　1997『平田遺跡』木次町文化財調査報告書　第４集　木次町教育委員会

註14　坂本諭司氏の御教示による。

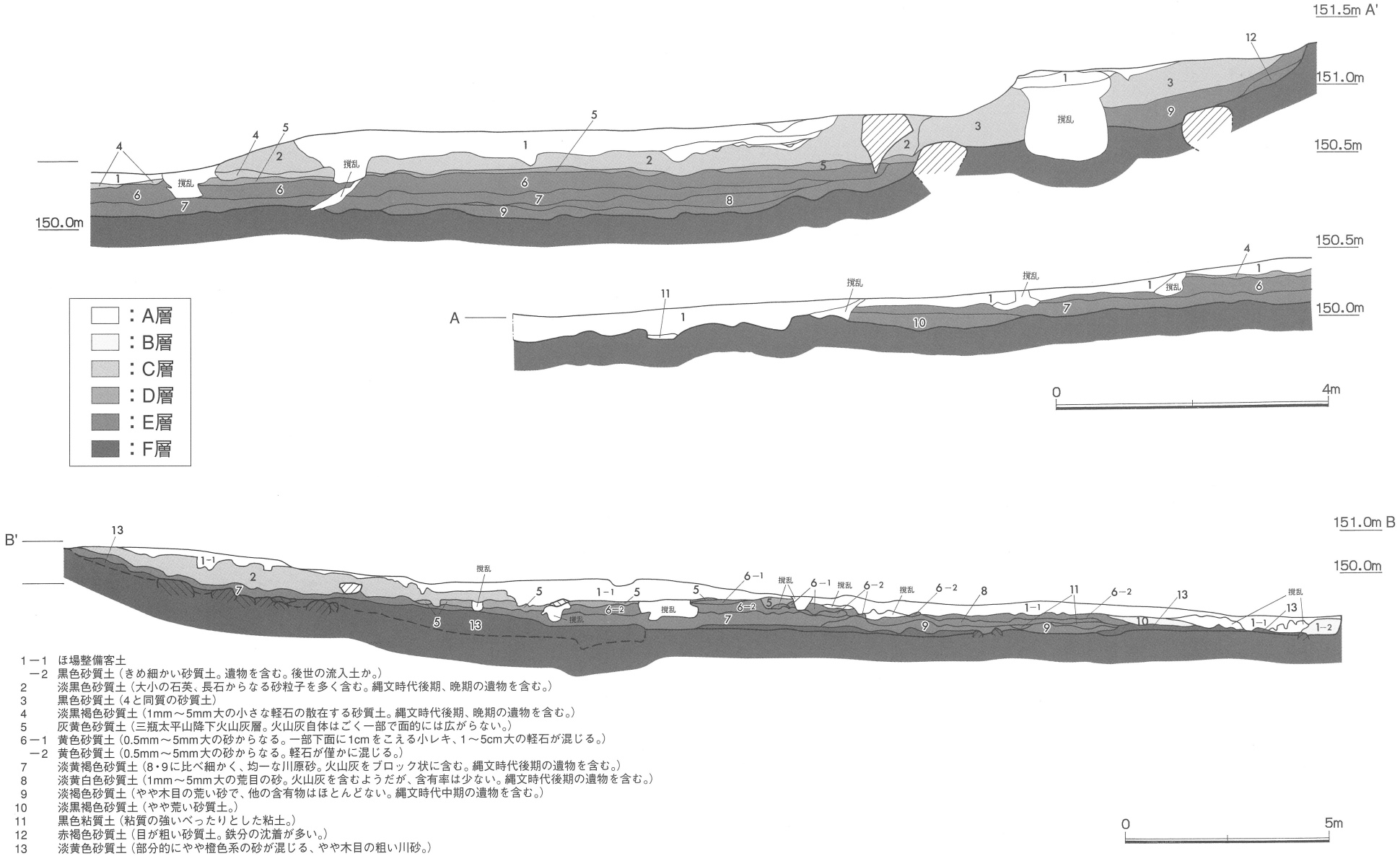
註15　島根県教育委員会　2000『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』平成11年度

註16　平成14年度島根県教育委員会調査　原田遺跡では厚さ約５㎝の太平山降下火山灰が確認され、これを挟んで２枚の包含層を検出している。



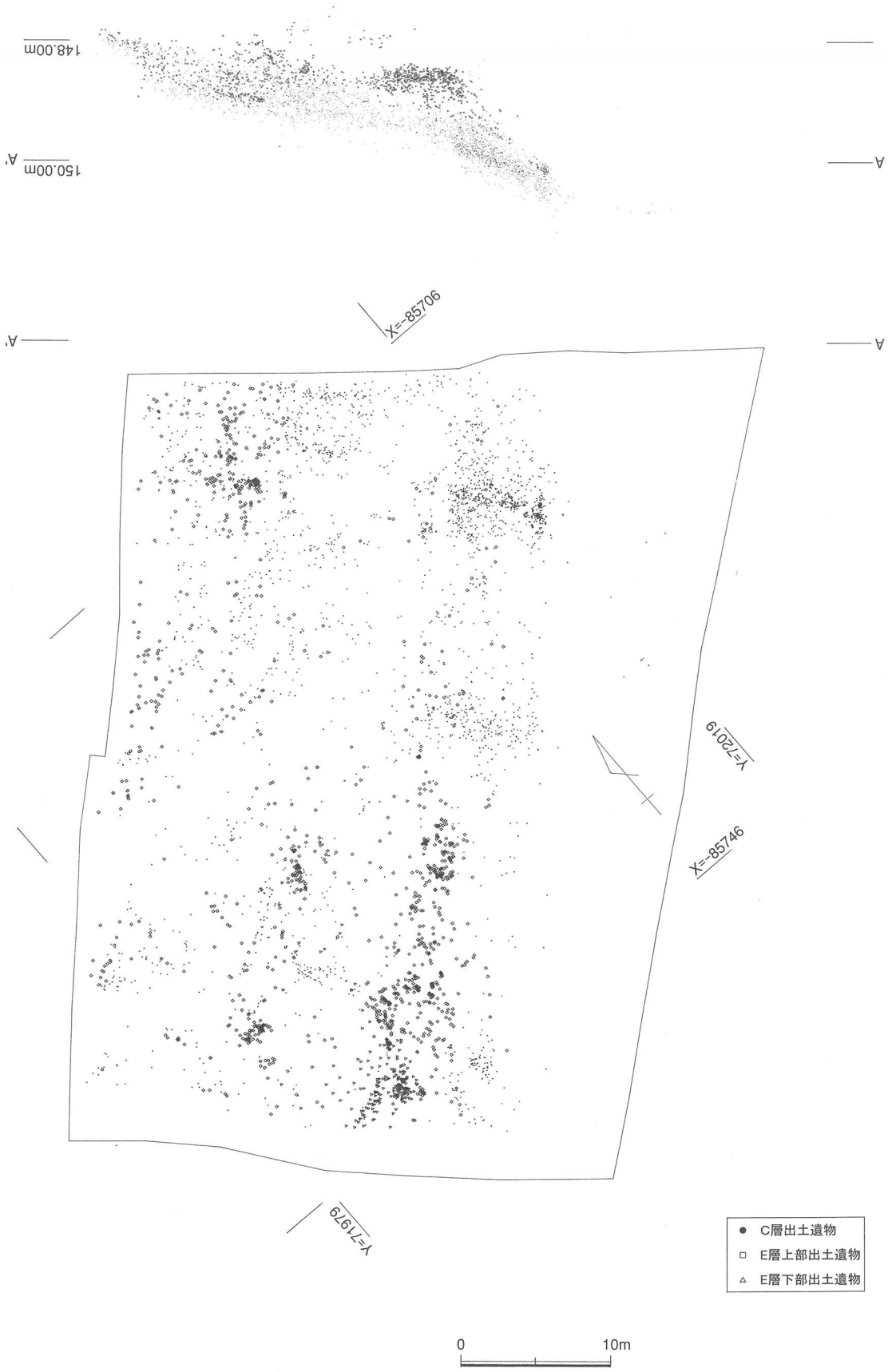
第３図　家の後Ⅰ遺跡位置図（S=1/1,000）

第４図　家の後Ⅰ遺跡調査後測量図（S＝1/400）

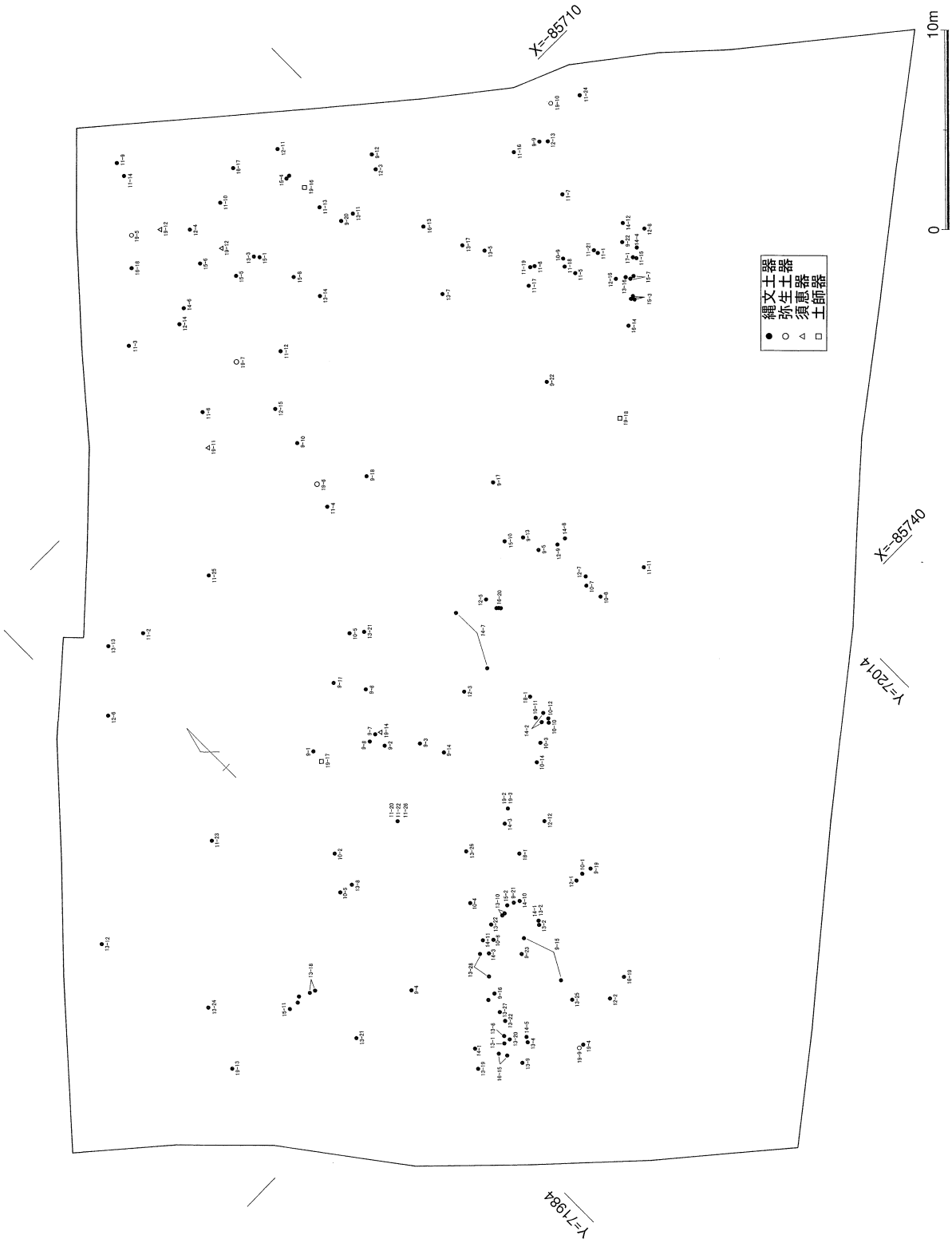


1－1　ほ場整備客土
　－2　黒色砂質土（きめ細かい砂質土。遺物を含む。後世の流入土か。）
2　　淡黒色砂質土（大小の石英、長石からなる砂粒子を多く含む。縄文時代後期、晩期の遺物を含む。）
3　　黒色砂質土（4と同質の砂質土）
4　　淡黒褐色砂質土（1mm～5mm大の小さな軽石の散在する砂質土。縄文時代後期、晩期の遺物を含む。）
5　　灰黄色砂質土（三瓶太平山降下火山灰層。火山灰自体はごく一部で面的には広がらない。）
6－1　黄色砂質土（0.5mm～5mm大の砂からなる。一部下面に1cmをこえる小レキ、1～5cm大の軽石が混じる。）
　－2　黄色砂質土（0.5mm～5mm大の砂からなる。軽石が僅かに混じる。）
7　　淡黄褐色砂質土（8・9に比べ細かく、均一な川原砂。火山灰をブロック状に含む。縄文時代後期の遺物を含む。）
8　　淡黄白色砂質土（1mm～5mm大の荒目の砂。火山灰を含むようだが、含有率は少ない。縄文時代後期の遺物を含む。）
9　　淡褐色砂質土（やや木目の荒い砂で、他の含有物はほとんどない。縄文時代中期の遺物を含む。）
10　　淡黒褐色砂質土（やや荒い砂質土。）
11　　黒色粘質土（粘質の強いべったりとした粘土。）
12　　赤褐色砂質土（目が粗い砂質土。鉄分の沈着が多い。）
13　　淡黄色砂質土（部分的にやや橙色系の砂が混じる、やや木目の粗い川砂。）

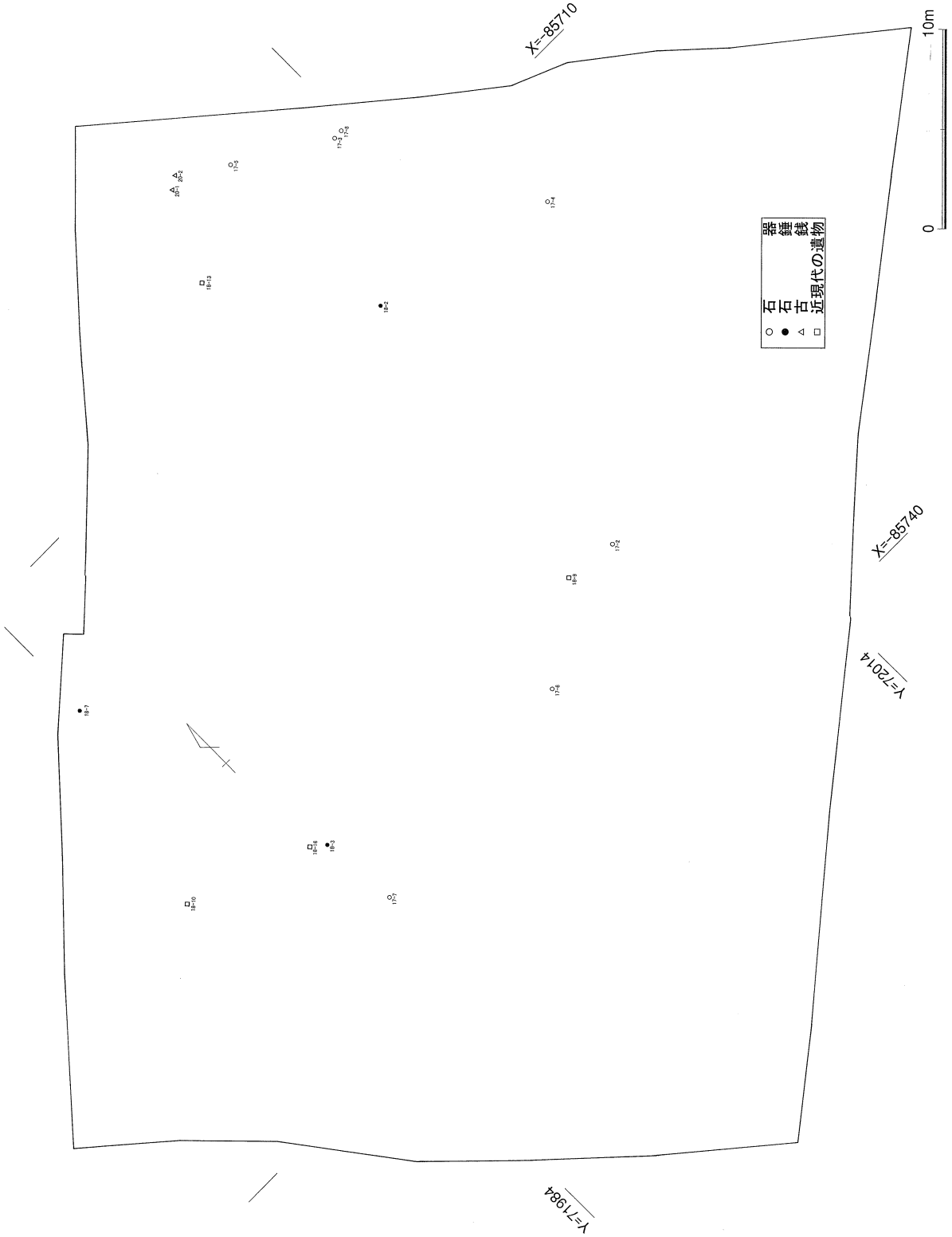
第5図　家の後Ⅰ遺跡土層図（上図S＝1/80、下図S＝3/400）



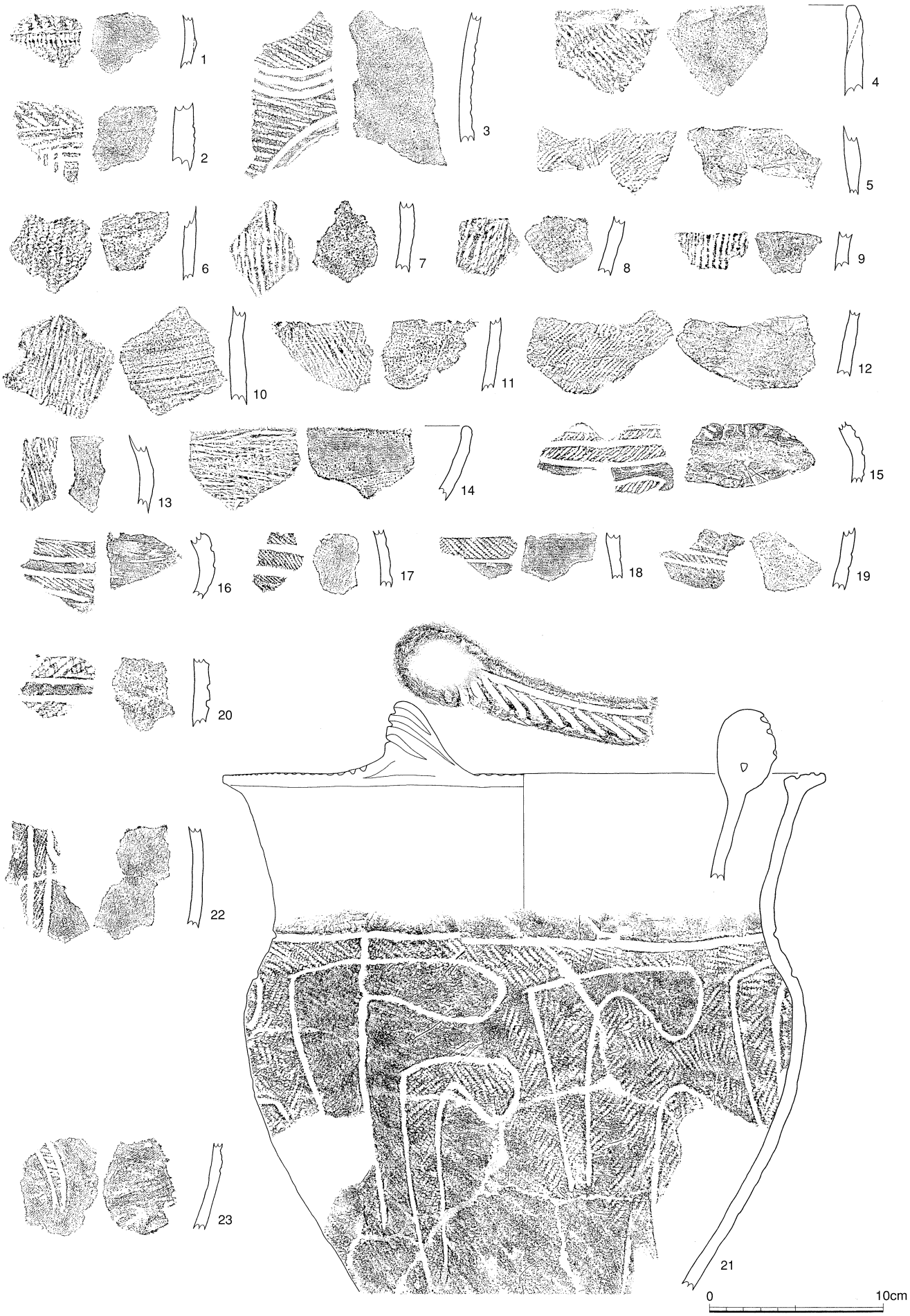
第６図　家の後Ｉ遺跡遺物出土状況図１（S=1/400）



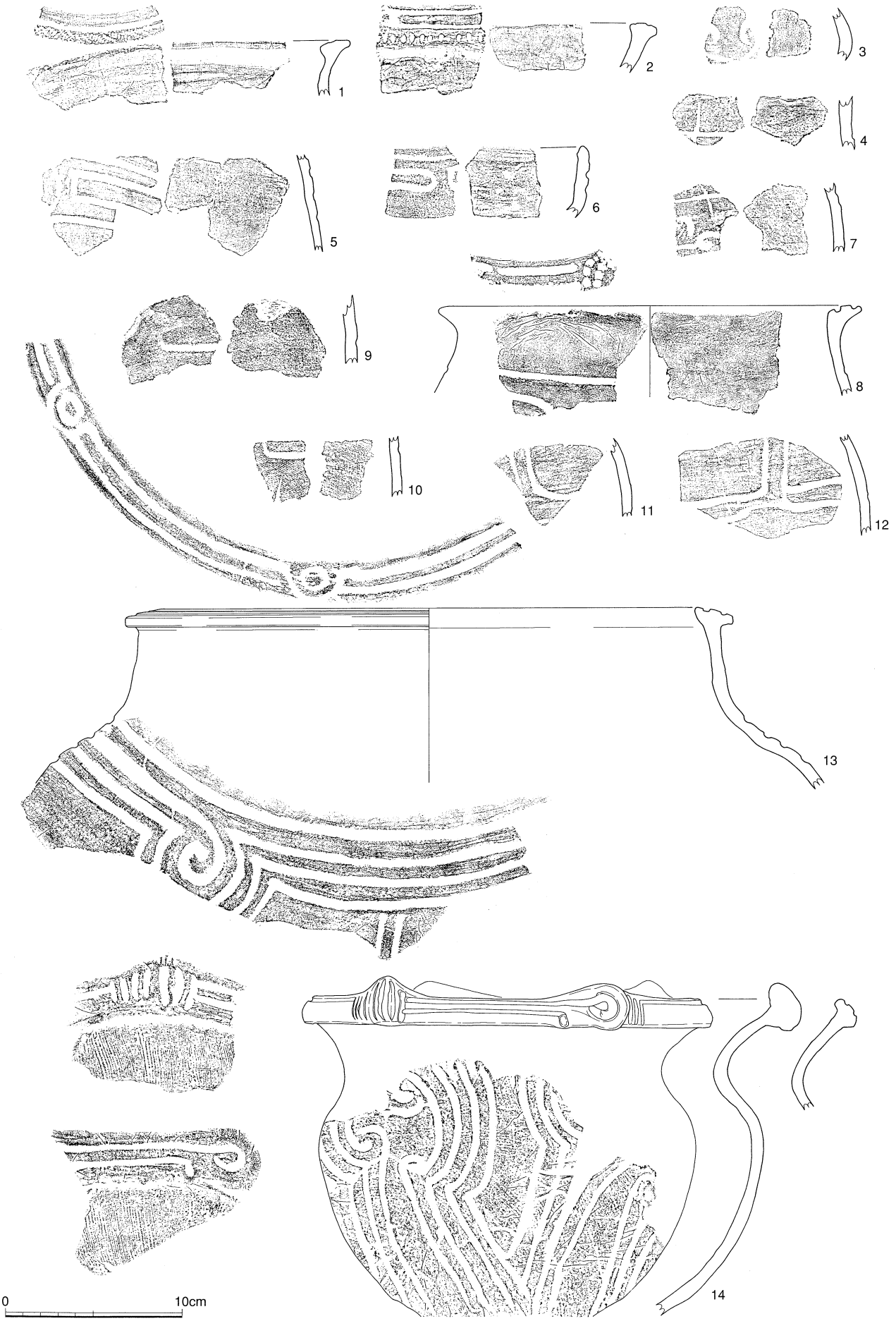
第７図　家の後Ⅰ遺跡遺物出土状況図２（S＝1/300）



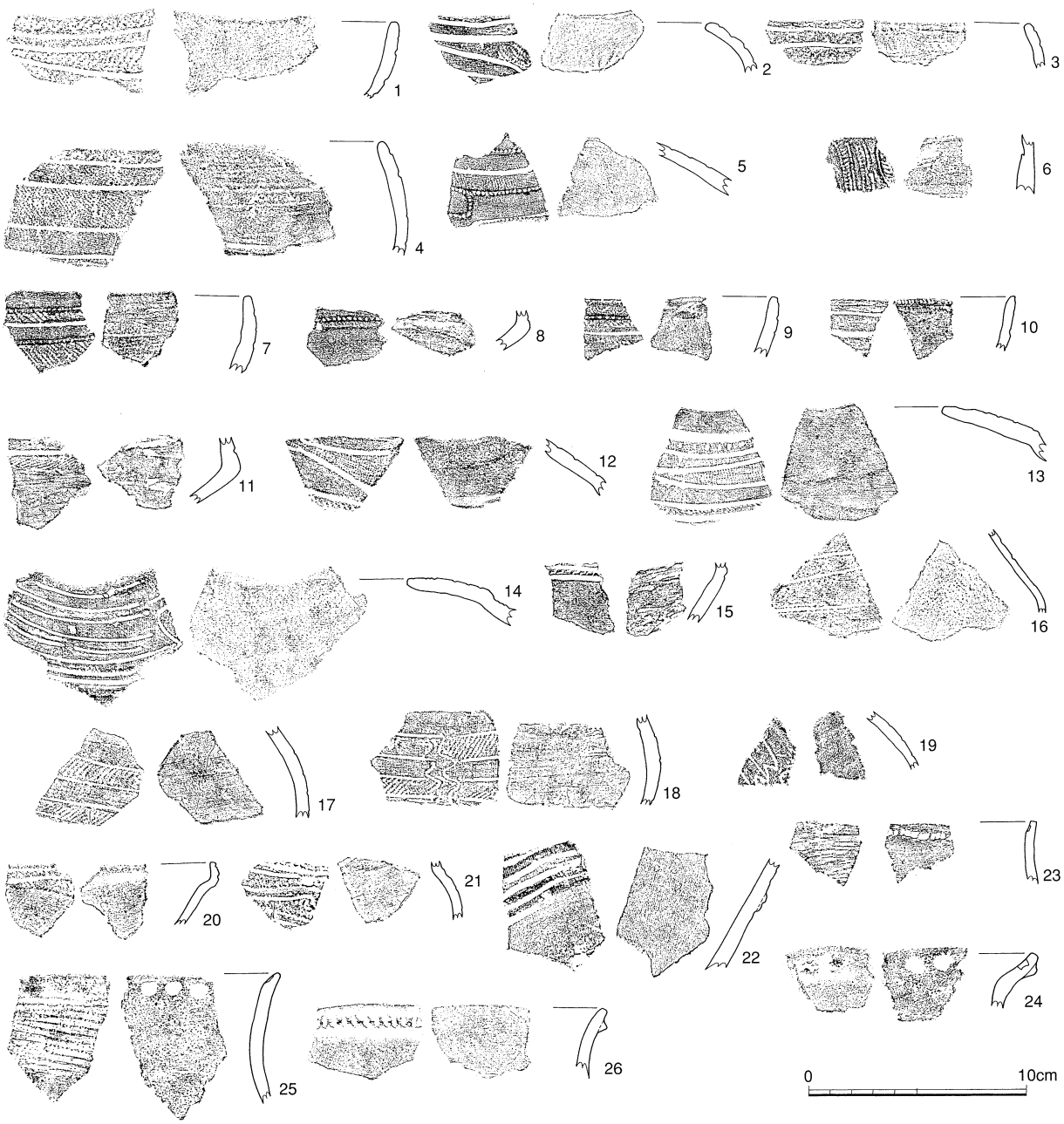
第８図　家の後Ⅰ遺跡遺物出土状況図３（S＝1/300）



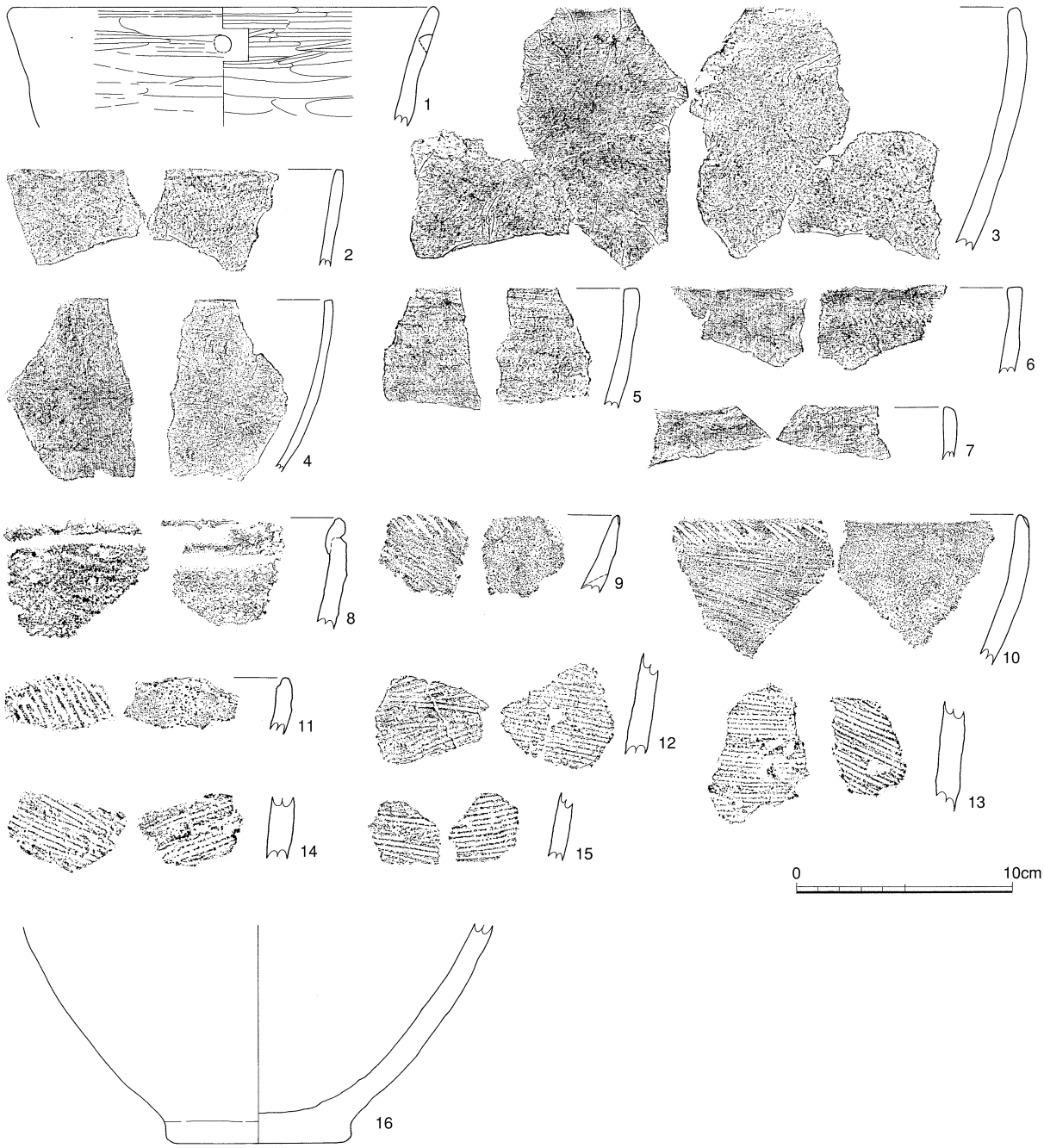
第９図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器１（S=1/3）



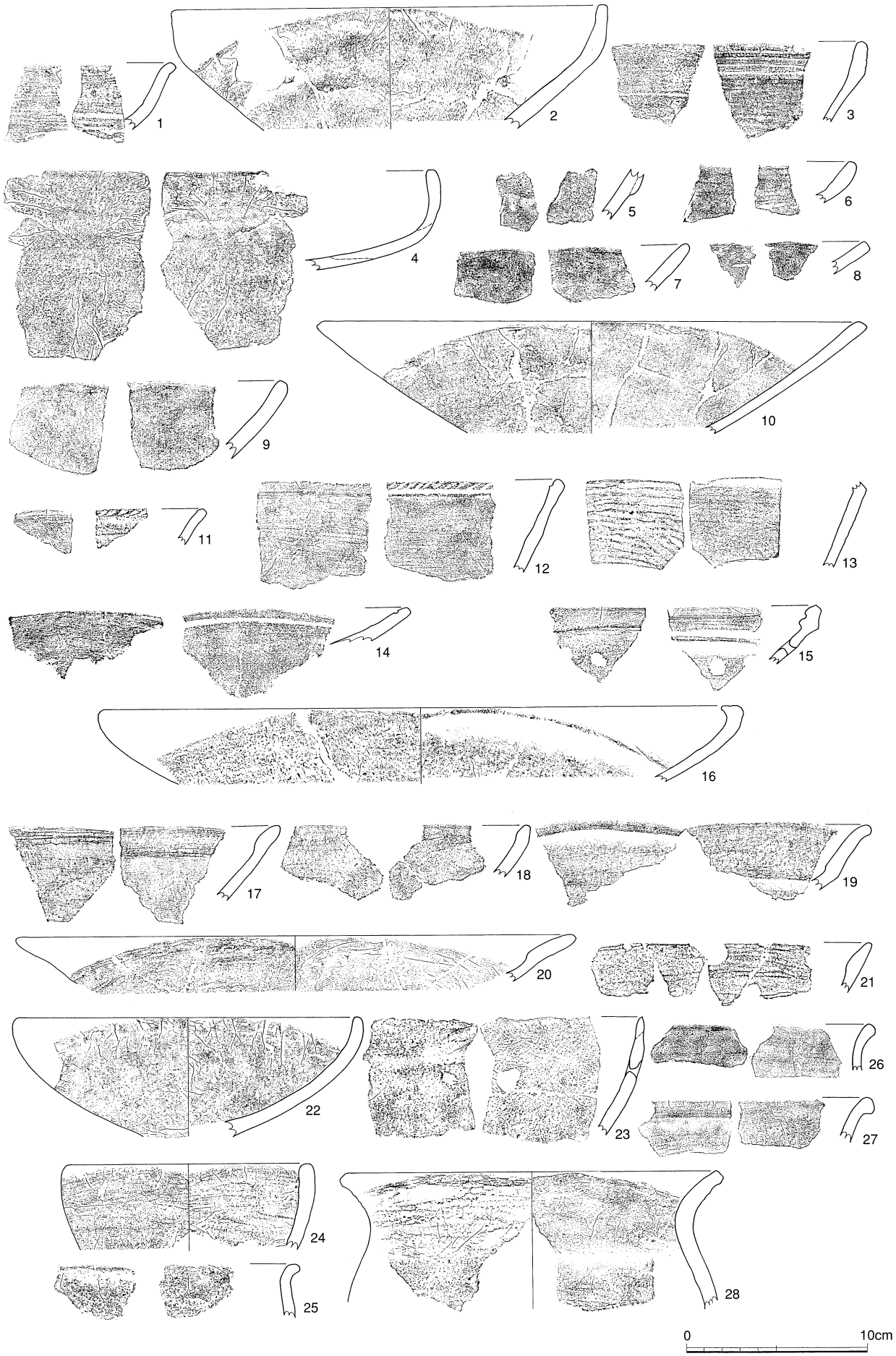
第10図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器２（S＝1/3）



第11図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器３（S＝1/3）



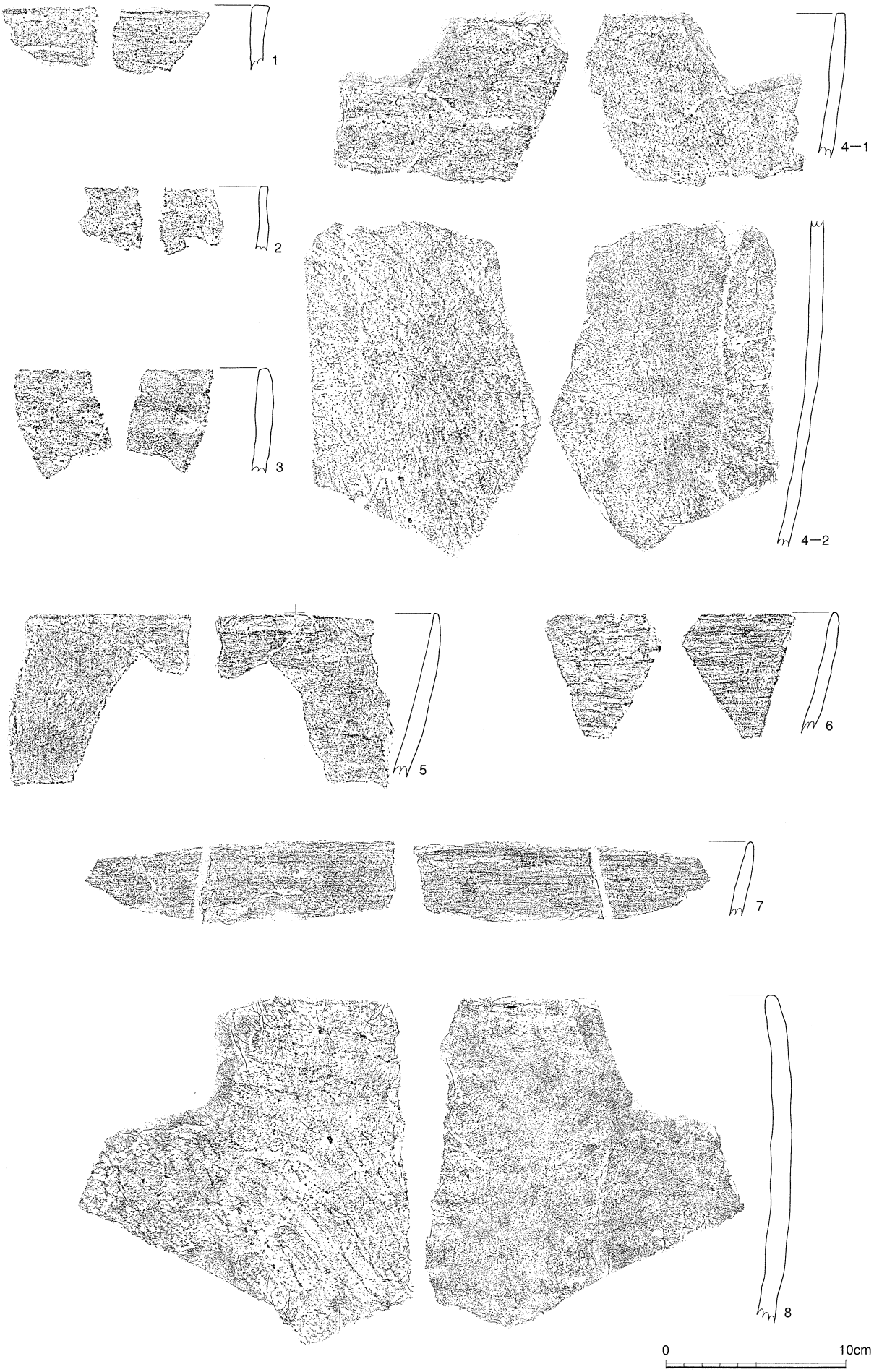
第12図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器４（S=1/3）



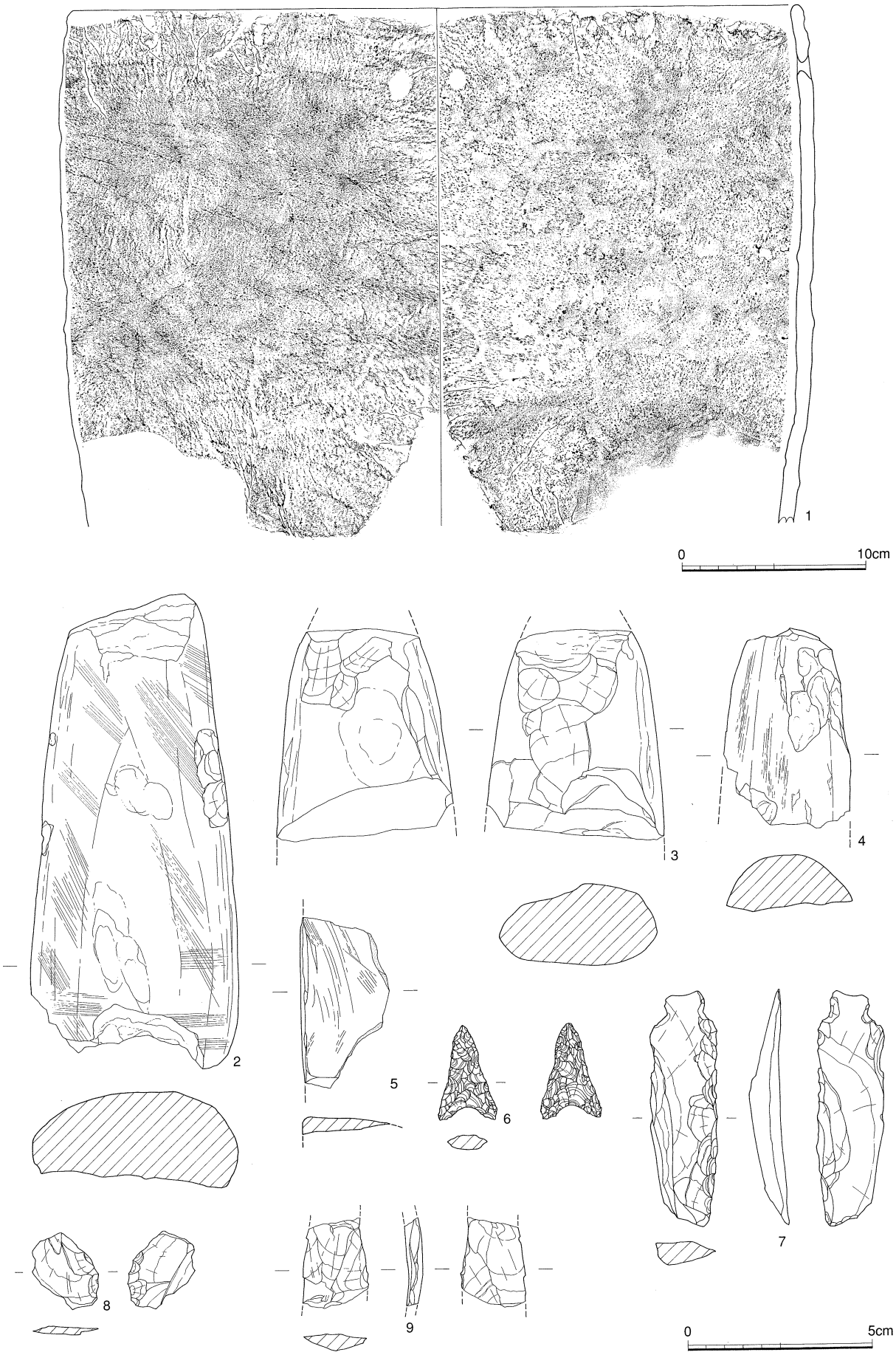
第13図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器５（S=1/3）

第14図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器６（S＝1/3）

第15図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器７（S＝1/3）

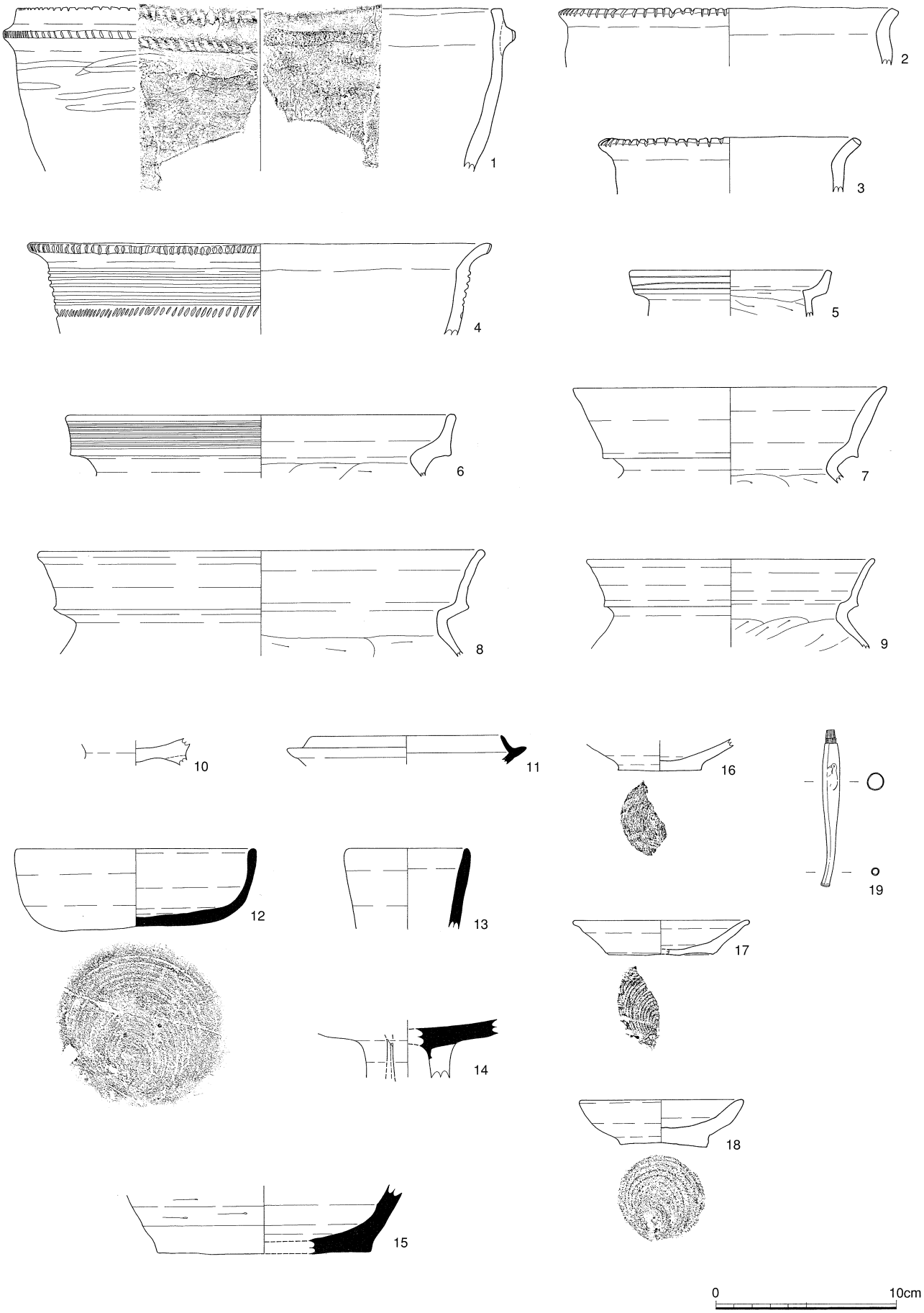


第16図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器８（S＝1/3）



第17図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文土器９・石器１（１はS=1/3、２～９はS=2/3）

第18図　家の後Ⅰ遺跡出土石器２（S＝1/3）



第19図　家の後Ⅰ遺跡出土縄文時代以降の土器（S=1/3）

第20図　家の後Ⅰ遺跡出土銭（S＝1/1）

表２　家の後Ⅰ遺跡出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	地区	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	内面の調整	外面の調整	形態・文様の特徴	備考
9	1	6	Ⅰ区	2927	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黄褐色 内：灰褐色	ナデ	縄文	貼付突帯の一種、刺突文、縄文	船元２Ａ
9	2	6	Ⅰ区	3166	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色		縄文	ナデ消し、半裁竹管文、縄文	船元２Ａ
9	3	6	Ⅰ区	3464	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡褐色	丁寧なナデ	荒い縄文	半裁竹管文、縄文	船元３
9	4	6	Ⅰ区	3159	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡赤褐色 内：淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ、押圧	撚り糸、押圧後撚り糸	里木２
9	5	6	Ⅱ区	1383	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡褐色	ナデ		ななめの撚り糸	里木２
9	6	6	Ⅰ区	2706	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡赤褐色	ナデ、削る様なナデ		ななめ方向の細かい撚り糸	里木２
9	7	6	Ⅰ区	2699	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黄褐色	ナデ		縦方向の撚り糸	里木２
9	8	6	Ⅰ区	2698	縄文	鉢	－	－	－	外：赤褐色 内：淡褐色	ヨコナデ		やや荒い撚り糸	里木２
9	9	6	Ⅲ区	1756	縄文	鉢	－	－	－	外：褐色 内：淡黒褐色	比較的丁寧なナデ		縦方向の荒目の撚り糸	里木２
9	10	6	Ⅱ区	2859	縄文	鉢	－	－	－	外：淡赤褐色 内：淡黄褐色	ヨコナデ		縦方向のやや荒目の撚り糸	里木２
9	11	6	Ⅰ区	2704	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡黒褐色	ヨコナデ		ななめ方向のやや荒目の撚り糸	里木２
9	12	6	Ⅲ区	1956	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	ヨコナデ		縦方向の撚り糸	里木２
9	13	6	Ⅱ区	1324	縄文	鉢	－	－	－	外：黒褐色 内：淡黄褐色	ナデ		ななめの撚り糸	里木２
9	14	6	Ⅰ区	3436	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡赤褐色	ヨコナデ		撚り糸（横方向後一部縦）	里木２
9	15	6	Ⅰ区	3505.3419	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ケズリ、ナデ		磨消縄文、凹線	中津２・１
9	16	6	Ⅰ区	2179	縄文	鉢	－	－	－	外：淡赤褐色 内：暗赤褐色	ヨコナデ後ミガキ		磨消縄文、凹線	中津２・１
9	17	6	Ⅱ区	3822	縄文		－	－	－	外：淡赤褐色 内：淡黒褐色	ナデ		細かい縄文、凹線	中津２・１
9	18	6	Ⅱ区	3821	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	ナデ		縄文、凹線文？	中津３
9	19	6	Ⅰ区	3709	縄文		－	－	－	外：淡褐色 内：淡黄褐色	ナデ		磨消縄文、凹線文	中津３？
9	20	6	Ⅲ区	1777	縄文		－	－	－	全面：淡黄褐色	ヨコナデ		縄文、半裁竹管文	松ノ木
9	21	7	Ⅰ区	3546他	縄文	深鉢	34.8	－	－	全面：淡赤褐色	ナデ	ナデ	口縁端部の平坦面に真っ直ぐな凹線とななめの凹線、耳状突起の突起部はななめの凹線と中央に穿孔、逆Ｌ字モチーフが入る	内面に炭化物付着、松ノ木
9	22	6	Ⅲ区	1109.3441	縄文	鉢？	－	－	－	外：淡黒褐色 内：黒色	ナデ	ナデ	凹線文	21と同一個体、松ノ木
9	23	6	Ⅰ区	3390	縄文	鉢？	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	凹線文、荒目の縄文、磨消	松ノ木
10	1	7	Ⅰ区	3711	縄文	鉢	－	－	－	外：赤褐色 内：淡褐色	ナデ後しっかりミガキ	ナデ後ミガキ	口縁端部の平坦面にミガキ、凹線、縄文	口縁部、崎ヶ鼻
10	2	7	Ⅰ区	2604	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡赤褐色	ナデ後ミガキ	ナデ	口縁端部の平坦面にミガキ、凹線、棒状工具のキザミ	口縁部、崎ヶ鼻
10	3	7	Ⅰ区	3671	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡黒褐色	ナデ	ナデ		松ノ木
10	4	7	Ⅰ区	790	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	凹線文２条	松ノ木
10	5	7	Ⅱ区	2679.3134	縄文	鉢？	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡灰褐色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	凹線文２条	松ノ木
10	6	7	Ⅰ区	2463	縄文	鉢	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ	ナデ	凹線文	崎ヶ鼻
10	7	7	Ⅱ区	432	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	ナデ	ナデ	凹線文	崎ヶ鼻
10	8	7	Ⅱ区	1527	縄文		24.0	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	ナデ後ヨコミガキ	ナデ後ヨコミガキ、ナデ、ヨコミガキ	口縁端部の平坦面に凹線を入れてからナデ	口縁部、８～12は同一個体、松ノ木
10	9	7	Ⅰ区	363	縄文		－	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹線文	口縁部、８～12は同一個体、松ノ木
10	10	7	Ⅰ区	3659	縄文		－	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	ヨコナデ	ヨコミガキ	凹線文	口縁部、８～12は同一個体、松ノ木
10	11	7	Ⅰ区	3644	縄文		－	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹線文	８～12は同一個体、内面に炭化物付着、松ノ木
10	12	7	Ⅰ区	3685	縄文		－	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹線文	８～12は同一個体、内面に炭化物付着、松ノ木

10	13	8	Ⅰ区		縄文	鉢	15.1	－	－	全面：淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ	口縁端部の平坦面に凹線を２条入れる、３条凹線モチーフ	布勢
10	14	8	Ⅰ区	3689他	縄文	鉢	(23.5)	－	－	外：淡紅褐色 内：淡灰褐色	ナデ後条痕、ナデ	ナデ	口縁端部の平坦面に凹線を２条入れる、波状口縁、縦方向の条痕、縦方向の条痕後横方向の条痕、左上がりの条痕	布勢、内面に炭化物付着
11	1	9	Ⅲ区	670	縄文	浅鉢	－	－	－	外：黒褐色 内：淡黒褐色	ナデ	ミガキ	波状の凹線文、縄文	四元
11	2	9	Ⅱ区	3902	縄文		－	－	－	全面：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹線文、縄文	口縁部、四元
11	3	9	Ⅲ区	3946	縄文	鉢？	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹線文	口縁部、四元？
11	4	9	Ⅱ区	2501	縄文	鉢	－	－	－	外：褐色 内：淡褐色	ナデ		波状の凹線文、縄文	口縁部、四元
11	5	9	Ⅲ区	19	縄文	注口？ 鉢？	－	－	－	外：黒褐色 内：淡黒褐色	ナデ	ミガキ	擬縄文、凹線内連続刺突文	彦崎Ｋ２
11	6	9	Ⅱ区	3033	縄文		－	－	－	全面：褐色	ヨコナデ		凹線内に小さな刻目の連続	元住吉山１
11	7	9	Ⅲ区	580	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	ナデ		磨消縄文、口縁内連続刺突	口縁部、四元
11	8	9	Ⅲ区	367	縄文	浅鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ	ミガキ	凹線内連続刺突	彦崎Ｋ２
11	9	9	Ⅲ区	3359	縄文	鉢	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ	ミガキ	凹線文、凹線内連続刺突	彦崎Ｋ２
11	10	9	Ⅲ区	3107	縄文	注口？ 鉢？	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ	ナデ	口縁端部に浅目の凹線内連続刺突	口縁部、元住吉山１
11	11	9	Ⅱ区	317	縄文	鉢	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ		縄文、凹線	四元
11	12	9	Ⅲ区	2006	縄文	注口？ 鉢？	－	－	－	外：淡灰褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	擬縄文、凹線内要所刺突	彦崎Ｋ２
11	13	9	Ⅲ区	1459	縄文	注口？ 鉢？	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ	ミガキ	擬縄文と楕円断面の刺突、擬縄文	口縁部、彦崎Ｋ２
11	14	9	Ⅲ区	3354	縄文	注口？ 鉢？	－	－	－	外：黒褐色 内：淡赤褐色	ナデ		凹線の端だけ刺突、凹線文、凹線内連続刺突	口縁部、彦崎Ｋ２
11	15	9	Ⅲ区	1092	縄文	鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黒褐色	ミガキ	ミガキ	凹線文、鍵状の刺突文、凹線内要所刺突	彦崎Ｋ２
11	16	9	Ⅲ区	919	縄文	鉢	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ	ナデ	凹線文	彦崎Ｋ２
11	17	9	Ⅲ区	520	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡黒褐色	ヨコナデ	ミガキ	貝殻の擬縄文	450、1165と同一個体、彦崎Ｋ２
11	18	9	Ⅲ区	45	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	ナデ	ミガキ	磨消縄文	四元
11	19	9	Ⅲ区	5	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ	ナデ	縄文	四元
11	20	9	Ⅲ区	1542	縄文	鉢	－	－	－	全面：灰黒色	ナデ	ミガキ	擬縄文（巻き貝）、頸部キザミ、一部赤色顔料	口縁部、西平
11	21	9	Ⅲ区	662	縄文	鉢	－	－	－	外：褐色 内：黒褐色	ナデ			西平
11	22	10	Ⅰ区	1542	縄文	浅鉢	－	－	－	外：褐色 内：黒褐色	ナデ		凹線文	口縁部
11	23	10	Ⅰ区	2323	縄文		－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	角状の棒状工具による連続刺突	谷尻
11	24	10	Ⅲ区	3631	縄文	鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黒褐色	ナデ	ナデ	口縁先端部に竹管状工具での刺突	谷尻
11	25	10	Ⅱ区	2939	縄文	鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：褐色	ヨコナデ	横方向の貝殻条痕、ナデ	口縁先端部に竹管状工具での刺突	谷尻
11	26	9	Ⅰ区	1542	縄文	鉢	－	－		外：褐色 内：黒褐色	ナデ		貼付突帯にキザミ	谷尻
12	1	10	Ⅰ区	3713	縄文	鉢？	－	－	－	全面：淡褐色	幅の違う２種のミガキ	幅の違う２種のミガキ	半穿孔	突帯文
12	2	10	Ⅰ区	858	縄文	深鉢	－	－	－	外：黒色 内：淡黒褐色	しっかりナデ、ナデ	ミガキ、ナデ	端部をなでた後内側をなでる	
12	3	10	Ⅲ区	1957.3410	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、丁寧なナデ後ミガキ		外面の一部に煤付着
12	4	10	Ⅲ区	3206	縄文		－	－	－	外：黒褐色 内：褐色	ヨコミガキ	ナデ	口縁端部は平坦	
12	5	10	Ⅲ区	893	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	口縁端部は平坦、ミガキ	
12	6	10	Ⅰ区	2177	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	ヨコミガキ	ナデ後ヨコミガキ、ナデ	口縁端部は平坦	
12	7	10	Ⅱ区	1426	縄文	深鉢	－	－	－	外：暗黒色 内：淡黒色	丁寧なヨコミガキ	ヨコナデ		
12	8	10	Ⅲ区	400	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ	ナデ、条痕	口縁端部に三日月形の刺突、凹線文	
12	9	10	Ⅱ区	195	縄文	浅鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ	ナデ、条痕	口縁端部に斜めのキザミ、波状口縁か？	
12	10	10	Ⅱ区	旧土器溜り１	縄文	鉢	－	－	－	外：黒褐色 内：淡赤褐色	ナデ	ナデ、条痕	口縁端部に斜めのキザミ、波状口縁か？	
12	11	10	Ⅲ区	2969	縄文	鉢？	－	－	－	全面：淡黄褐色	ヨコナデ	条痕、ナデ		
12	12	10	Ⅰ区	3703	縄文	深鉢	－	－	－	外：黒褐色 内：赤褐色	横方向の条痕	横方向の条痕、斜めの条痕		
12	13	10	Ⅲ区	1755	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡赤褐色 内：淡黒褐色	横方向の条痕	条痕		
12	14	10	Ⅲ区	3128	縄文	鉢？	－	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	横方向の条痕	条痕		
12	15	10	Ⅱ区	2856	縄文	鉢？	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡黒褐色	横方向の条痕	横方向の条痕、ナデ		
12	16	11	Ⅲ区	1012他	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡赤褐色 内：黒褐色	ナデ	ナデ		内面に炭化物
13	1	11	Ⅰ区	2214	縄文	鉢	－	－	－	外：淡赤褐色 内：暗赤褐色	荒いナデ後ミガキ、ミガキ	荒いナデ	口縁端部ミガキ	
13	2	11	Ⅰ区	3514.3522	縄文	鉢	24.2	－	－	外：淡黄褐色 内：淡褐色	ナデ、ナデ後ミガキ	ナデ、ナデ後ミガキ		
13	3	11	Ⅲ区	2758	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	ナデ	沈線、ミガキ		

13	4	11	Ⅰ区	2203	縄文	鉢？	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡白褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ		内面に赤色顔料
13	5	11	Ⅲ区	1977	縄文	浅鉢？	－	－	－	外：淡黄褐色 内：淡褐色	しっかりしたミガキ	貼付後ナデ、ナデ後ミガキ		
13	6	11	Ⅰ区	2218	縄文	鉢	－	－	－	外：黒色 内：暗褐色	ナデ後ヨコのミガキ、ナデ	ナデ後ヨコのミガキ		
13	7	11	Ⅲ区	3836	縄文	浅鉢	－	－	－	外：黒色 内：暗褐色	ナデ後ミガキ	ミガキ		
13	8	11	Ⅰ区	2685	縄文	鉢？	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ後ヨコのミガキ	ナデ後ヨコのミガキ		
13	9	11	Ⅰ区	2241	縄文	浅鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ後ヨコのミガキ	ナデ後ヨコのミガキ、ミガキ		
13	10	11	Ⅰ区	3396.3397	縄文	浅鉢	30.4	－	－	外：淡赤褐色 内：褐色	ヨコの丁寧なミガキ	しっかりしたヨコミガキ	口縁端部ミガキ	内面の一部に煤
13	11	11	Ⅲ区	1409	縄文	浅鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡赤褐色	ミガキ	ナデ後ミガキ	口縁端部内側ななめのキザミ	
13	12	11	Ⅰ区	2275	縄文	鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黄褐色	ナデ	ミガキ	口縁端部内側ななめのキザミ	
13	13	11	Ⅱ区	3910	縄文	浅鉢？	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黒褐色	ミガキ	ヨコの貝殻条痕		
13	14	11	Ⅲ区	2005	縄文	浅鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黒褐色	ナデ、ミガキ	ミガキ	口縁端部内側に凹線文１条	
13	15	11	Ⅰ区	不明	縄文	方形浅鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黒褐色	ミガキ	ヨコナデ	口縁端部内側に凹線文２条、その下瓦孔(修繕？)	
13	16	12	Ⅲ区	1030	縄文	浅鉢	35.6	－	－	全面：黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁端部は平坦	
13	17	12	Ⅲ区	1980	縄文	浅鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	ミガキ	ナデ後ミガキ	口縁端部が肥厚	
13	18	12	Ⅰ区	3783.3784	縄文	浅鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	ミガキ	ミガキ		
13	19	12	Ⅰ区	2039	縄文	浅鉢	－	－	－	全面：淡赤褐色	ナデ後ミガキ	ミガキ		
13	20	12	Ⅰ区	2063.2215	縄文	浅鉢	(30.9)	－	－	外：暗赤褐色 内：暗褐色	ミガキ	ミガキ		
13	21	12	Ⅱ区	2975.3143	縄文	浅鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡赤褐色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ		
13	22	12	Ⅰ区	2196.3312	縄文	浅鉢	19.4	－	－	外：黒褐色 内：淡褐色	ナデ後丁寧なミガキ	ナデ後ヨコの丁寧なミガキ		外面の一部に煤
13	23	12	Ⅰ区	2363	縄文	深鉢	－	－	－	全面：黒褐色	ヨコナデ	ナデ、焼成後穿孔		
13	24	12	Ⅰ区	2663	縄文	鉢？	－	－	－	全面：淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		
13	25	12	Ⅰ区	3433	縄文	深鉢？	－	－	－	外：黒褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ		
13	26	12	Ⅰ区	3344	縄文	鉢	－	－	－	外：淡黒褐色 内：黒褐色	ミガキ	ミガキ		
13	27	12	Ⅰ区	2065	縄文	鉢？	－	－	－	外：淡赤褐色 内：淡黄褐色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ		
13	28	12	Ⅰ区	2458.2473	縄文		20.5	－	－	全面：淡褐色	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ		
14	1	12	Ⅰ区	2360.3518	縄文	深鉢	21.8	－	－	全面：淡黄褐色	丁寧なヨコナデ	比較的丁寧なヨコナデ	粗製	口縁部
14	2	12	Ⅰ区	3663.3664	縄文	深鉢		－	－	外：淡黄褐色 内：淡赤褐色	丁寧なヨコナデ、ナデ	ナデ	粗製	口縁部
14	3	12	Ⅱ区	2362.3483	縄文	深鉢	25.6	－	－	全面：淡褐色	丁寧なヨコナデ	ナデ	粗製	口縁部
14	4	12	Ⅲ区	1105	縄文	深鉢	－	－	－	外：褐色 内：淡褐色	丁寧なナデ、指頭圧痕	ナデ	粗製	口縁部
14	5	12	Ⅰ区	2204	縄文	深鉢	－	－	－	外：赤黒褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	粗製	口縁部
14	6	12	Ⅲ区	3198	縄文	深鉢	－	－	－	外：淡黄褐色 内：黒褐色	ナデ	ナデ	粗製	口縁部
14	7	13	Ⅰ区	1750.1656	縄文	深鉢	19.4	－	－	全面：淡黒褐色	丁寧なヨコナデ	ナデ後ミガキ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
14	8	12	Ⅱ区	3844.3883	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	丁寧なナデ	丁寧なヨコナデ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
14	9	13			縄文		－	－	－	全面：淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
14	10	13	Ⅰ区	3545	縄文	深鉢	33.6	－	－	全面：淡黄褐色	丁寧なヨコナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平坦、瓦孔	口縁部
14	11	13	Ⅰ区	2365	縄文	鉢？	－	－	－	全面：淡赤黄色	ナデ後ミガキ	ナデ	粗製	口縁部
14	12	13	Ⅲ区	266	縄文	鉢	－	－	－	外：赤褐色 内：暗褐色	丁寧なヨコナデ	ナデ	粗製	口縁部
15	1	13	Ⅲ区	2750	縄文	深鉢	－	－	－	外：暗赤褐色 内：淡黄褐色	ナデ	ナデ、ナデ		口縁部
15	2	13	Ⅰ区	3402	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	しっかりナデ、比較的丁寧なヨコナデ	ナデ、荒いナデ		口縁部、残存率1/3
15	3	13	Ⅳ区	984.985.986	縄文	深鉢	(26.4)	－	－	全面：淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ややヨコナデ		外面に一部炭化物付着、残存率1/6
15	4	13	Ⅲ区	2829	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	ナデ	ナデ		口縁部
15	5	13	Ⅲ区	2769	縄文		－	－	－	全面：淡黒褐色	ヨコナデ、ナデ	ナデ後ミガキ		口縁部
15	6	13	Ⅲ区	3244	縄文	鉢	－	－	－	外：黒褐色 内：淡褐色	丁寧なヨコナデ、ナデ	ナデ		口縁部
15	7	13	Ⅲ区	1031.1121	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡褐色	比較的丁寧なヨコナデ	しっかりしたヨコナデ、荒いヨコナデ	外面が一部黒色	口縁部
15	8	13	Ⅲ区	2082	縄文		－	－	－	外：淡赤褐色 内：褐色	ナデ	ナデ		口縁部
15	9	13	Ⅲ区		縄文	深鉢	－	－	－	外：淡褐色 内：淡黒褐色	巻き貝によるヨコの条痕	ナデ	口縁端部は平坦	
15	10	13	Ⅱ区	942	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡褐色	ナデ	ナデ		口縁部、外面の一部に煤付着
15	11	13	Ⅰ区	3788.3793.3794.3799	縄文	鉢	－	－	－	外：黒色 内：淡褐色	ナデ、板状工具のナデ	ナデ		口縁部

16	1	14	Ⅲ区	2098	縄文	深鉢	－	－	－	外：赤褐色 内：淡赤褐色	ナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
16	2	14	Ⅲ区	76	縄文	鉢？	－	－	－	外：赤褐色 内：淡赤褐色	ナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
16	3	14	Ⅰ区	2232.2233	縄文	深鉢	－	－	－	外：黒褐色 内：淡褐色	ナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
16	4−1.	14			縄文	深鉢	－	(7.9)	－	全面：淡灰褐色	丁寧なヨコナデ	ナデ	粗製、口縁端部は平坦	同一個体、外面に一部炭化物付着
16	4−2.	14			縄文	深鉢	－	(7.9)	－	全面：淡灰褐色	比較的丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	粗製	
16	5	14	Ⅲ，Ⅳ区	2967.3084	縄文	鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	比較的丁寧なヨコナデ、ヨコナデ	やや荒いヨコナデ、ヨコナデ	粗製	口縁部
16	6	14	Ⅲ区	3370	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡黄褐色	荒いナデ、ナデ	やや荒いヨコナデ	粗製	口縁部
16	7	14	Ⅰ区	1186	縄文	鉢	－	－	－	全面：黒褐色	ナデ後丁寧なヨコミガキ、ナデ	ナデ	粗製	外面の一部に煤付着、口縁部
16	8	14	Ⅱ区	3861.3863. 3864.3865	縄文	深鉢	－	－	－	全面：淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	粗製、口縁端部は平坦	口縁部
17	1	14	Ⅲ区	1091他	縄文	深鉢	39.4	－	－	全面：淡黒褐色	丁寧なナデ、ナデ、後に穿孔	ナデ		1048.1079～ 1085.1089～ 1091.1094. 1279
19	1	16	Ⅰ区	3568.3469	縄文	深鉢	28.4	－	－	外：赤褐色 内：淡褐色	ヨコナデ、強いナデ	ナデ、ミガキ	口縁端部はキザミ、口縁下は突帯を付け棒状工具のキザミ	突帯文
19	2	16	Ⅰ区	3500	弥生	甕	(18.0)	－	－	全面：淡黄褐色	ヨコナデ、ナデ	ナデ	口縁端部はヘラ状工具を用いたキザミ	
19	3	16	Ⅰ区	3500	弥生	甕	14.6	－	－	外：淡赤褐色 内：淡褐色	ヨコナデ、ナデ	ナデ	口縁端部はヘラ状工具を用いたキザミ	
19	4	16	Ⅰ区	792	弥生	甕	25.7	－	－	外：淡赤褐色 内：淡黄褐色	ヨコナデ、ナデ	ナデ	口縁端部はヘラ状工具を用いたキザミ、頸部凹線文６条、胴部刺突文	
19	5	16	Ⅲ区	3256	弥生	壺	10.8	－	－	全面：淡黄褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	口縁にヘラ状工具による線刻	
19	6	16	Ⅱ区	2384	弥生	甕	21.5	－	－	全面：淡褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	口縁部に擬凹線文	
19	7	16	Ⅲ区	3926	弥生	甕	17.3	－	－	外：淡褐色 内：淡赤褐色	ナデ、ケズリ	ナデ		外面の一部に煤
19	8	16			弥生	甕	24.4	－	－	外：淡褐色 内：淡赤褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	口縁端部は平坦にナデ	
19	9	16	Ⅰ区	791	弥生	甕	16.0	－	－	全面：淡灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ		
19	10	16	Ⅲ区	1665	弥生	低脚坏	－	－	－	外：淡褐色 内：淡赤褐色	ナデ	ナデ	脚台は後からナデつけ	
19	11	16	Ⅰ区	2885	須恵器	坏身	10.6	－	－	全面：淡灰色	ナデ	ナデ		
19	12	16	Ⅰ区	3266.3102	須恵器	坏身	13.2	4.5	8.0	全面：淡灰褐色	ナデ	ヨコナデ	底部回転糸切	
19	13	16	Ⅰ区	2163	須恵器	直口壷	6.6	－	－	全面：灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ		口縁部内面に自然釉
19	14	16	Ⅰ区	1350	須恵器	高坏	－	－	－	全面：灰白色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、スカシ	透かし有り	
19	15	16			須恵器	底部	－	－	9.8	全面：淡灰白色	ヨコナデ	荒いケズリ、ナデ	底部ヘラ切り後ナデ	
19	16	16	Ⅲ区	1900	土師質土器	皿	－	－	4.6	全面：淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部回転糸切	
19	17	16	Ⅰ区	2563	土師質土器	皿	9.8	1.9	5.7	全面：淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部回転糸切	
19	18	16	Ⅲ区	3934	土師質土器	皿	9.0	2.7	4.8	全面：淡褐色	ナデ	ナデ	底部回転糸切	
19	19	16	Ⅱ区			煙管	8.7	1.4	1.0	全面：淡褐色			鶴のような鳥の絵	真鍮製？18～19世紀

表３　家の後Ⅰ遺跡出土打製、磨製石製品観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	台帳番号	種　別	調査区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　　考
17	2	15	1	磨製石斧	Ⅰ区	(12.80)	5.60	(2.60)	283.74	流紋岩	乳棒状石斧の破片で約1/2が残る。刃部欠損。
17	3	15	2	磨製石斧	Ⅲ区	(5.60)	4.80	2.20	109.48	堆積岩	乳棒状石斧残片で、約1/3が残る。刃部欠損。
17	4	15	3	磨製石斧	Ⅲ区	(5.30)	3.40	(1.50)	35.59		乳棒状石斧残片で、約1/6が残る。刃部欠損。
17	5	15	4	砥石	Ⅲ区	(4.60)	(2.40)	(0.40)	8.14		乳白色の砥石片。

表４　家の後Ⅰ遺跡出土剥片石器、二次加工剥片、剥片観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	台帳番号	種　別	調査区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　　考
17	6	15	1	石鏃	Ⅰ区	2.52	1.55	0.40	1.14	黒曜石	凹基無茎石鏃(長身)分析 No.80586
17	7	15	2	石匙	Ⅰ区	6.27	1.81	0.84	11.20	安山岩	縦形で一辺のみ刃を付けている。
17	9	15	3	楔形石器	Ⅲ区	(2.32)	1.78	0.51	2.46	安山岩	端部は欠損。分析 No.80584
17	8	15	4	二次加工剥片	Ⅲ区	2.18	1.49	0.28	1.06	安山岩	石器製作途上で割れたものか。
			5	二次加工剥片	Ⅲ区	2.60	2.03	0.41	1.73	安山岩	
			6	二次加工剥片	－	2.15	1.09	0.28	0.78	安山岩	

			7	二次加工剥片	Ⅰ区	14.32	14.18	1.92	170.23	安山岩	板状剥片素材から剥片をある程度採った後の大型の残片。厚さの薄い一辺に連続した剥離痕があるが、刃部として調整されたものかは不明。
			8	剥片	Ⅰ区	2.05	1.79	0.69	0.87	黒曜石	
			9	剥片	Ⅱ区	2.83	0.99	0.68	1.84	黒曜石	
			10	剥片	Ⅲ区	1.60	1.30	0.15	0.35	黒曜石	
			11	剥片	Ⅲ区	2.87	1.55	0.84	2.28	黒曜石	
			12	剥片	Ⅲ区	2.75	1.00	0.37	1.07	黒曜石	
			13	剥片	Ⅲ区	1.68	0.94	0.20	0.35	黒曜石	
			14	剥片	－	1.60	1.49	0.42	0.89	黒曜石	
			15	剥片	－	3.27	1.33	1.13	3.25	黒曜石	
			16	剥片	Ⅰ区	2.36	1.42	0.32	1.21	安山岩	
			17	剥片	Ⅰ区	2.68	1.86	0.58	2.53	安山岩	
			18	剥片	Ⅰ区	3.65	2.87	1.00	7.92	安山岩	
			19	剥片	Ⅰ区	2.74	1.80	0.28	1.52	安山岩	
			20	剥片	Ⅰ区	3.14	2.00	0.36	2.11	安山岩	
			21	剥片	Ⅰ区	3.14	2.53	0.36	3.43	安山岩	
			22	剥片	Ⅰ区	2.05	1.08	0.16	0.58	安山岩	
			23	剥片	Ⅰ区	3.47	1.94	0.25	2.31	安山岩	
			24	剥片	Ⅰ区	3.75	1.94	0.25	2.31	安山岩	
			25	剥片	Ⅱ区	2.30	2.02	0.33	1.72	安山岩	
			26	剥片	Ⅱ区	3.02	2.13	0.56	2.87	安山岩	
			27	剥片	Ⅱ区	2.56	1.47	0.59	2.93	安山岩	分析 No.80585
			28	剥片	Ⅲ区	8.53	3.12	0.43	15.88	安山岩	
			29	剥片	Ⅲ区	2.62	2.31	0.26	1.78	安山岩	
			30	剥片	Ⅲ区	3.54	1.64	0.41	2.48	安山岩	
			31	剥片	Ⅲ区	3.34	1.22	0.36	1.45	安山岩	
			32	剥片	Ⅲ区	1.46	0.92	0.13	0.27	安山岩	
			33	剥片	Ⅲ区	1.92	1.83	0.18	0.73	安山岩	
			34	剥片	Ⅲ区	2.55	1.43	0.45	1.67	安山岩	
			35	剥片	Ⅲ区	1.95	0.92	0.16	0.26	安山岩	
			36	剥片	Ⅰ区	2.55	1.81	0.82	3.92	瑪瑙	一部を残して変色しており、熱を受けた可能性がある。

表５　家の後Ⅰ遺跡出土礫石器観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	台帳番号	種別	調査区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
18	13	15	1	磨石	Ⅲ区	2793	17.80	9.05	6.09	1,600	棒状の桂化木で一端に擦痕が残る
18	14	15	2	磨石		S2	18.00	5.80	4.43	570	棒状の桂化木で一端に擦痕が残る。約1/4が残る
			3	－	Ⅲ区	550	4.33	3.07	1.99	300	
			4	－	Ⅲ区	2419	8.33	3.52	2.31	110	
18	10	15	5	磨石	Ⅰ区	2930	6.68	4.95	4.02	190	両端に磨痕および剥離痕
18	8	15	6	敲石	Ⅰ区		7.05	2.78	1.60	55	一端に磨痕
18	15	15	7	磨石	Ⅰ区	1739	8.12	7.24	2.83	245	片面に擦痕
18	16	15	8	磨石	Ⅰ区	2372	8.45	7.61	3.49	350	片面に擦痕
18	11	15	9	磨石	Ⅱ区		5.32	4.33	3.89	130	両端に磨痕
18	12	15	10	磨石		89	12.82	10.01	3.78	800	両面に擦痕、一端に磨痕
18	9	15	11	敲石	Ⅱ区	1523	6.73	6.09	3.32	220	一端に磨痕、３か所に剥離痕

表６　家の後Ⅰ遺跡出土銭観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	地　区	名　称	寸法							重　量	初鋳年代
					a	b	c	d	e	f	厚さ		
	1		Ⅲ区 No.3247	皇宋通宝		(2.43)		1.94		0.85	0.13	1.63(*1)	1038年
	2		Ⅲ区 No.3316	元祐通宝	(2.35)	(2.32)	1.98	(1.99)	0.85	0.84	0.14	2.18	1094年
	3		Ⅱ区表土	寛永通宝	(2.28)	(2.26)	1.92	1.94	0.72	0.64	0.12	1.58	17末～18世紀

*1 小破片を含む

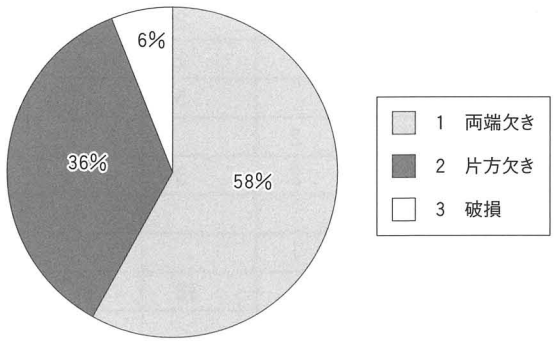
出土銭は３点が出土している。11世紀代初鋳の２点は腐食が著しく、出土時にも若干破損した。

表７　家の後Ⅰ遺跡出土石錘観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	台帳番号	種別	形態	調査区	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
			1	石錘	2	Ⅲ区	804	6.64	4.47	2.09	80	
			2	石錘	1	Ⅱ区	1522	6.42	4.67	2.07	100	
			3	石錘	1	Ⅰ区	1731	6.33	4.37	1.82	80	
			4	石錘	1	Ⅰ区	1716	5.58	4.38	1.69	64	
			5	石錘	1	Ⅱ区	1526	7.96	7.12	2.35	200	
			6	石錘	1	Ⅱ区	2938	7.34	3.75	1.20	54	
			7	石錘	1	Ⅲ区	2586	9.11	4.99	1.85	119	
			8	石錘	1	Ⅲ区	805	6.90	6.35	2.30	160	
			9	石錘	1	Ⅱ区	1525	8.14	7.93	1.55	134	
			10	石錘	1	Ⅰ区	2339	8.09	6.93	2.78	239	
			11	石錘	1	Ⅲ区	1767	6.75	3.79	2.37	73	
			12	石錘	1	Ⅱ区	1425	5.98	4.41	1.41	61	
			13	石錘	1	Ⅱ区	2873	7.51	4.98	2.10	102	
			14	石錘	3	Ⅱ区	3040	4.33	(3.89)	1.80	54	
			15	石錘	1	Ⅲ区	1675	5.85	4.50	1.25	59	
			16	石錘	1	Ⅰ区	2684	7.09	7.95	1.81	150	
18	2	15	17	石錘	1	Ⅲ区	2063	6.72	5.60	3.10	169	
			18	石錘	1	Ⅲ区	2587	8.91	5.14	1.55	130	
			19	石錘	1	Ⅱ区		6.56	5.38	1.97	100	
18	1	15	20	石錘	2	Ⅰ区		5.45	5.26	1.00	54	
			21	石錘	1	－		10.05	9.90	4.47	560	
			22	石錘	2	Ⅰ区	2680	5.44	4.99	2.51	70	
18	7	15	23	石錘	2	Ⅰ区	3097	5.28	3.96	1.80	54	
18	3	15	24	石錘	1	Ⅰ区	2683	7.93	9.53	4.52	365	
			25	石錘	2	Ⅰ区	2371	5.46	5.11	2.51	100	
			26	石錘	2	Ⅰ区	3762	5.28	5.45	1.65	70	
			27	石錘	2	Ⅲ区	2651	6.19	4.48	2.62	95	
			28	石錘	2	Ⅱ区	2717	13.57	9.62	5.64	980	
			29	石錘	2	Ⅱ区		6.33	6.21	2.95	175	
			30	石錘	2	－		4.65	5.76	1.84	65	
			31	石錘	2	－		4.20	5.95	1.97	80	
18	6	15	32	石錘	2	Ⅱ区		7.02	5.96	2.64	170	
			33	石錘	3	Ⅲ区	2653	6.12	(6.61)	1.94	125	
			34	石錘	1	Ⅰ区		7.80	6.38	2.35	180	
18	4	15	35	石錘	1	－		8.55	6.13	2.36	225	
18	5	15	36	石錘	2	－		8.65	6.31	2.85	235	
			37	石錘	3	－		6.81	4.72	1.35	45	

形態欄凡例
1　両端欠き
2　片方欠き
3　破損

グラフ１　家の後Ⅰ遺跡出土石錘形態別割合



グラフ２　家の後Ⅰ遺跡出土石錘重量別分布

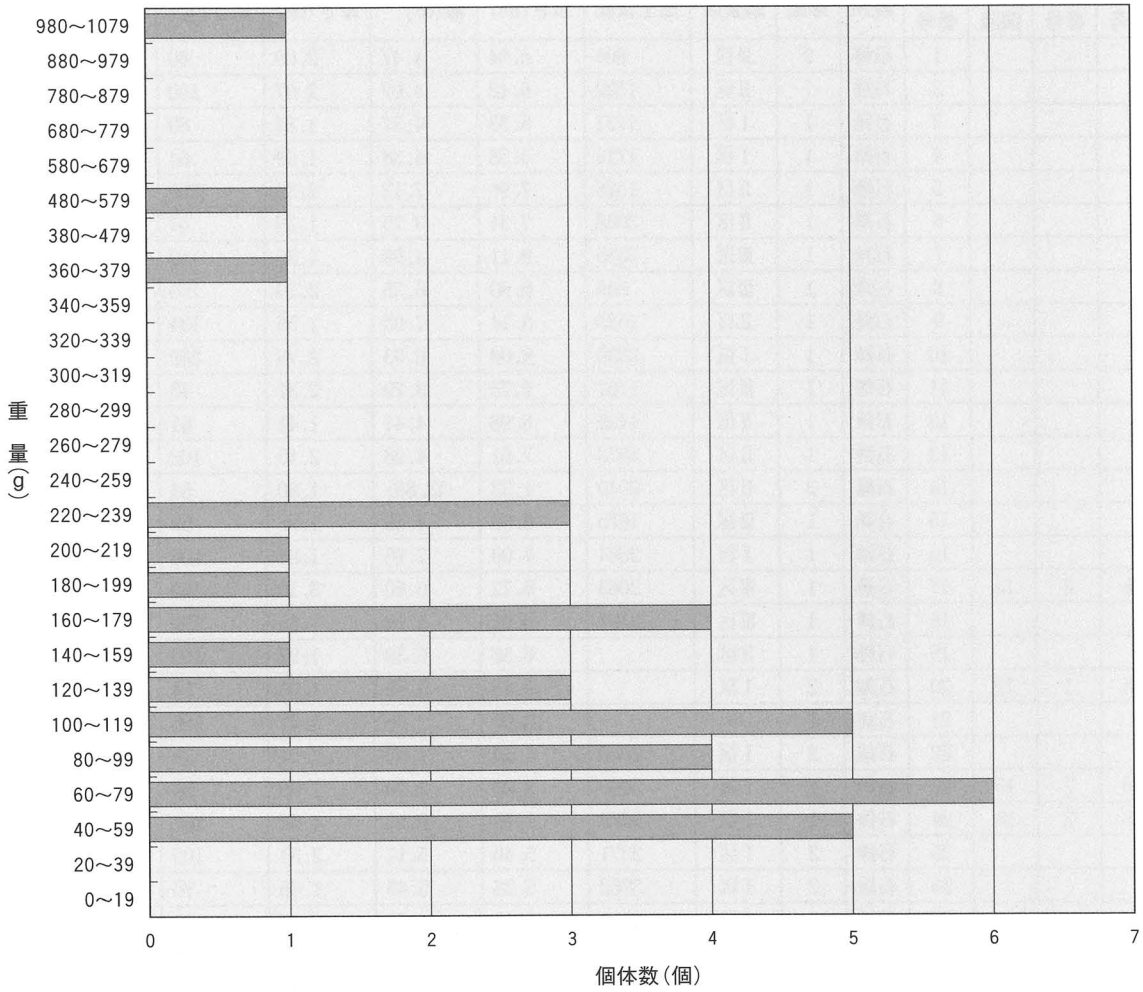


表８　家の後Ⅰ遺跡出土石鏃観察表

	時期	器種	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	表採	計
弥生土器・古式土師器	前期	甕		1	2		3
	中期	甕・壷	1		1		2
	中～後期	底		1			1
	後期	低脚坏			1		1
		甕			1		1
	後期末	甕	8	1	6		15
	古式土師器	小片	4		3		7
	不明	小片	4		6		10
土師器		甕類		1	2	3	6
	７世紀～	坏類	1		1		2
		底部糸切りの坏	2		5		7
須恵器		壷類	2	2			4
	７世紀～	坏類	3	2	3	1	9
		甕類	2			1	3
		不明		1			1
製塩土器			3	6	13		22
備前	近世	すり鉢	1	1			2
陶器	18世紀以降	在地系	1			1	2

家の後Ⅰ遺跡調査前風景（北東から）

調査風景

図版２

調査後空撮（南西から）

調査後空撮（北西から）

調査後近景（東から）

三瓶太平山降下火山灰検出状況

図版４

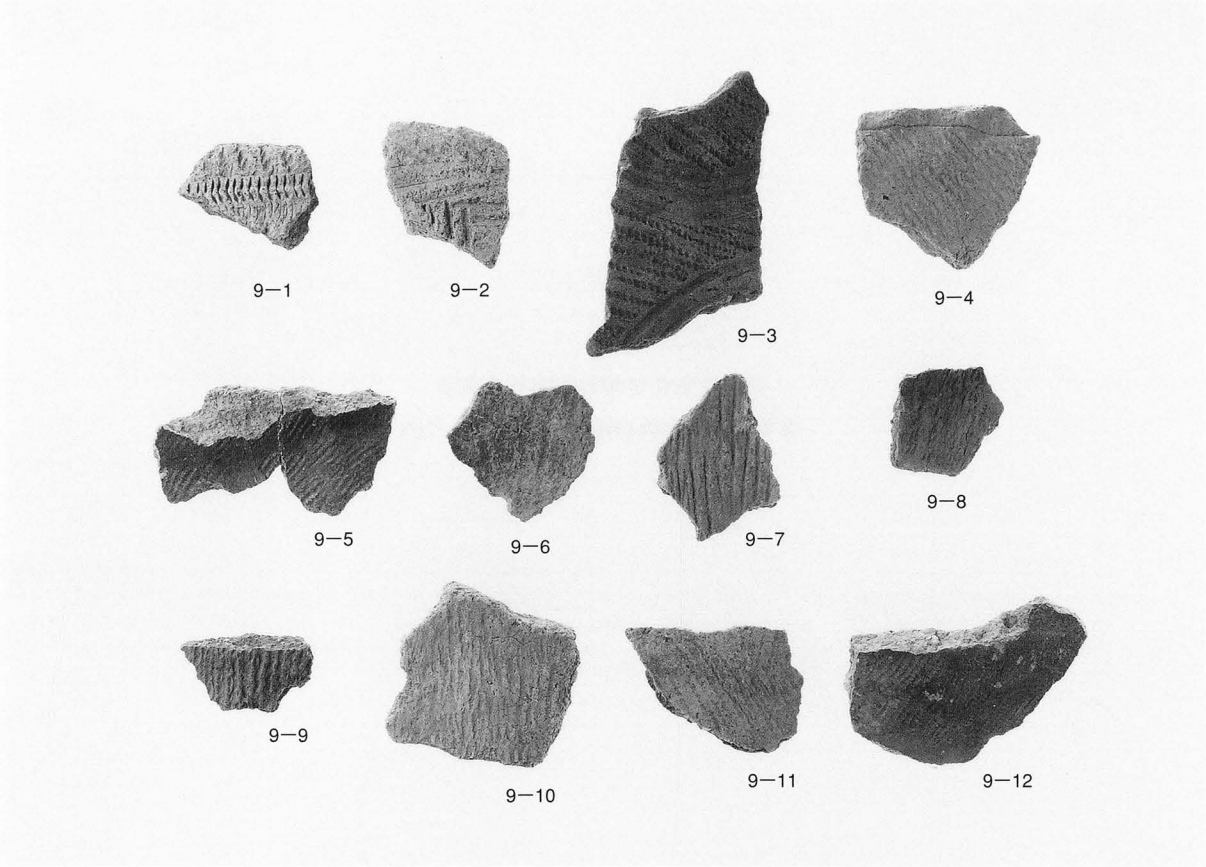
Ⅱ区セクション

縄文土器出土状況

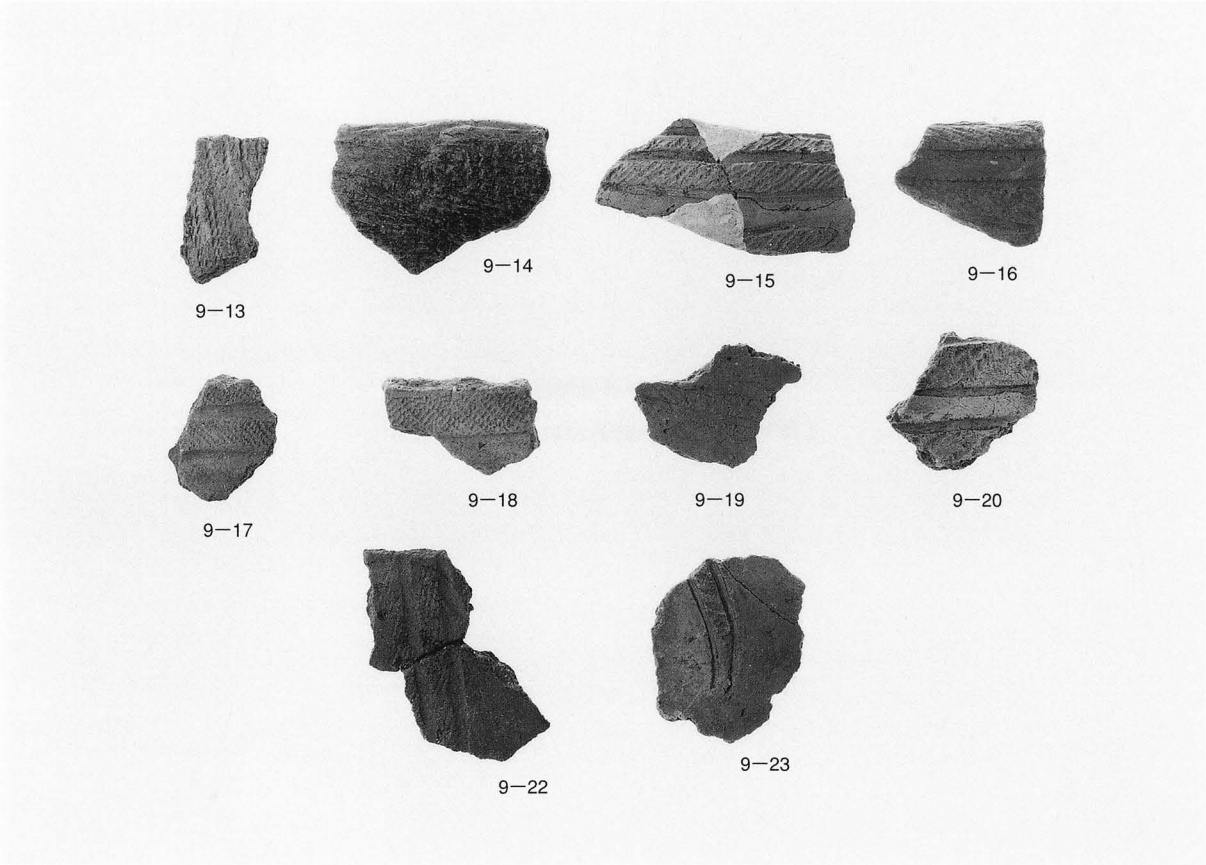
Ｃ層縄文土器出土状況（東から）

粗製深鉢出土状況

図版６

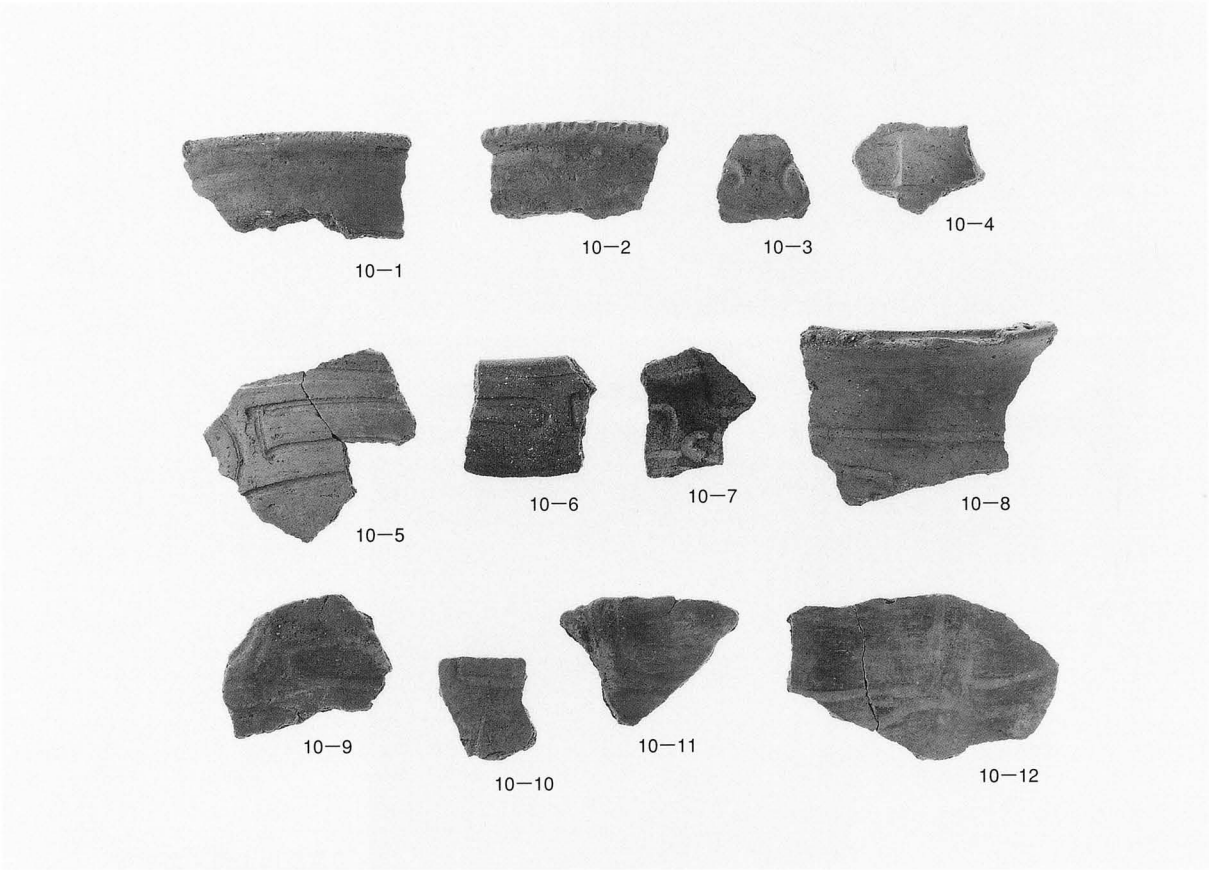


包含層出土縄文土器１



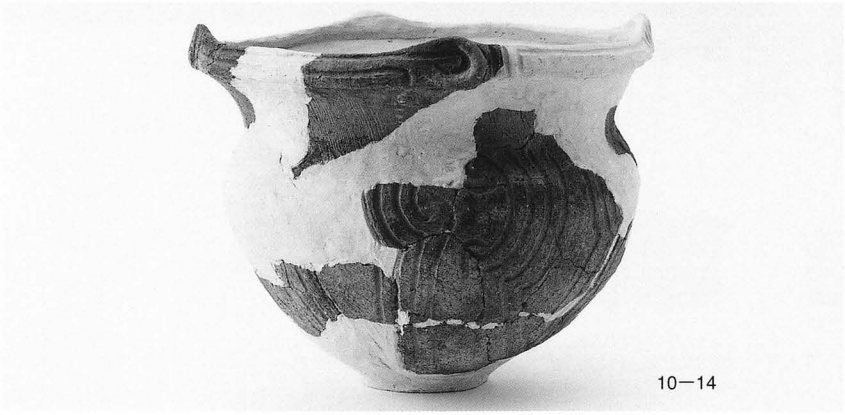
包含層出土縄文土器２

包含層出土縄文土器 3

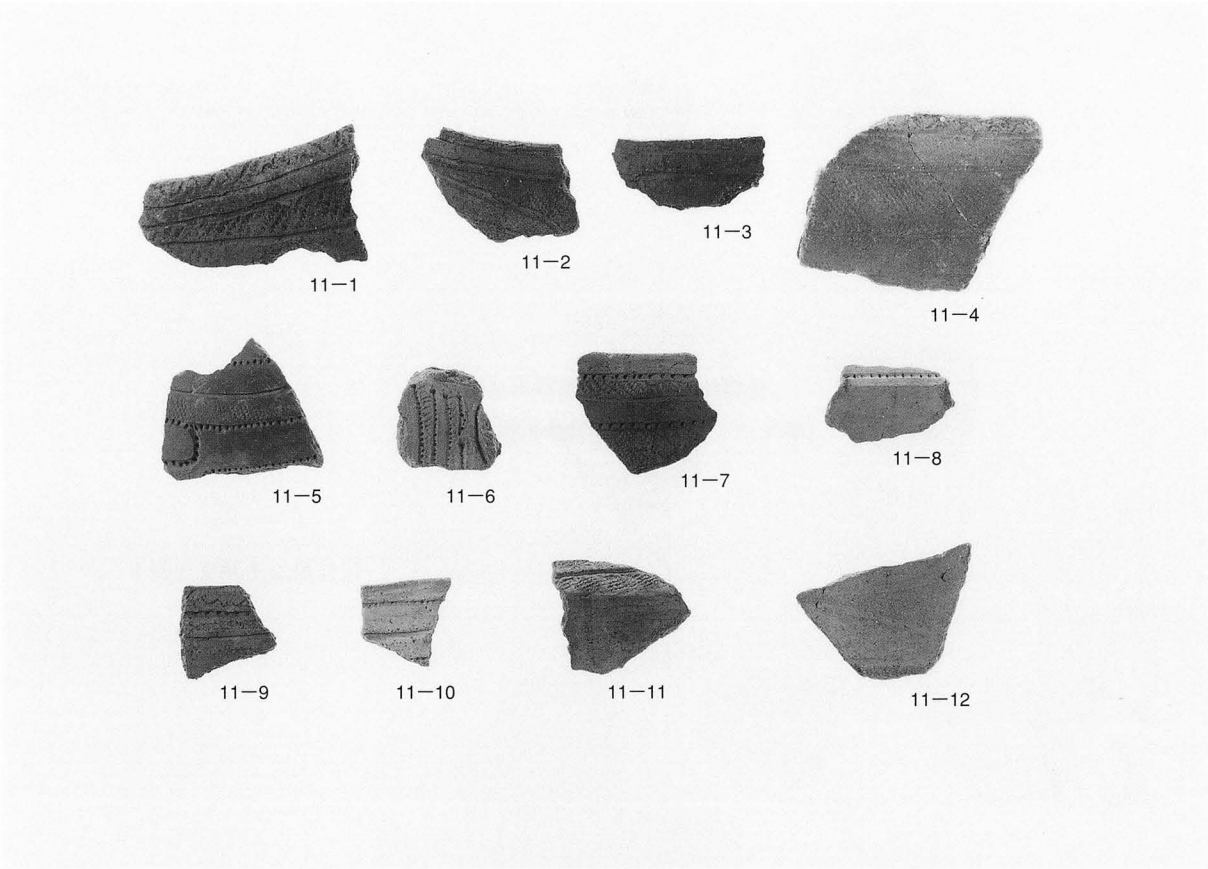


包含層出土縄文土器 4

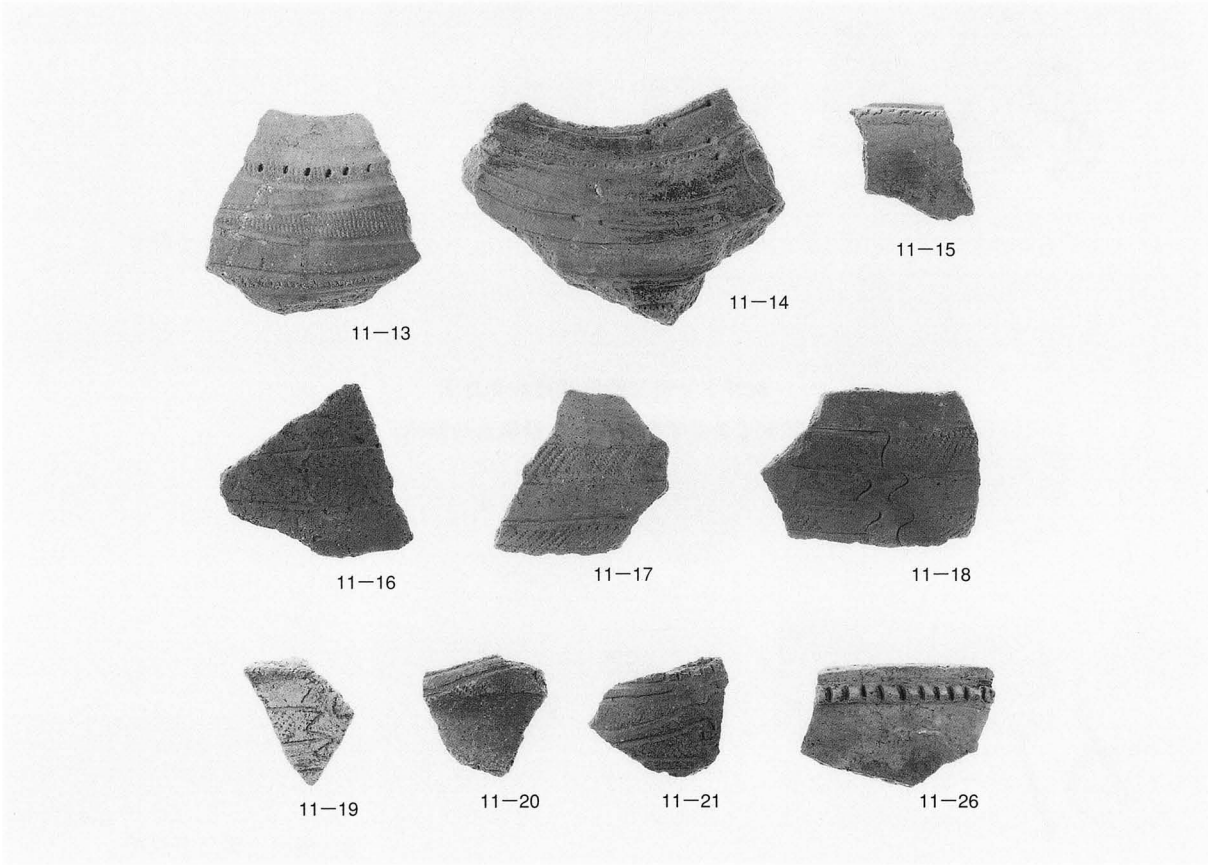
図版 8



包含層出土縄文土器 5

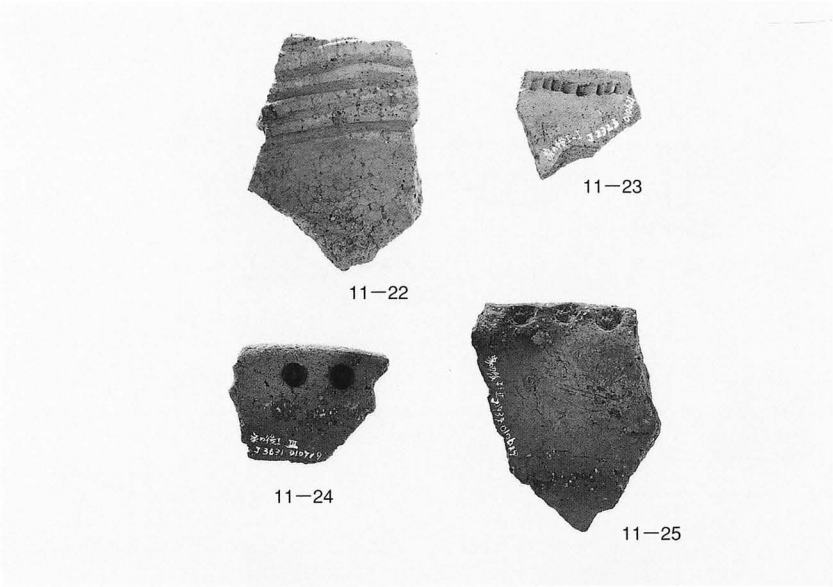


包含層出土縄文土器 6

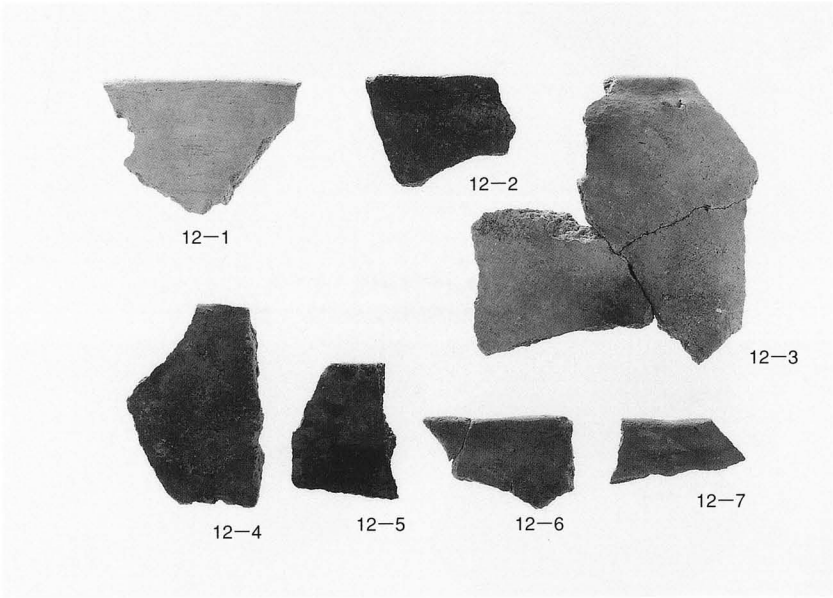


包含層出土縄文土器 7

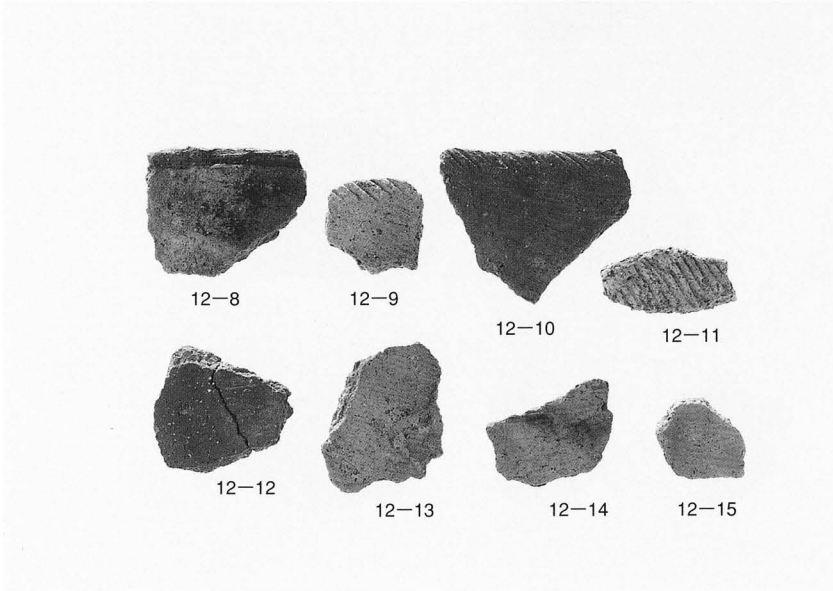
図版 10



包含層出土縄文土器 8

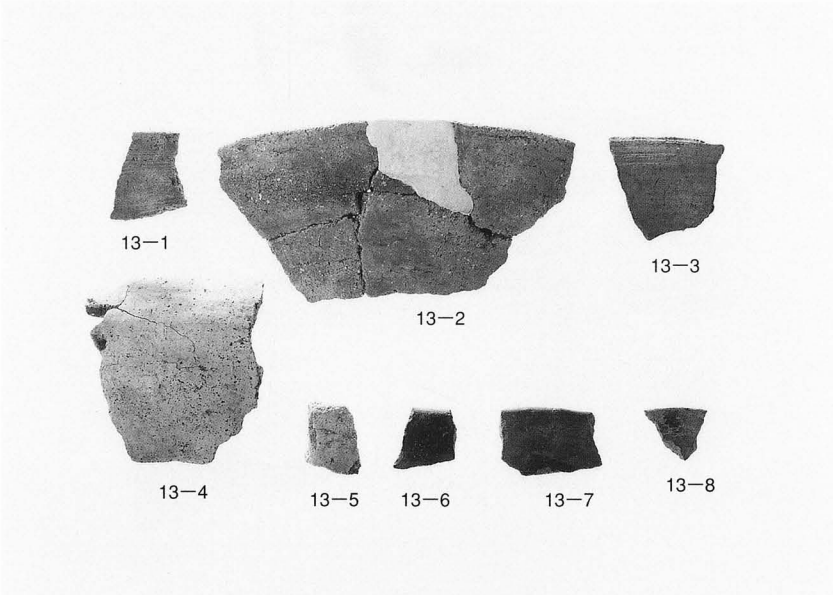


包含層出土縄文土器 9

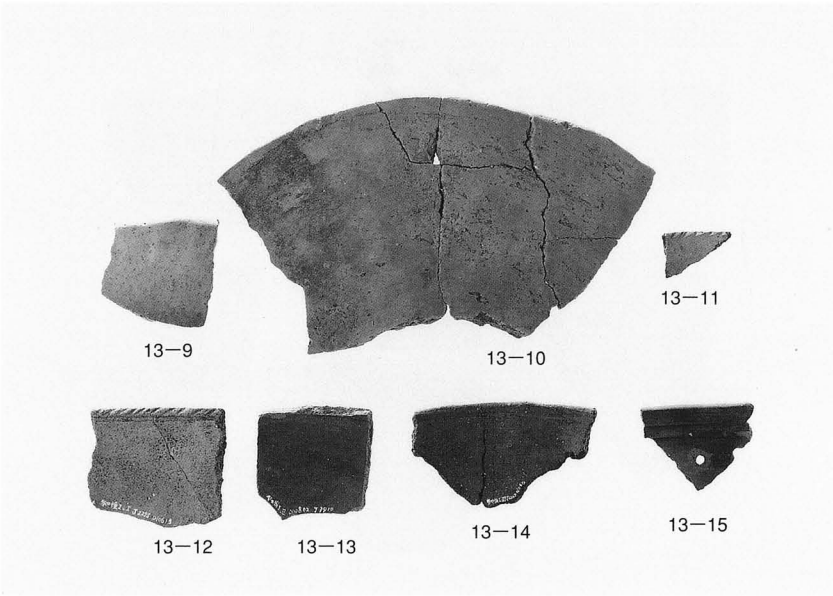


包含層出土縄文土器10

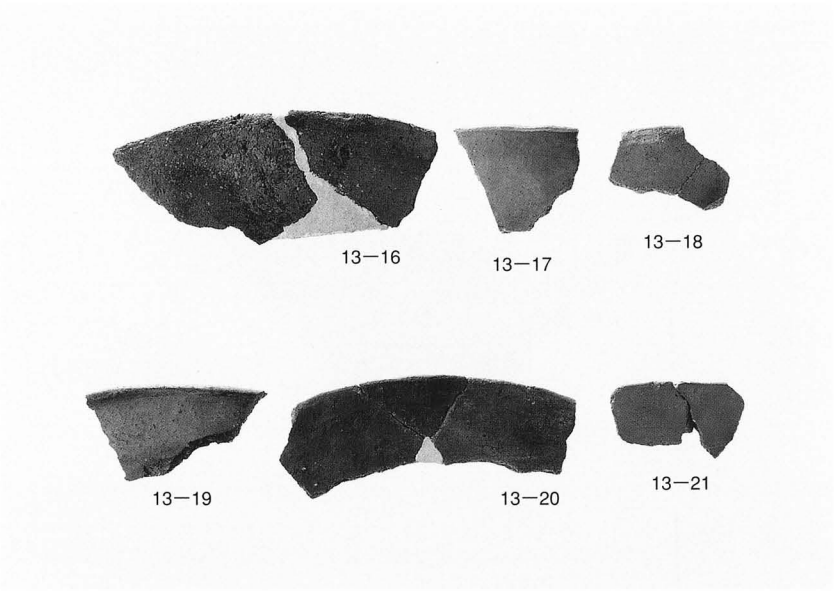
包含層出土縄文土器11



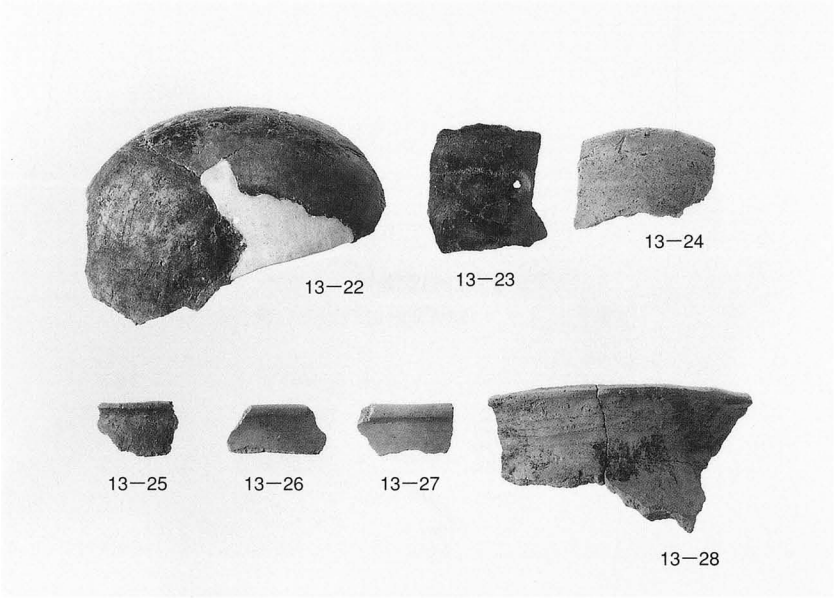
包含層出土縄文土器12



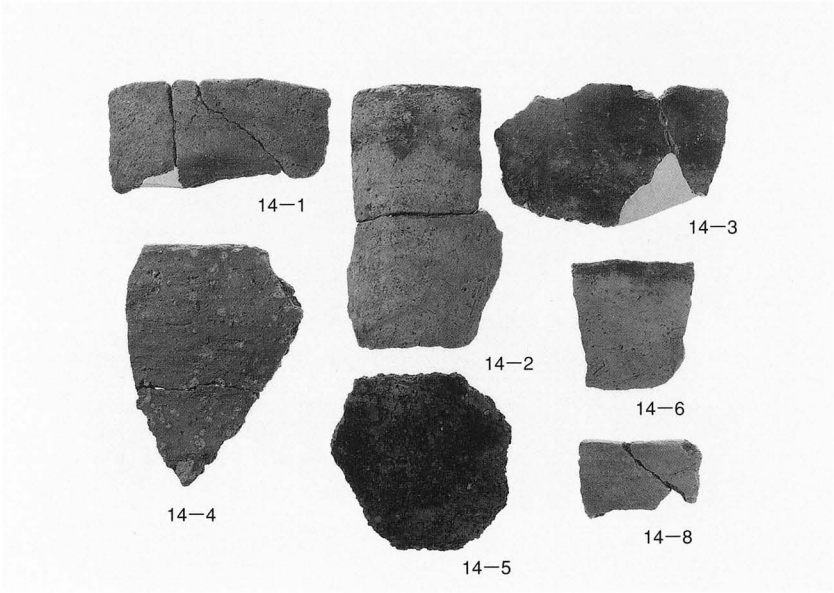
包含層出土縄文土器13



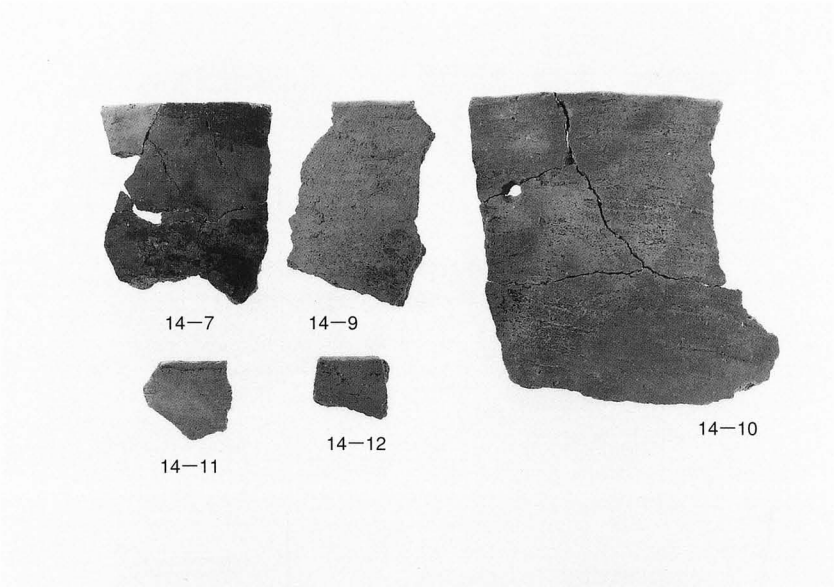
包含層出土縄文土器14



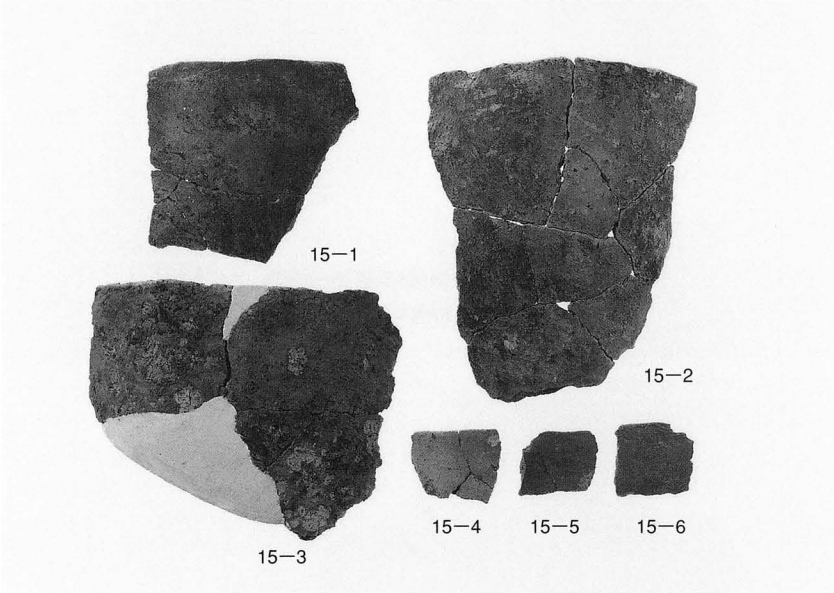
包含層出土縄文土器15



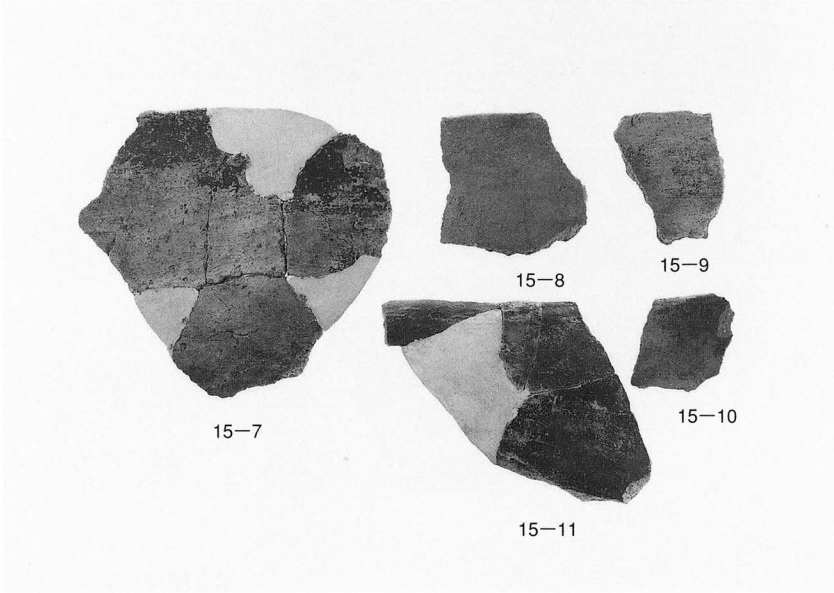
包含層出土縄文土器16



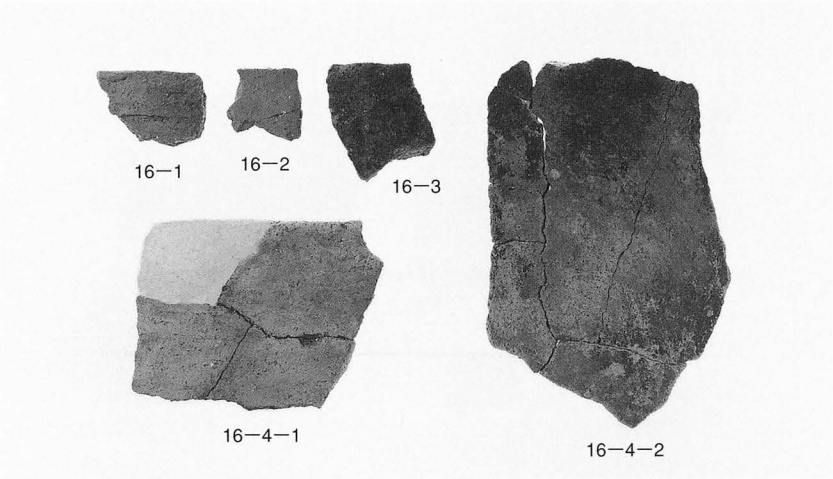
包含層出土縄文土器17

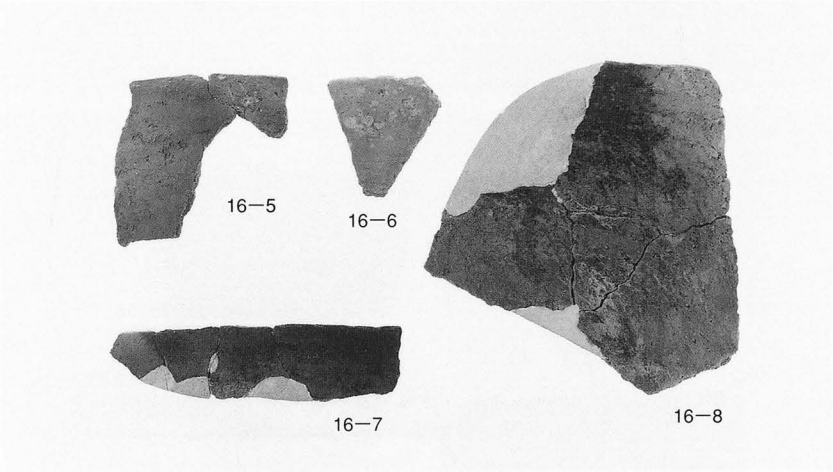


包含層出土縄文土器18

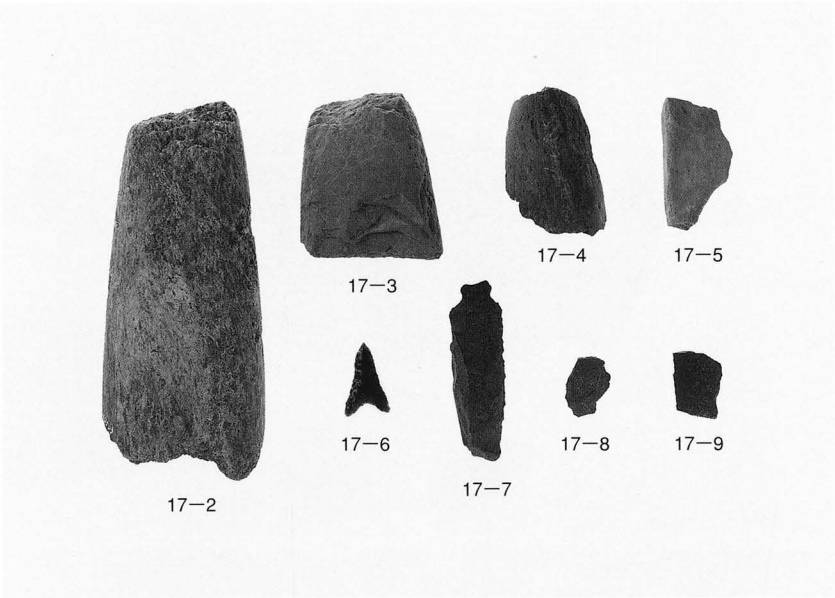


包含層出土縄文土器19

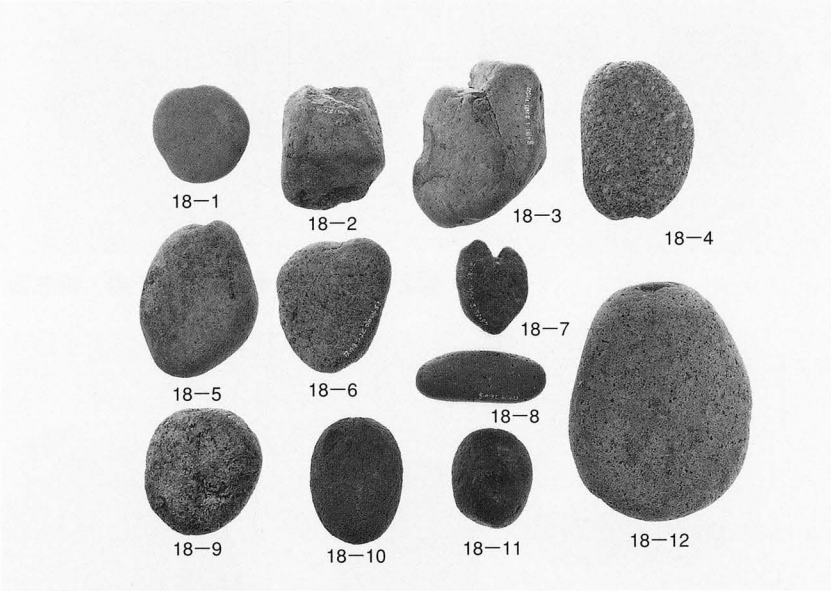




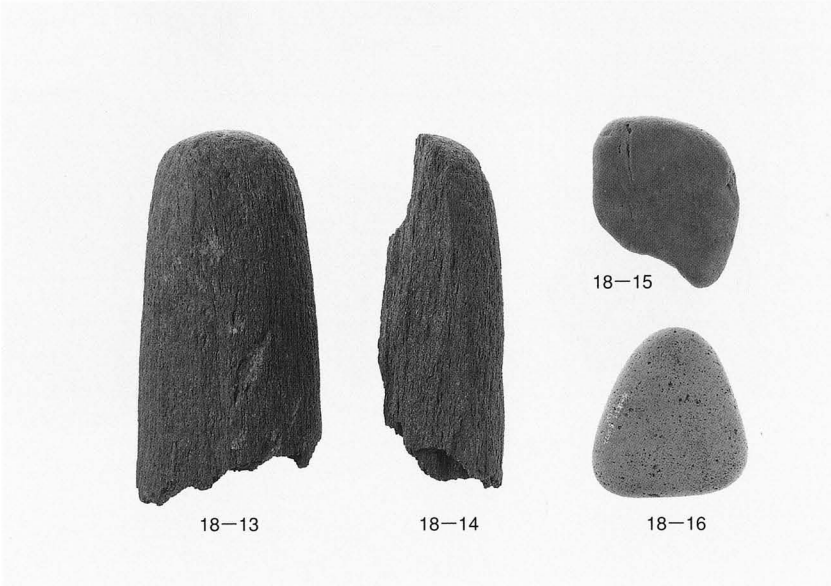
包含層出土縄文土器20



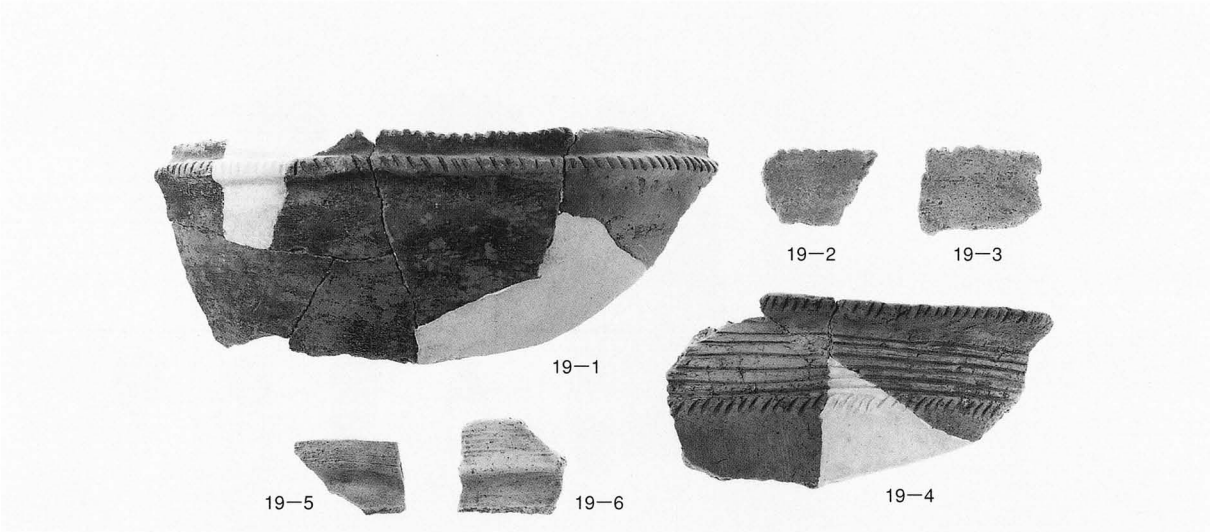
包含層出土石器 1

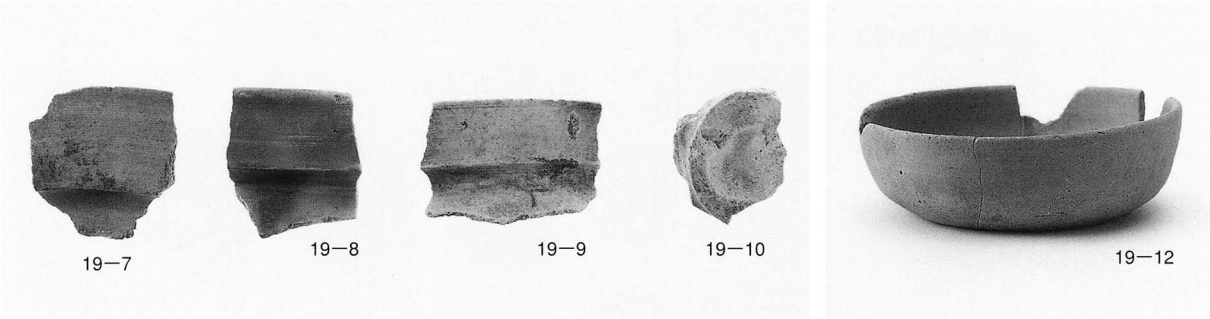


包含層出土石器 2

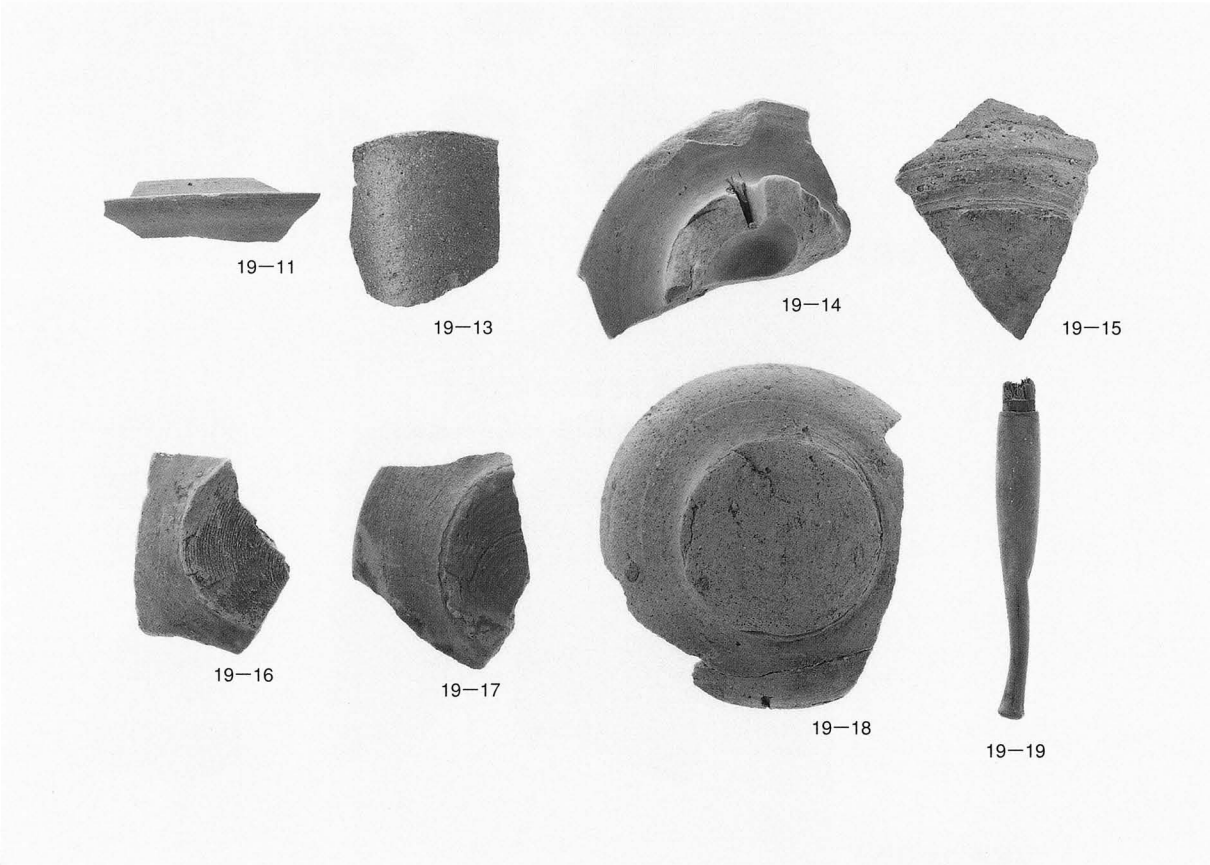


包含層出土石器 3





包含層出土縄文土器・弥生土器・須恵器



包含層出土須恵器・土師質土器・煙管

垣ノ内遺跡

第３章　垣ノ内遺跡

第１節　調査の経過と概要

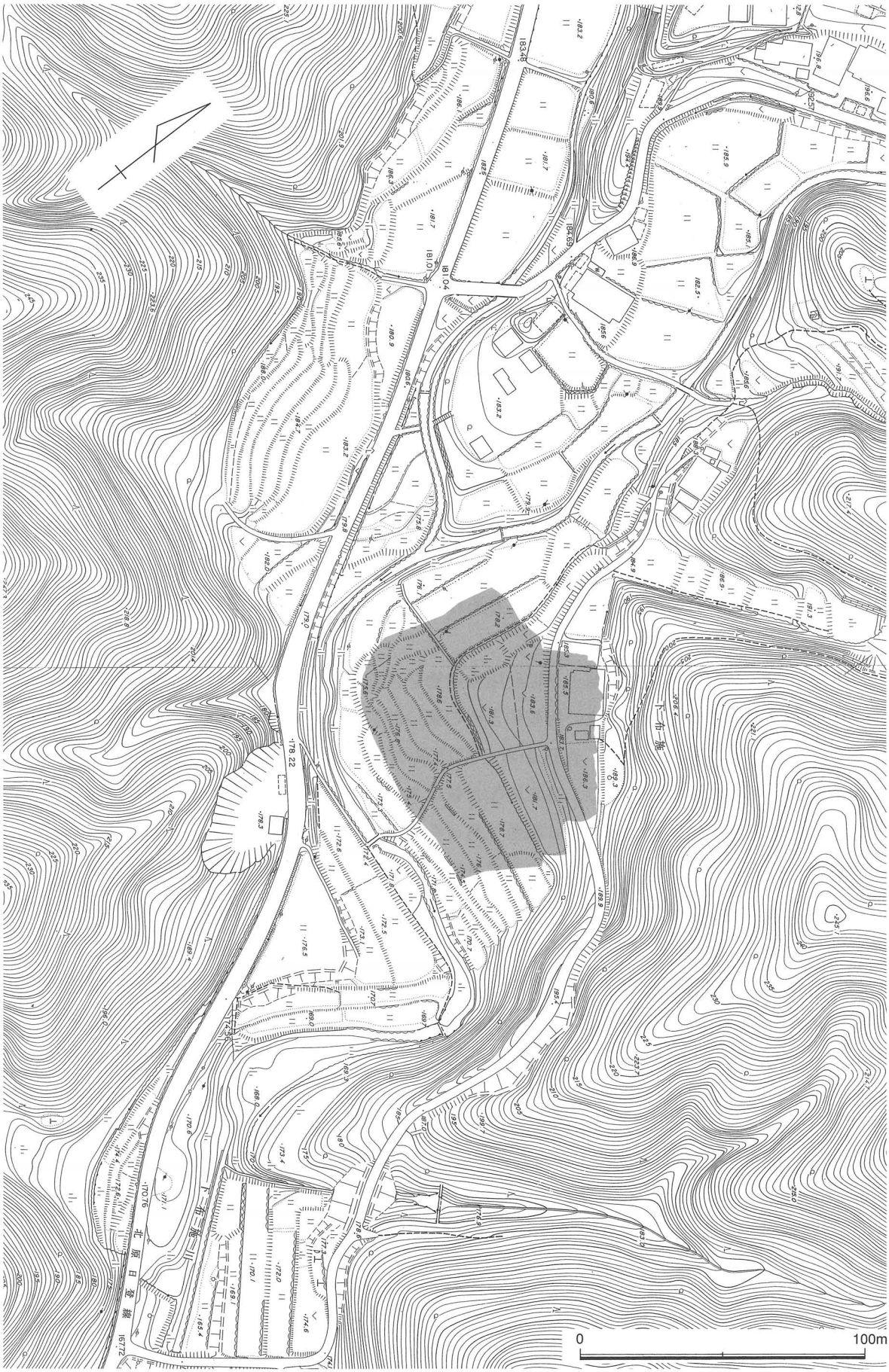
垣ノ内遺跡は島根県大原郡木次町大字北原字門に位置する遺跡である。斐伊川が北西から南西へと大きく流れを変える北原は、広大な河岸段丘を擁し、古くから集落が営まれてきた。この付近の集落は斐伊川左岸の河岸段丘に広がる北原地区、斐伊川右岸に位置する川平地区、斐伊川右岸に注ぐ支流沿いの山方地区、尾白地区、下布施地区、法印地区などに分かれている。支流の中で最も水量が豊富で谷の広い下布施地区は、斐伊川本流との合流点から上流数キロにわたって水田が広がっている。

垣ノ内遺跡は合流点から約500m溯った地点に位置し、下布施川がさらに支流と分岐する場所に形成された緩傾斜地である。調査時の土層観察では、背後の山から流れ込んできた土砂よりも下布施川によって運ばれてきた土砂が多く、扇状地に似た過程を経て形成されたようだ。それゆえ水はけが非常に良く、堆積土も非常に厚い。南向きの日当りの良い傾斜地で、調査前には５～６段の水田が広がり、山裾には納屋を備えた屋敷が建っていた。（図版17）また、背後の山には山道がのびており、愛宕神社（愛宕さん）が祀られていた[註1]。毎年７月23日夜には、多くの参拝者のもと神事が執り行われたそうである。ダム建設に伴って愛宕神社は移されたが、沢山の灯籠を吊り下げたという大木が山頂の平坦面に鎮座している[註2]。この場所は平成13年度に木次町教育委員会によってトレンチ調査され、弥生土器が数片出土している。

垣ノ内遺跡の発掘調査は、平成11年度の範囲確認調査を受けて、平成12年４月から開始した。まず水田の最上段から３段目までの表土掘削を行い、調査の進行に合わせて下段へと拡張した。調査に際し、調査区Ａ～Ｄ区を設定した。５月に入りSI01、07が検出されると、次々と竪穴住居が検出されはじめた。５月末にはSB04～SB05とSI03を検出した。６月中は雨の合間を縫って、AKDD、AYD１の土器溜りを検出、加工段２上の土器溜りが姿を現した。包含層の厚さはＡ区で１ｍを越え、重機掘削を併用しながら掘り下げた。７月からは順次調査区を拡張し、８月４日には第１回の調査指導会を行った。

８月、９月は各遺構を精査しつつ、拡張部分の掘り下げに費やされた。遺構の出土状況から調査区のさらに山側の平端部（屋敷跡地）にも遺跡が広がる可能性が高まったため、重機併用で全長８ｍのトレンチを設定した。その結果、後世の攪乱が多いものの、包含層の大部分が残存していることが明らかになった。遺構面があることも確実となったため、関係機関と協議を行い、翌年の調査が決まった。10月に入って硬化面１、２を検出し、29日には現地説明会を開催した。当日は雨模様の天気であったが、開催時にはどうにか雨も止み、多くの方々にご参加いただいた。11月中は各遺構の精査と、縄文包含層の掘り下げ、調査区畦の撤去にあてた。第２回の調査指導会を11月22日に実施、12月８日には空撮を行った。天候もすっかり冬型となり、厚さ10cmにもなる霜柱が立ち、雪のちらつく中で遺構図を作成した。この年の調査は12月15日に終了した。

平成13年度の調査は、家の後Ｉ遺跡の調査が終盤に近づいた８月から準備に入った。攪乱土が多かったため、表土掘削に合わせてこれを取り除いたが、結果として径５ｍ深さ２ｍ前後の大穴が６か所開いた。地山層まで抜けており、この部分には包含層・遺構面ともに残っていなかった。本格



第21図　垣ノ内遺跡位置図（S＝1/2,000）

的な調査は９月からとなり、東からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区の３調査区を設定した。調査区内は大部分が傾斜地で、加工段１やSB10など若干の遺構が確認されたものの、調査の多くは土器溜りの精査にあてられた。10月下旬、焼失住居であるSI13を検出し、炭化材がある程度残っていることが明らかとなった。11月14日には調査指導会を行い、焼失住居の炭化材を可能な限り持ち帰ることとなったため、発泡ウレタンを用いて梱包の上で取り上げた。また11月23日には現地説明会を行い、75名の参加者があった。12月５日には家の後Ⅰ遺跡を含めて、調査指導会を行った。12月17日には調査後の空撮を行い、全日程を終了した。

第２節　垣ノ内遺跡の基本層位（第23図）

垣ノ内遺跡の土壌は、前記のように扇状地の原理で堆積した土砂と、背後の山から流れ込んだ土砂が非常に厚く堆積している。層位は大きく８層に分けられるので、それぞれについて説明したい。

第１層は圃場整備による客土層で、耕作土とその基盤層からなる。大小の角礫や川原石を含み、水捌けの非常によい土層である。最下部に２～５㎝の厚さでマンガン質が沈着するため、以下の層と明確に区別することができる。近代、現代の陶磁器が出土したが、これが客土に元々含まれたものか、客土後の遺物かは判然としない。客土中には若干の鉄滓も混じるが、出自は不明である。

第２層は中世以降の遺物を含む砂質土で、近世の遺物をかなり多く含んでいる。圃場整備以前の土で、カンナ流しの結果堆積したと考えられる礫層や、比較的有機質に富んだ粘土層など多様な性格の層を一括している。

第３層は主として古墳時代後期～９世紀頃の遺物を含む包含層で、加工段上を中心に多数の遺物が出土した。褐色もしくは暗褐色の比較的きめの荒い砂質土で、水分浸透が早く、乾燥も早い。

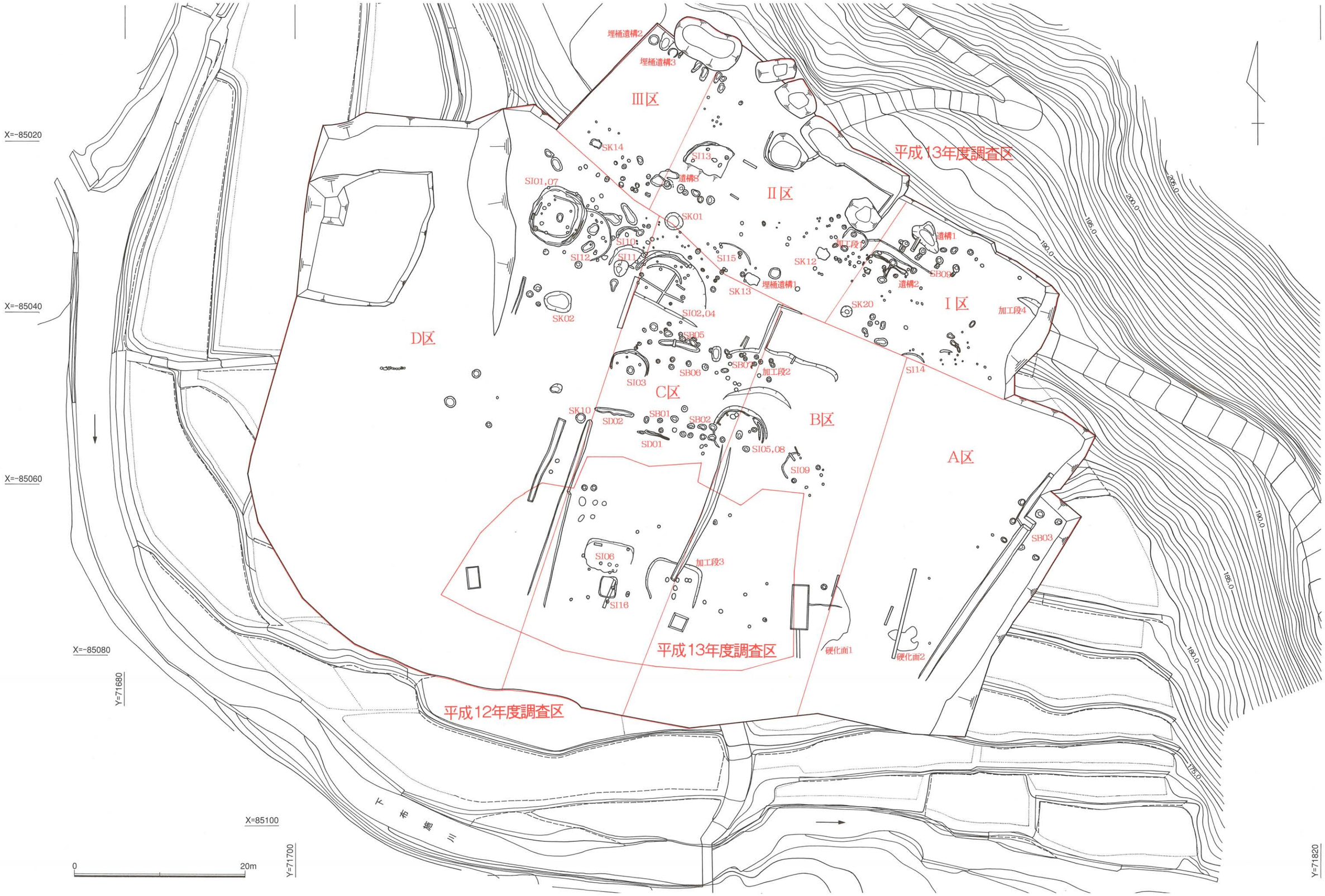
第４層は黒色系の砂質土層で、Ａ区からＣ区にかけて局所的に堆積する。弥生時代中期～古墳時代後期の土器が混在する土層で、遺物の包含量は各層位で最も多い。この層はさらに細分できるが、それぞれを面的に検出することは困難であった。

第５層は弥生時代中期後半から後期の遺構を覆う覆土で、色調が黄褐色系の砂質土である。大部分が中期の土器で占められ、層の上部で弥生時代後期以降の土器が混じる。４層との境界は明確でない場所が多く、漸移部分では両者の遺物が見られる。

第６層は黄色系砂質土からなる地山土で遺物は全く含まれない。調査区の山側では確認できるが、加工段２よりも川側では残っていない。花崗岩由来の石英、雲母などを含む目の荒い砂で構成されている。

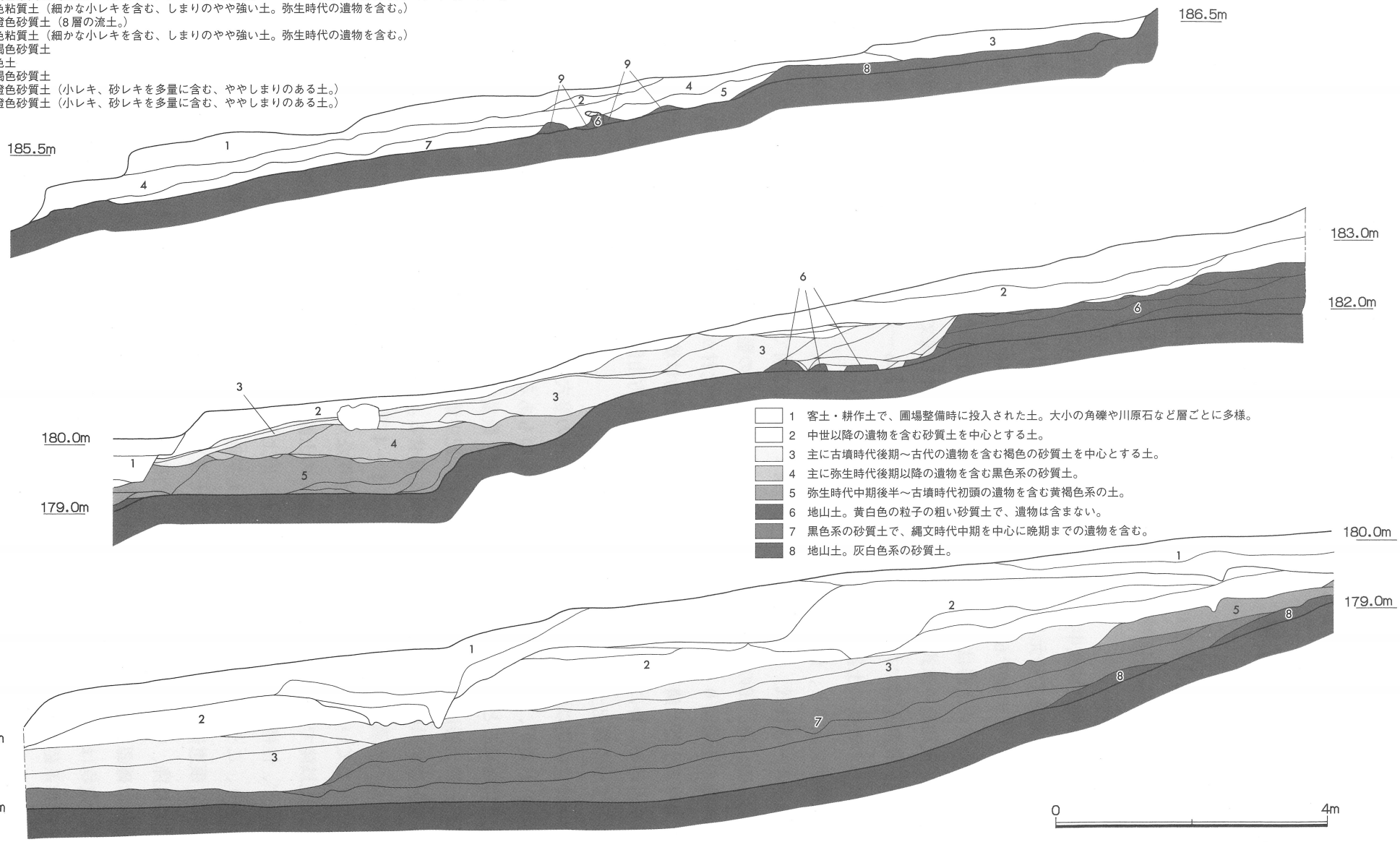
第７層は、黒色および黒褐色の砂質土からなる土層で、縄文時代中期を中心とする包含層である。標高約179m以下の川側に堆積しており、後期から晩期の遺物も混じる。上面は弥生時代、古墳時代の遺構面である。

第８層は地山土である。花崗岩に由来する石英や雲母の荒い砂粒からなる灰白色の層と、粒子が微細でやや粘性としまりのある黄褐色の土層の２種からなる。背後の山に花崗岩の露頭が見られることから、灰白色層はこれに由来すると考えられる。調査後に重機を用いて裁ち割ったところ、これらは厚さ10～20㎝で重なり合いながら深さ約３ｍまで堆積していた。それぞれの境界は必ずしも明確でなく、場所により漸移層が20㎝に達する部分もある。褐色がかった層が２層あり、さらに古い時期の包含層がある可能性は否定できないが、裁ち割り内では遺物を確認できなかった。この層



第22図　垣ノ内遺跡遺構配置図、調査区分図（S=1/400）

1　暗茶褐色砂質土（5mm～1cm大のクサレレキ、橙黄色のブロックを含む。古墳時代以降の遺物を含む。）
2　黒褐色粘質土（細かな小レキを含む、しまりのやや強い土。弥生時代の遺物を含む。）
3　暗白橙色砂質土（8層の流土。）
4　黒褐色粘質土（細かな小レキを含む、しまりのやや強い土。弥生時代の遺物を含む。）
5　暗黒褐色砂質土
6　黒褐色土
7　淡黒褐色砂質土
8　暗白橙色砂質土（小レキ、砂レキを多量に含む、ややしまりのある土。）
9　暗白橙色砂質土（小レキ、砂レキを多量に含む、ややしまりのある土。）



1　客土・耕作土で、圃場整備時に投入された土。大小の角礫や川原石など層ごとに多様。
2　中世以降の遺物を含む砂質土を中心とする土。
3　主に古墳時代後期～古代の遺物を含む褐色の砂質土を中心とする土。
4　主に弥生時代後期以降の遺物を含む黒色系の砂質土。
5　弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺物を含む黄褐色系の土。
6　地山土。黄白色の粒子の粗い砂質土で、遺物は含まない。
7　黒色系の砂質土で、縄文時代中期を中心に晩期までの遺物を含む。
8　地山土。灰白色系の砂質土。

第23図　垣ノ内遺跡土層図（S＝1/80）

まで掘削すると深さ５ｍを超えてしまうという物理的な問題もあって、全面調査は断念した。

第３節　調査の結果

（１）概要

垣ノ内遺跡の調査は２年にわたって行われたが、縄文時代中期から近現代に至るまで様々な遺構、遺物が出土した。この場所が、断続的とはいえ4,000年も生活の舞台となってきたことが明らかになったのである。

垣ノ内遺跡は縄文時代中期前半まで遡る。縄文時代を通して出土遺構は皆無であったが、下布施川に近い斜面南側で船元２式から突帯文までの土器が出土した。これらのうち中期の土器は約3,300点、コンテナ数で６箱強出土しており、この遺跡の中心となる時期のひとつである。後期から晩期にかけての土器は、時期が明確でない粗製土器を除けば、中期に比べかなり少ない。有文の土器では、後期の中津式から縁帯文土器にかけての磨消し縄文や充填縄文を持つ一群と、晩期前半の篠原式、孔列土器に代表される谷尻式などに当てはまる一群、突帯文土器の三群に大別されるが、これらの時期の土器はそれぞれ10点ほどにすぎない。

弥生時代に入ると、遺構・遺物とも全く出土しなくなる。弥生時代の中心となるのは中期後半新相（松本Ⅳ－２様式）で、前期から中期中葉までが空白期である。中期後半には、少なくともSI05、08、09、13、16の５棟（うちSI05、08は建て替え）の竪穴住居・竪穴建物が建てられており、この時期の土器溜りも数か所で確認した。SI13では炭化材が折り重なるようにして検出されたほか、塩町式土器と鋳造鉄斧が出土した。この時期の遺物は焼成の良い土器が多く、総出土遺物数の半数を占める。特に広島県三次盆地を中心に、中国地方山間部で出土例が増えつつある塩町式土器がまとまった数出土したことが注目される。

弥生時代中期以降、古墳時代初めまでに計15棟の竪穴住居（建て替え分も含む）と１棟の竪穴建物が作られるが、時期が明確にできなかったものもある。後期から古墳時代初頭の遺物は、包含層出土遺物を見るとほぼ継続して出土しているが、数量は時期を追う毎に減少し、古墳時代初頭（草田７期）の土器は数点である。これ以後、６世紀中葉までの遺物・遺構は皆無である。

６世紀後半以降、垣ノ内遺跡は三度活気を見せる。まず硬化面にともなって蓋坏、土師器甕、紡錘車を並べる遺構が検出されている。出雲３～４期の須恵器を伴うこれらの遺構は、硬化面こそしっかりしているものの、上屋の有無など不明な点が多く、性格は明らかでない。

７世紀以降では、加工段にともなって多くの土器が出土しているが、それ以外の遺構は不整形の土坑など、性格の判然としないものが多い。出土した土器には、土師器甕、甑、土製支脚、移動式竈があり、こうしたセット関係が少なくとも７世紀初頭には成立していたと考えられる。８世紀以降では、須恵器坏・丹塗り土器を中心にまとまった遺物が出土している。

これ以降、中世から近世の遺物は青磁、白磁、短刀などが少数確認されるのみである。この時期の建物は確認されておらず、垣ノ内の集落は９世紀代には終焉を迎えたようである。

出土遺物は陶磁器を中心に18世紀頃から増加をはじめる。特に布志名焼、石見焼などの在地系陶器や肥前系磁器の雑器類が増加する。前後して、この地に屋敷が建てられた考えられ、近年に至るまでの様々な遺物が出土した。また近世末から明治時代に使われたと考えられる屋敷の付属施設も検出している。

第24図　垣ノ内遺跡調査後測量図（S＝1/400）

（２）出土遺構

A. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は竪穴住居・竪穴建物と掘立柱建物がある。各遺構の形態と計測値は表９にまとめた。内訳は、中期後半から後期末にかけての竪穴住居が15棟、中期後半の竪穴建物が１棟、掘立柱建物が６棟以上である。

SI01・07（第25・26図、図版19・20）

耕作土直下で検出した竪穴住居である。大型のSI01と、その床面下に検出したSI07がある。SI01は径約６ｍのほぼ円形の竪穴住居で、５本の柱穴と中央穴を持つ。北東および南東側の竪穴壁面にテラス状の段が付くのが特徴である。壁体溝は明確でなく、途切れながら周囲を廻っている。SI07は隅丸方形の４本柱で、西側の一部を除き壁体溝が廻る。中心よりやや東側に位置する中央穴は全面に礫を敷き詰めており、底部では地山に含まれる礫を利用し、壁面は円礫を詰めている。

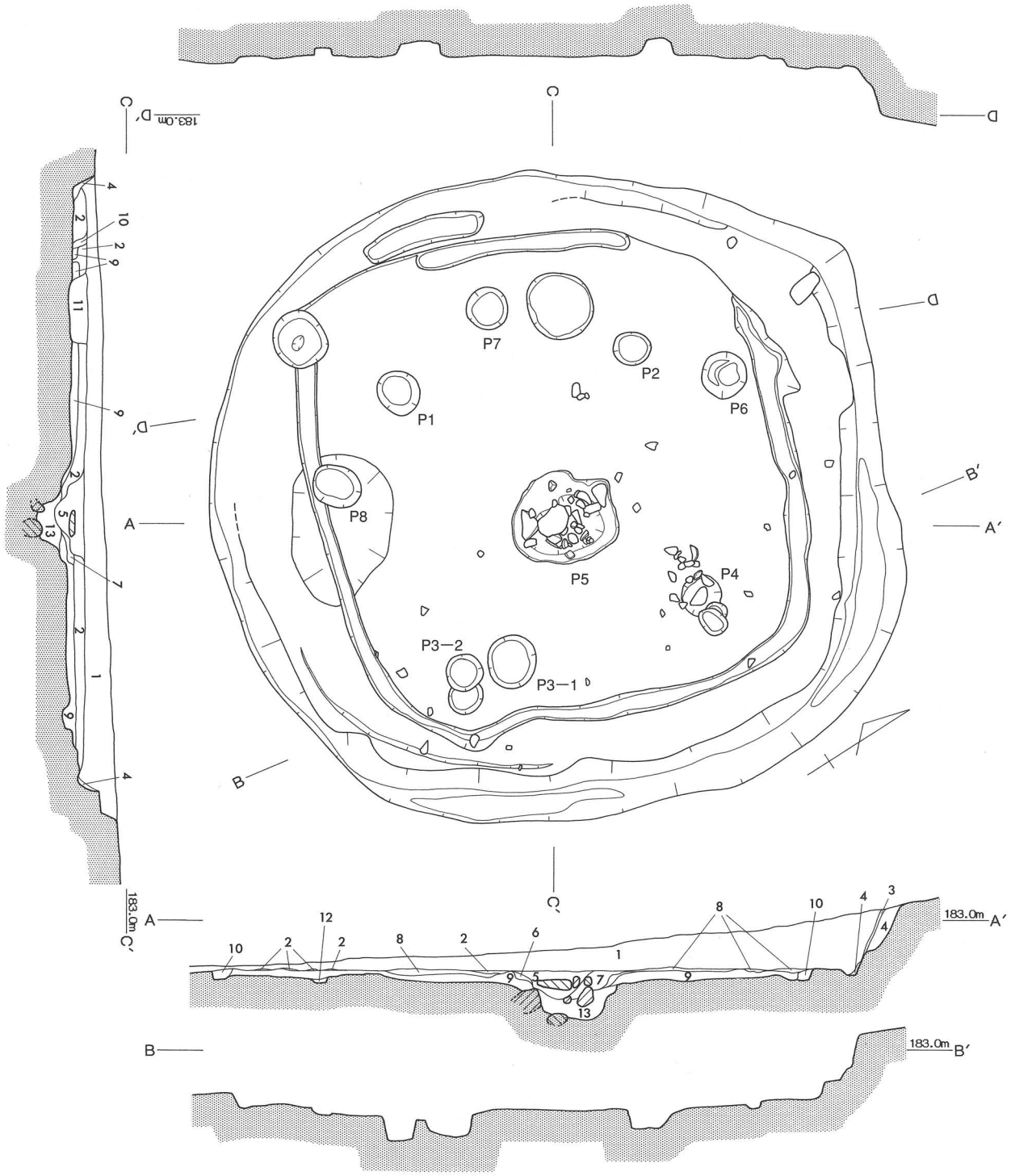
SI01はSI07の床面を嵩上げし、全体に外側へ広げることにより構築されている。SI01の床面は10～15cm嵩上げされており、暗褐色土（９層）を挟んで、貼り床土を敷く。貼り床はSI07の壁体溝までで止まっており、拡張部は地山削り出しのままである。中央穴は完全に掘り上げてはいないものの共用しており、位置自体もやや南西側にシフトしている。柱穴はＰ３－１、Ｐ４、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８がSI01、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３－２、Ｐ４がSI07に付随するものである。

出土遺物は第26図に掲載している。１、２は後期前葉（松本Ｖ－１様式　以下「Ｖ－１」のように略して記す）の壷・甕で、１では内部のケズリが頸部まで上がらないものである。これらはSI01の床面下の９層から出土したSI07に伴う遺物である。直上にSI01が作られたため、SI07に伴う土器は少なく、図化できるのはこの２点である。

３～16はSI01に伴う土器である。３が古手であるが、４～７の甕は口縁端部に外向きにアクセントが付くもので草田５～６期頃のものだろう。８は口縁に段を付けて外反させる高坏である。段付近の外面に刷毛が残るが、内外面には丁寧なミガキが入る。この個体は北側のサブトレンチ畦から一括して出土したが、脚部は全く出土しなかった。口縁端部と内面の段に沿って煤が付着しており、蓋として転用された可能性がある。９は外面に着色する高坏で、幅0.8～1.2cmのラインを放射状に描き込んでいる。ラインが交差するなど着色は必ずしも丁寧でないが、内面にはみ出すものはない。またラインは欠損する脚部までのびていたようである。退色しているため本来の色は分からない。草田６期に位置づけられるだろう。10～13は稜が張る高坏である。11、12は接合しないが同一個体であろう。15は外面に赤色顔料を塗布する器台で、同心円状のスタンプ文が入る。17は中央穴内出土の黒曜石製石鏃である。

SI07の時期は後期前葉である。またSI01は遺物にかなり幅があるが後期末である。遺物を見る限り、SI07とSI01の間には空白期を考えざるを得ず、単なる建て替えではない。SI01の貼り床土を見ると直下に薄く暗褐色土（９層）を咬んでおり、これがSI07の覆土の残部であろう。またSI07の柱穴や壁体溝には覆土を掘り上げた形跡が認められなかった。つまりSI07の竪穴部分だけを掘り上げ、新たに貼り床土を施し、地山を削り込んで外側に拡張したと考えられる。

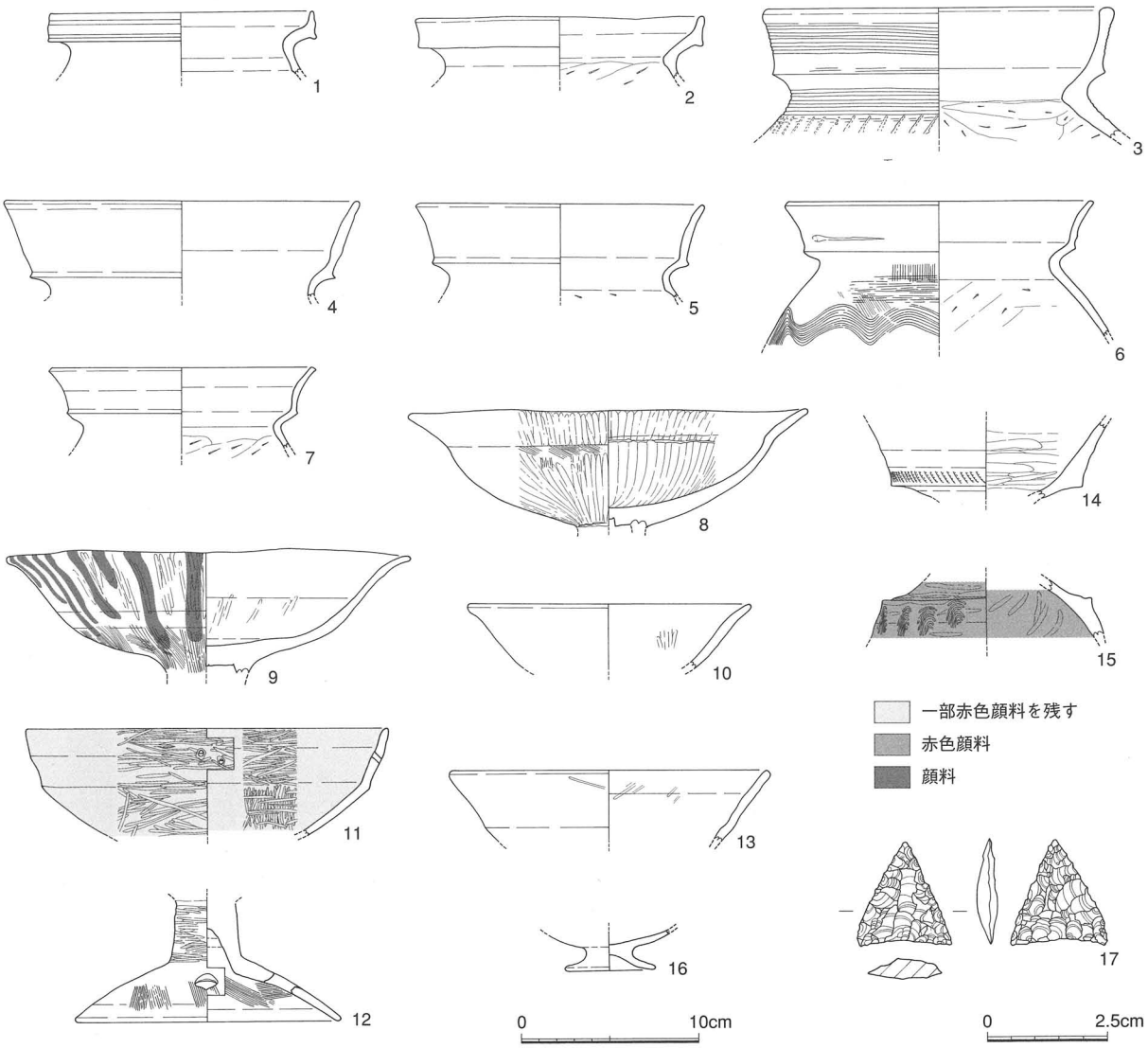
また隣接するSI12はSI01に切られており、SI07とSI01の空白期に構築された可能性があるが、調査では判断できなかった。



1 黒色土（5mm大の砂粒を含む）流土
2 明黄褐色土（5mm～1cm大の砂粒を含む）貼り床
3 黄色土まじり明褐色土　初期流土
4 黄色土まじり暗褐色土
5 暗黄褐色土（粘質大、少量炭粒）
6 暗黄色土（粘質大、2を含む混合）
7 淡暗黄色土（粘質大、2を含む混合）
8 淡黄色土（1～5mm大の砂粒を含む）貼り床
9 暗褐色土（粘質ややあり、少量の砂粒を含む）
10 暗黒色土（粘質大、細粒子）
11 暗黒色土（粘質ややあり、多数の粒子を含む）
12 黒褐色土（含有物少ない、木炭を含む）
13 淡黒褐色土

0　3m

第25図　垣ノ内遺跡 SI01・07実測図（S=1/60）



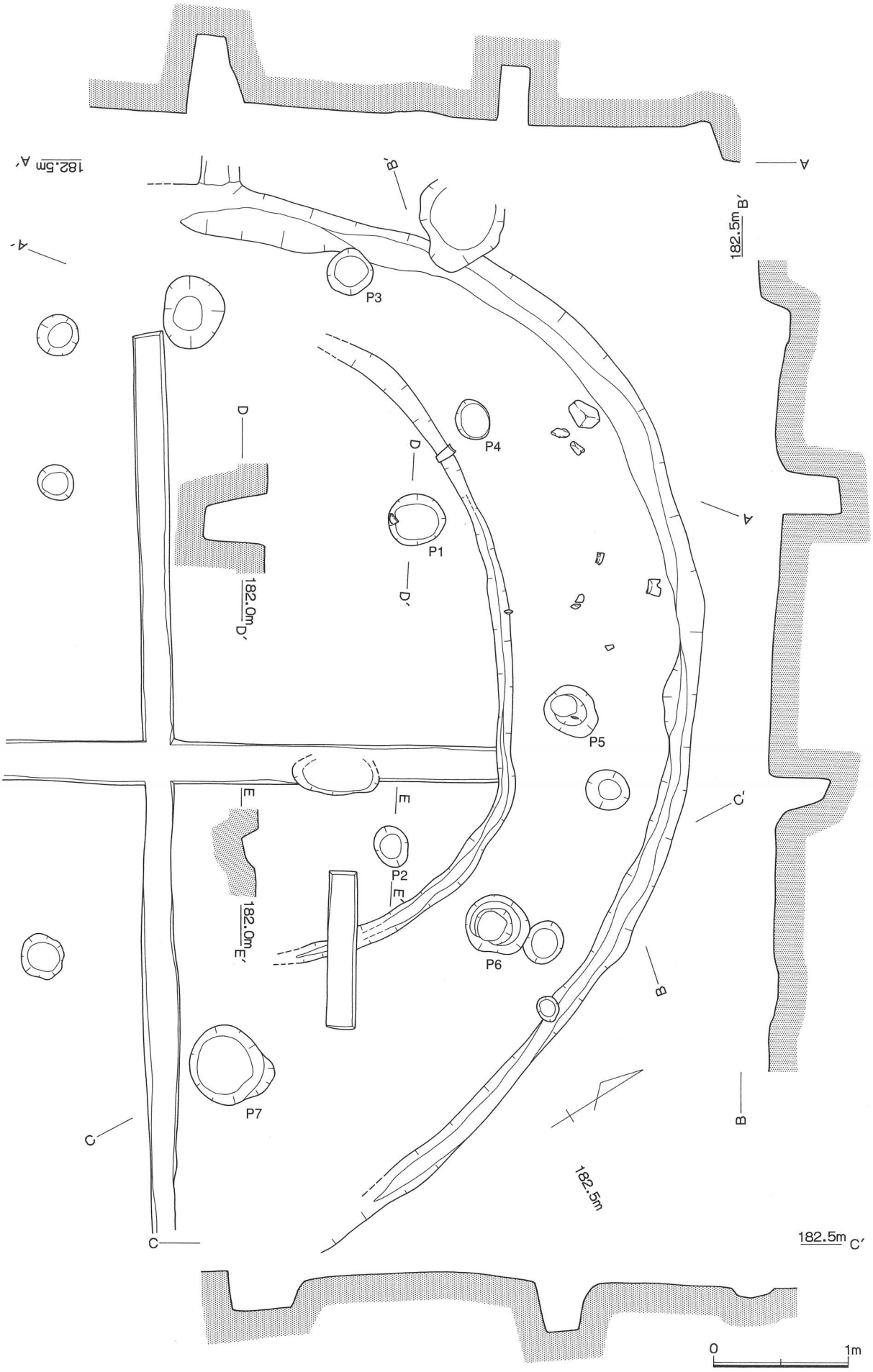
第26図　垣ノ内遺跡 SI01・07出土遺物（1～16は S=1/4、17は S=2/3）

SI02・04（第27～29図、図版21～23）

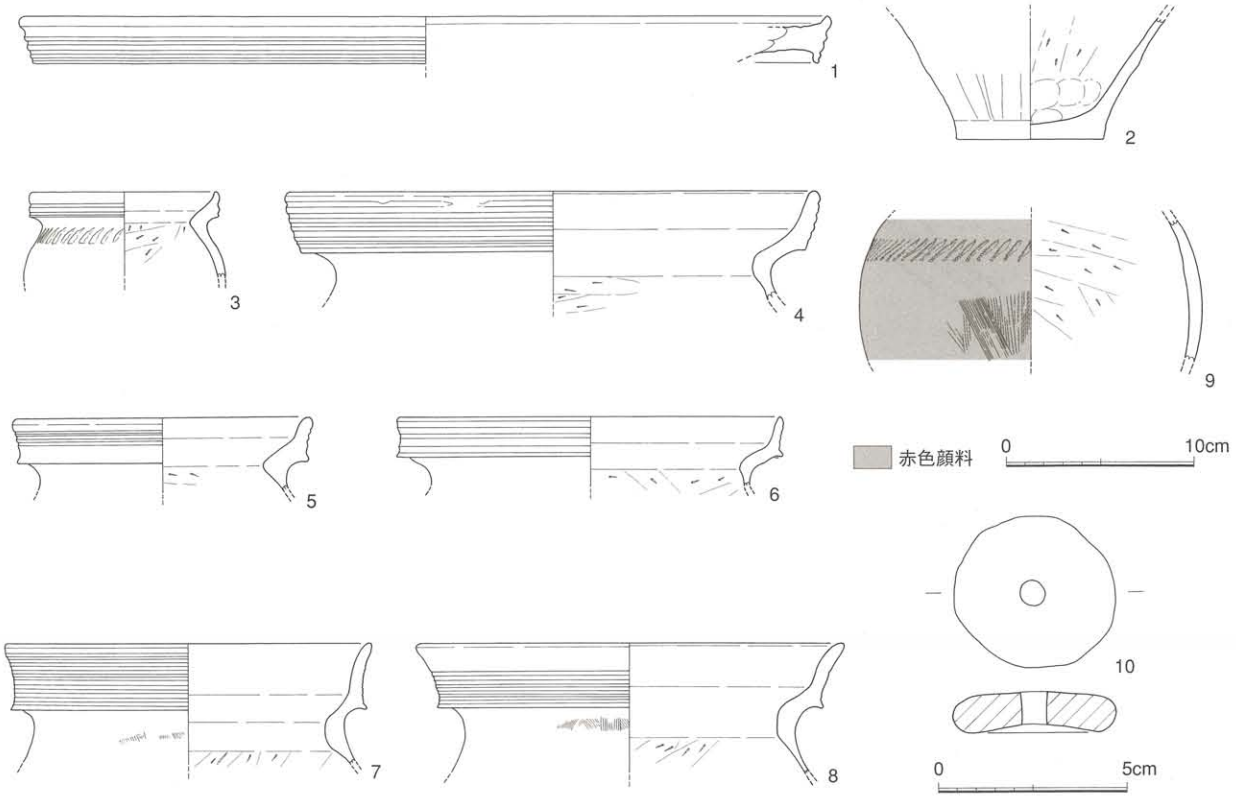
SI02と04は竪穴住居群の中央に位置する住居である。便宜上、調査でまず検出した外側の壁体溝を持つ住居がSI02、追って内側に検出した壁体溝を用いる住居をSI04とした。SI02の床面は北西側の幅約50cmは地山層に掘り込まれているが、それ以外の部分は黒色土上に形成されており、検出が困難であった。サブトレンチのセクションで、床面と考えられる白色砂粒を多く含む厚さ0.8～1cmの硬化面を確認したが、全面で検出することはできなかった。調査では、部分的に確認できた硬化面のレベルを基準に精査を行い、SI04の壁体溝とピットを確認し、写真撮影、図化を行った。SI02・04間に床面のレベル差は確認できなかった。またSI04の壁体溝や柱穴を埋めて、新たに床面を成形した形跡は確認できなかったので、SI04→SI02の構築順が想定される。

第28図には出土遺物を挙げている。1、2は中期後半の広口壷片、3～9は後期の壷・甕類、10は土器片を用いた紡錘車である。

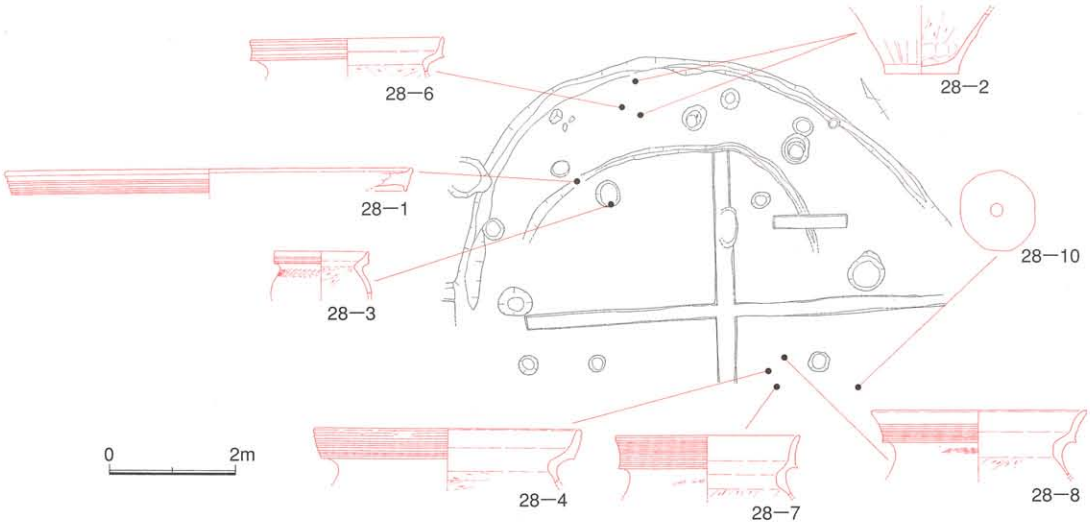
出土遺物は、中期後半（Ⅳ－2）から後期（Ⅴ－3）までが確認できる。中期の遺物は竪穴壁面近くの出土で、SI02の床面から明らかに3～5cm浮いていたことから覆土とともに流れ込んだ可能



第27図　垣ノ内遺跡 SI02・04実測図（S＝1/40）



第28図　垣ノ内遺跡 SI02・04出土遺物（1～9は S=1/4、10は S=1/2）

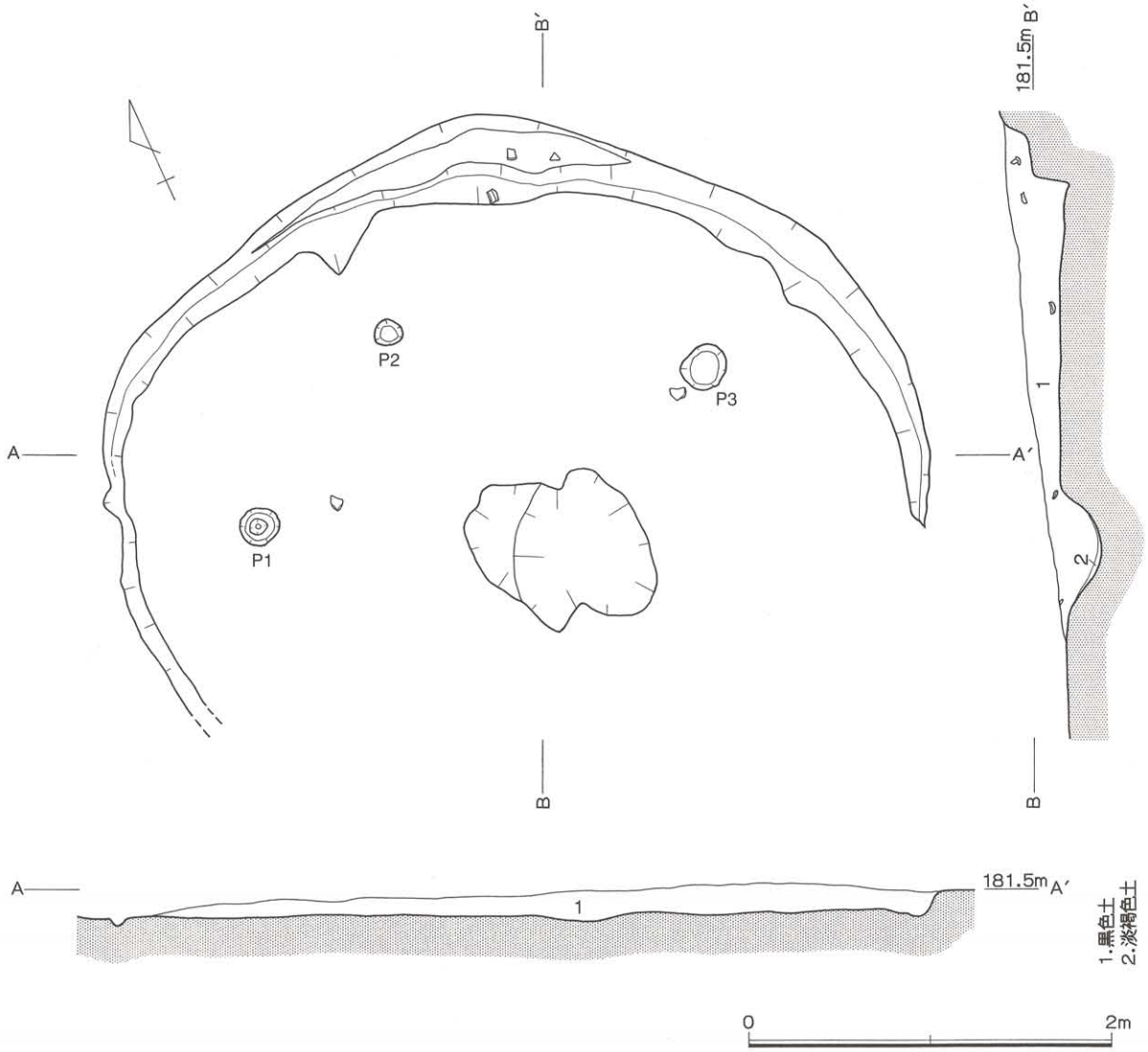


第29図　垣ノ内遺跡 SI02・04遺物出土状況図

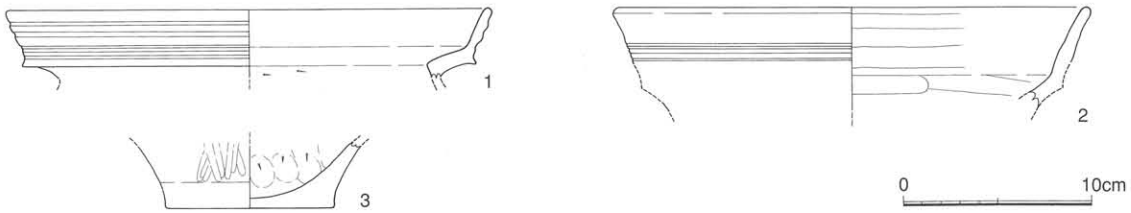
性が高い。一方3～10は出土位置の床面自体が確実に押さえられていないため厳密ではないが、床面上1㎝前後の範囲内で出土しているのは確実である。構築はSI04→SI02の順が考えられるため、SI02は後期後葉に位置づけられ、SI04はそれ以前のものとなる。

SI03（第30～32図、図版23）

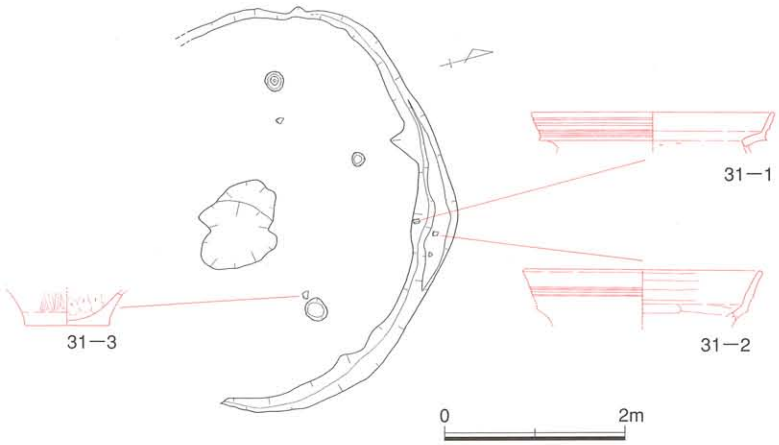
円形の竪穴住居で、柱穴3と中央穴を確認した。南側約1/2は流失してしまっている。竪穴は深さがあまり無いが、後述するSB04～06が北側に隣接し、この遺構面が直上にあたることから、竪



第30図　垣ノ内遺跡 SI03実測図（S=1/40）



第31図　垣ノ内遺跡 SI03出土遺物（S=1/4）



第32図
垣ノ内遺跡 SI03遺物出土状況図

第33図　垣ノ内遺跡 SI05・08実測図（S＝1/60）

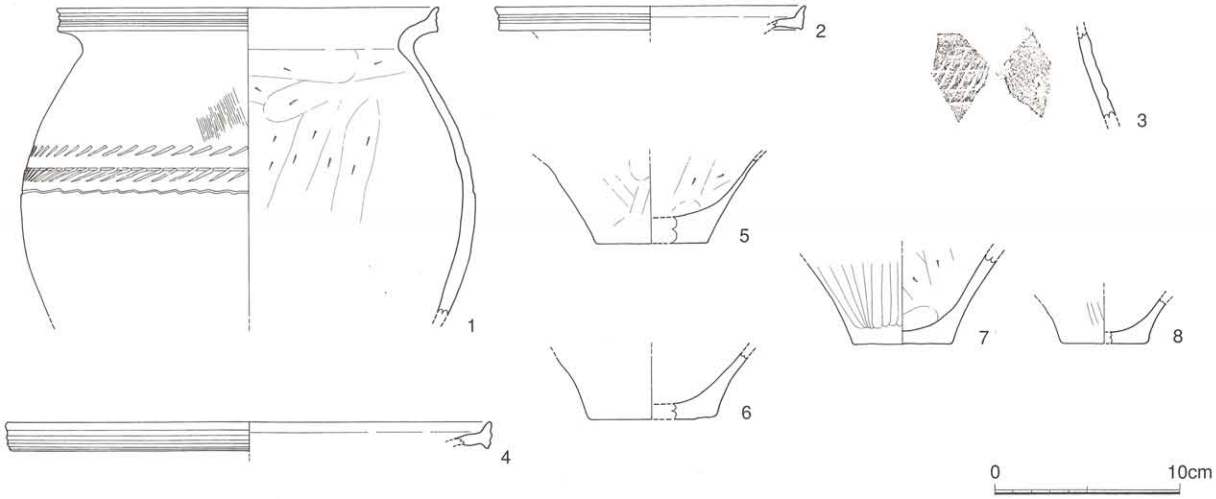
穴自体も上部が削平された可能性が高い。壁体溝ははっきりしておらず、竪穴の壁面に沿って僅かにくぼむ程度である。また北側壁面にテラス状に段が付くが、その機能は不明である。他の竪穴住居に比べて柱穴の径が小さいのが特徴で、配置も５本あるいは６本柱と考えられる。中央穴は平面がＨ形に凹凸のあるもので、西側に中段が付く。覆土には炭粒が多量に含まれ、底面には焼土（２層）が残る。

出土遺物は少なく、図化できたものは３点にすぎない。１、２は甕の口縁で、粗雑に凹線文を入れている。これらの遺物は後期中葉から後葉に位置づけられる。

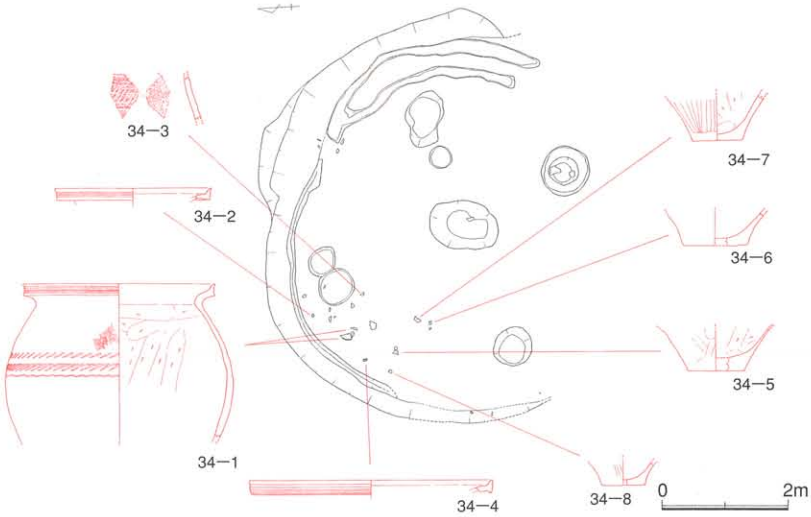
SI05・08（第33～35図、図版24・25）

Ｂ区、Ｃ区の境界付近に検出した竪穴住居である。当初の調査区の角地に位置していたため、竪穴との認識が遅れ、検出時には調査区畦部分を残して覆土の大部分が掘り上げていた。そのため覆土中の遺物はコンテナ１箱あるが、出土位置と層位が全く不明である。

SI05・08は円形４本柱の竪穴住居で、ほぼ中心に中央穴を配置する。東側の壁体溝は２重に廻るが、床面のレベルに差は無く、ごく短期間に建て替えられたと考えられる。Ｐ１、Ｐ２は共用されており、Ｐ３、Ｐ４もほぼ同じサイズで柱穴を開けている。東側にシフトしているＰ３－２とＰ４－２に対応する壁体溝が、同じく東にシフトしている外側の溝とすれば、SI05→SI08という変遷が考えられよう。

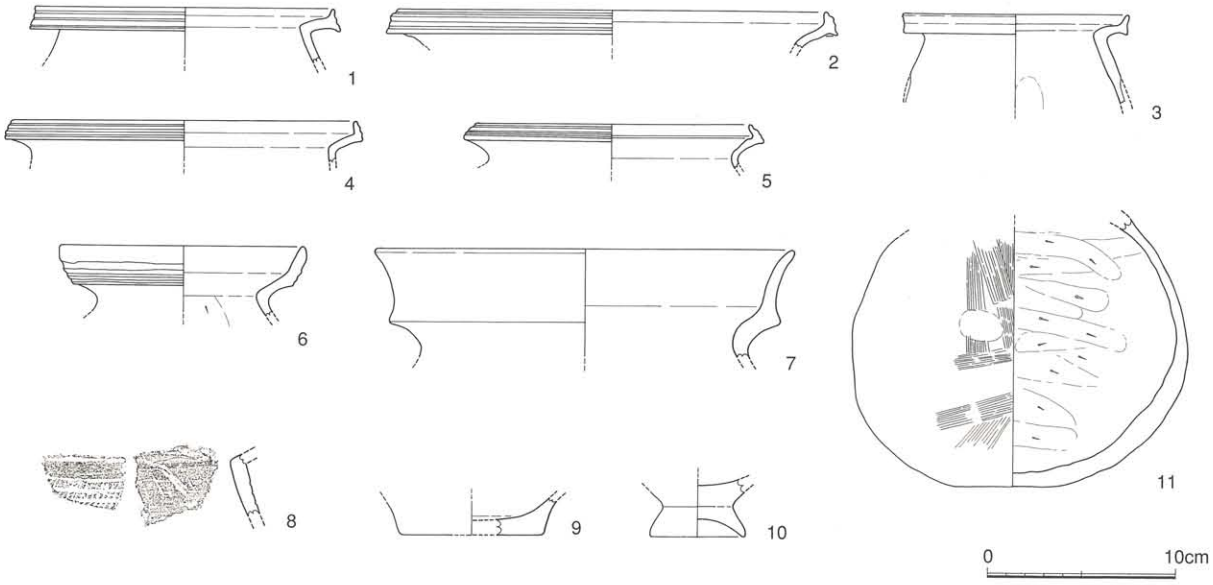


第34図
垣ノ内遺跡 SI05・08出土遺物
(S=1/4)



第35図
垣ノ内遺跡 SI05・08遺物出土状況図

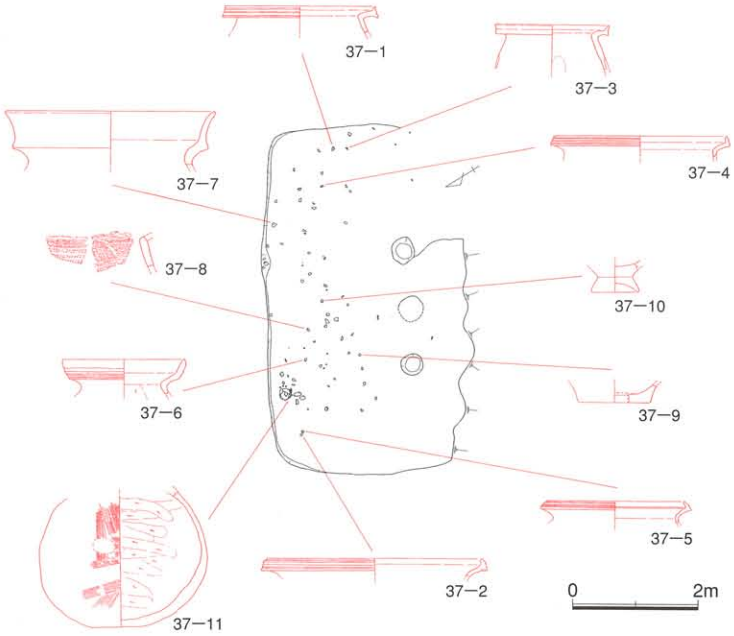
第36図　垣ノ内遺跡 SI06実測図（S=1/40）



第37図　垣ノ内遺跡 SI06出土遺物（S＝1/4）

なお隣接して別の加工段があり当初は背後に平坦面を配置する竪穴住居として認識していたが、セクションを見る限り、同時期のものとは考えにくい。平面上も東西にズレが認められることから、この加工段は全く別の遺構であり、S105、08が覆土に埋まって以降に構築されたものと考えられる。

第34図は床面上の出土遺物である。中期後半（Ⅳ－２）から後期初頭（Ⅴ－１）に位置づけられる。１は内面のケズリが頸部直下まで上がってくる甕である。３は頸部に多条凹線と刻目文が入る塩町式土器の甕片である。



第38図　垣ノ内遺跡 SI06遺物出土状況図

SI06（第36～38図、図版25～27）

縄文時代の包含層に掘り込まれた竪穴住居である。平面が方形で中心部に柱穴が２本並ぶもので、南半部は流失している。中央穴は10cmで、周辺に焼土面が広がっている。床面は中央穴周辺に黄色の粘質土が敷かれているものの、西半部ではややしまりのある硬化面でしかなかった。床面は東西壁面から中央に向かって微妙に傾斜している。

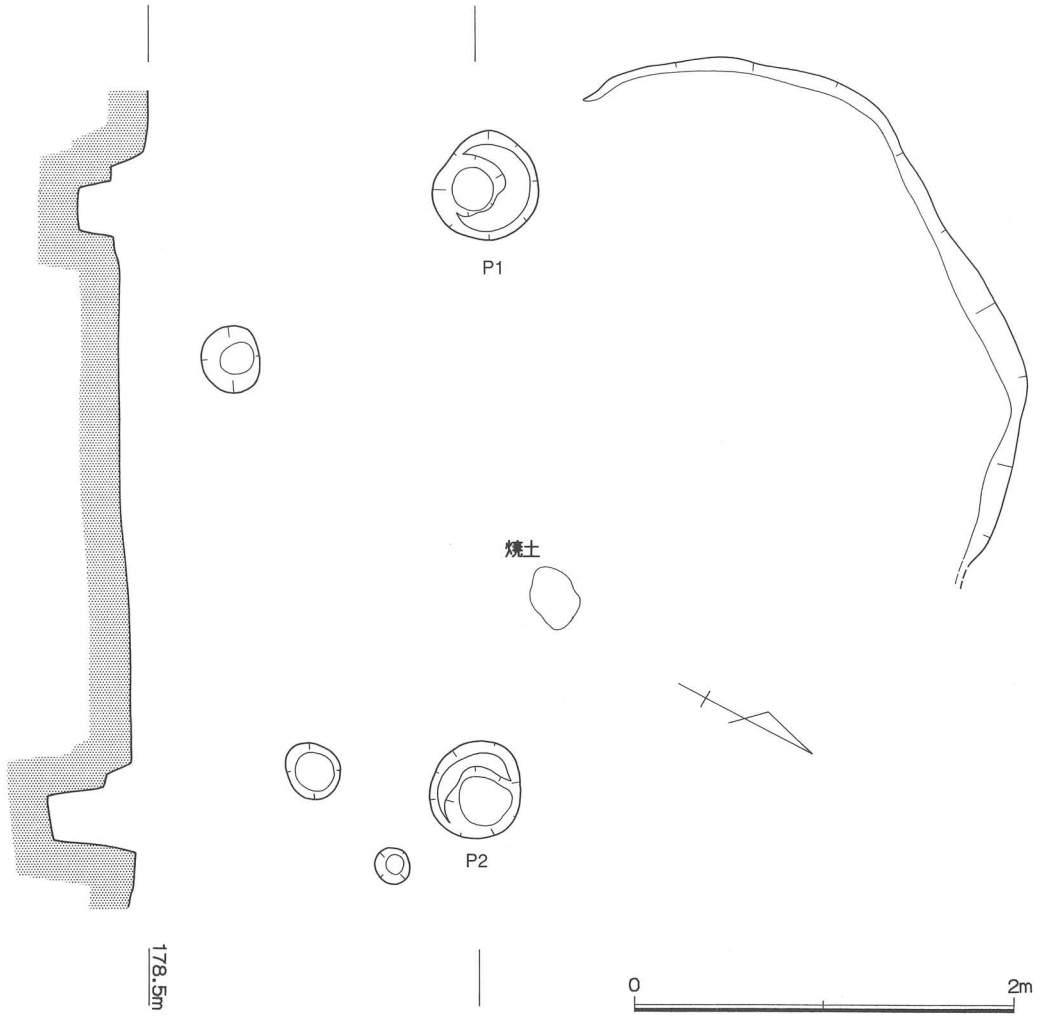
出土遺物は１～５、８、９が床面出土の中期後半（Ⅳ－２）の甕・壷で、８は塩町式土器の頸部である。６、７は覆土中の土器で後期の壷と甕、10は低脚坏である。11は覆土から出土した土師器

の甕で、内面には深いケズリが入る。口縁部は出土していない。

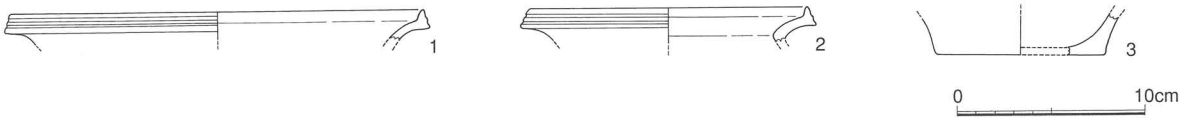
SI06の時期は遺物から見て中期後半（Ⅳ－２）と考えられる。11は中央のセクションから見て、比較的早い時期の覆土から出土していることになるが、土器の周囲に明確な掘り方を確認できなかったので、この土器がSI06に伴うものか、別の遺構によるものかは不明である。

SI09（第39・40図、図版27）

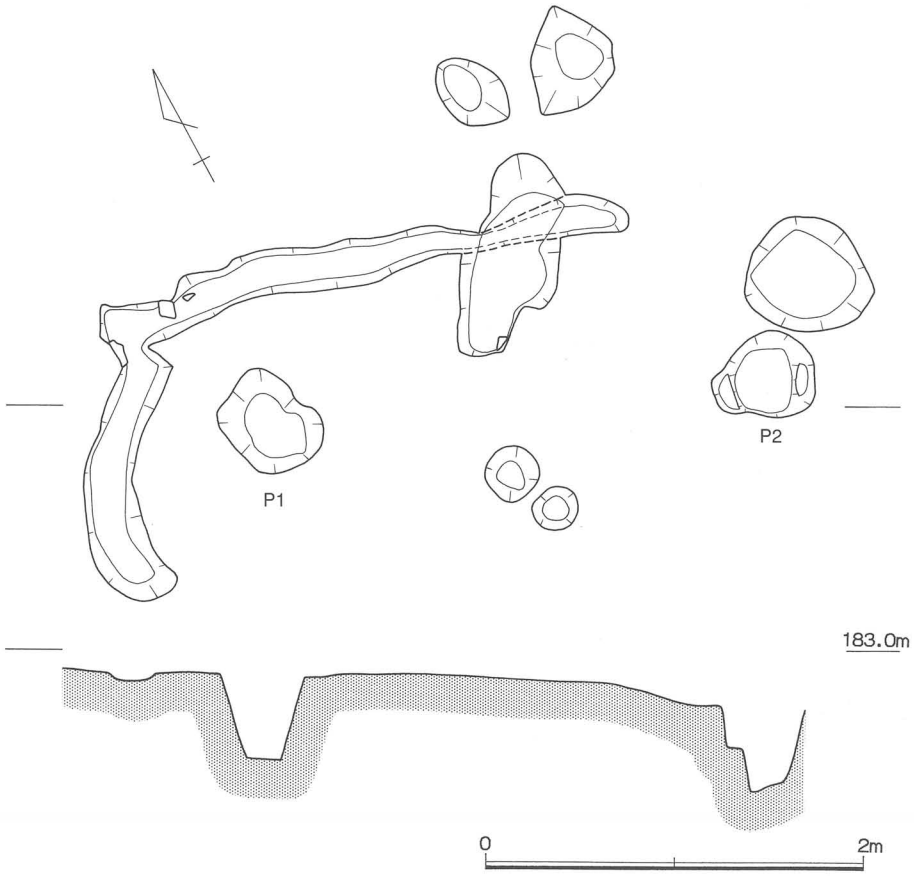
SI05の東側に検出した竪穴で、段の付く柱穴を２穴を確認した。南側は流失し、全体の規模は不明であるが、２本柱の建物の可能性がある。竪穴は一部が残るのみで、壁体溝はない。床面はややしまりのある硬化面で、白色の粒子を含む。柱穴間のやや北側に焼土面が検出された。出土遺物は少なく、図化したものも小片である。口縁のみのため、頸部ケズリの有無は不明だが、中期後半（Ⅳ－２）から後期初頭（Ⅴ－１）の遺物である。



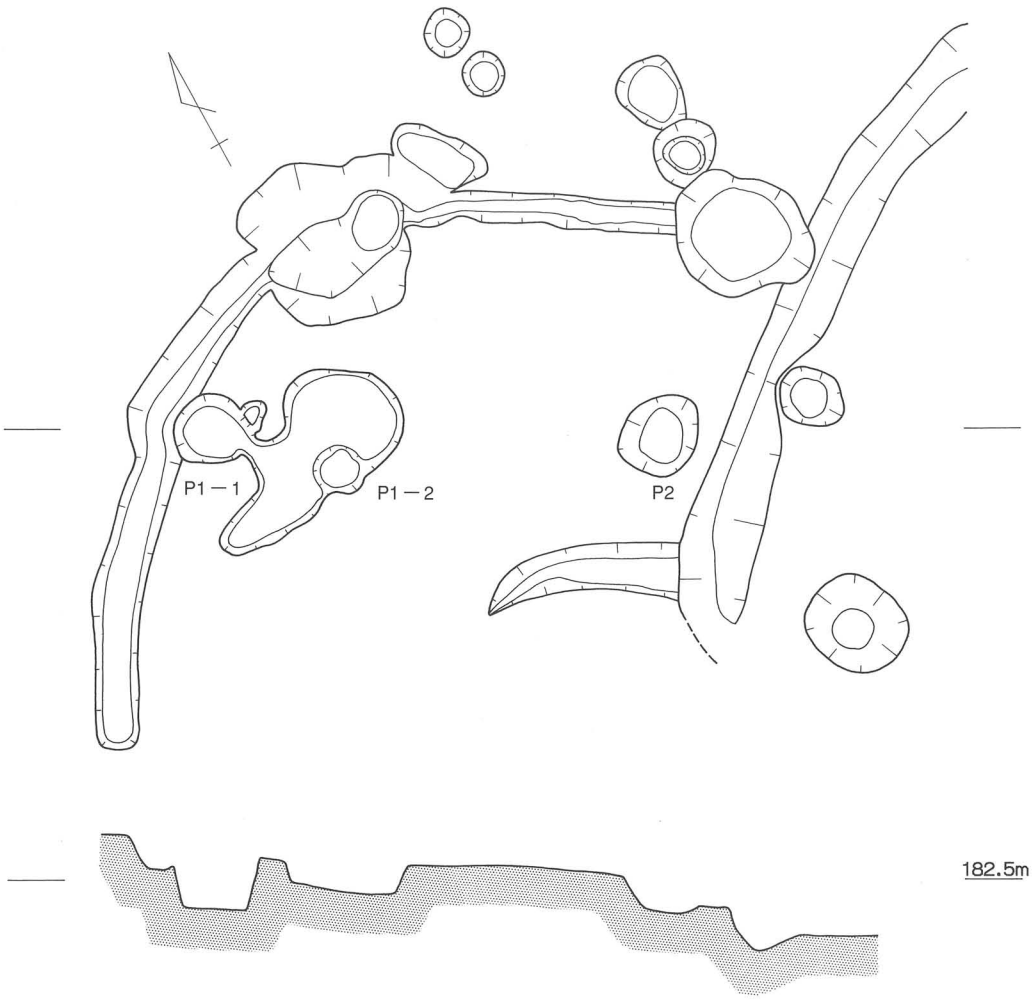
第39図　垣ノ内遺跡 SI09実測図（S＝1/40）



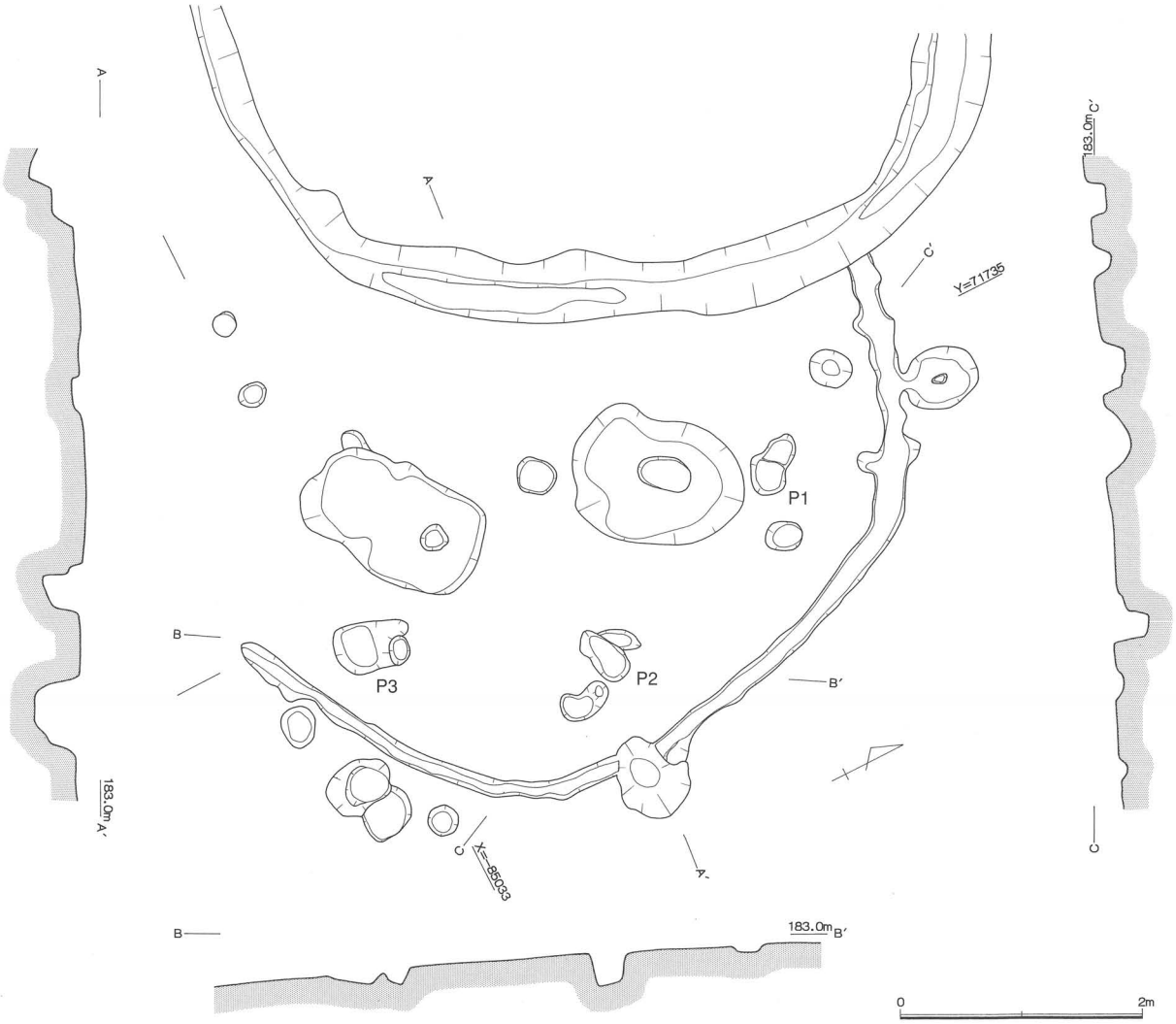
第40図　垣ノ内遺跡 SI09出土遺物（S＝1/4）



第41図　垣ノ内遺跡 SI10
実測図（S＝1/40）



第42図　垣ノ内遺跡 SI11実測図（S＝1/40）



第43図　垣ノ内遺跡 SI12実測図（S＝1/60）

SI10、SI11、SI12（第41～43図、図版28・29）

SI01と SI04に挟まれて検出した３つの竪穴住居である。SI10、SI11は隅丸方形の住居址で、壁体溝で区画される住居である。地山土層が急激に落ち込む場所にあたり、床面の造成土と覆土の区別は困難であった。また時期不明の土坑とピットが入り乱れており、それぞれに付随する柱穴を判別することはできなかった。一方、SI12は SI01に西側を切られた状態で出土した竪穴住居で、壁体溝を見る限りでは六角形もしくは円形の建物が想定される。この場所も時期不明のピットが入り乱れており、覆土のセクション検討などからは柱穴を把握することができなかった。表９には、竪穴住居に伴うと推定されるピットについて、計測値を載せている。柱穴の配置にはなお不明な点が多いため、参考として各ピット間の距離を載せている。

各竪穴住居の時期は、周辺の遺構との切り合い関係から推定するほかにない。SI10は SI04と SI11に切られており、SI11も SI04に切られているので、SI10→SI11→SI04の構築順が想定できる。SI04はＶ－３期以前の構築であるから、SI10、SI11はさらに溯ることがわかる。おそらくは中期後半から後期前葉に収まるだろう。SI12については切り合う SI01、07との関係から導く以外にない。平面上見る限り、SI12が SI07の範囲にも掛かるのは確実であり、SI07構築以前（後期前葉以前）に建てられたか、SI07廃棄の後 SI01が建てられるまでの間に存在したか、のどちらかが想定される。